柏崎市埋蔵文化財調査報告書第96集

柏崎市の遺跡29

―新潟県柏崎市内遺跡　平成30(2018)年度試掘調査等報告書―

2019
(令和元年)

柏崎市教育委員会

柏崎市の遺跡29

―― 新潟県柏崎市内遺跡　平成30(2018)年度試掘調査等報告書 ――

2019
(令和元年)

柏崎市教育委員会

序

本書は、柏崎市教育委員会が平成30（2018）年度に各種土木工事に伴い実施した試掘・確認調査の記録集です。

調査遺跡は多くの場所で発見されることから、地域に密着した文化財と言えます。しかしながら、通常は地中に埋まったままであり、私たちの生活とは長い間切り離された状態にあります。発掘調査を行うことで、初めて遺跡の存在や内容を見ることができます。長期間の発掘調査の場合は、可能な限り現地説明会を開催し、より多くの市民の皆様に遺跡を公開していています。その一方で、小規模で短期間で行われる試掘・確認調査などの多くは、御覧いただくことができないのが現実であります。

また、今年度には文化財保護法の一部が改正されました。その趣旨は、地域における文化財の計画的な保存・活用の促進や、文化財保護行政の推進力の強化を図るものです。そして、文化財の活用が地域活性に貢献することも期待されています。これらのことを踏まえ、当市としましても引き続き規模の大小に関わらず埋蔵文化財調査に適切に取り組み、次世代に残し、活用できる記録としての報告書作成に努めていきたいと考えております。

当市で実施する試掘・確認調査は、柏崎市内遺跡発掘調査事業として国県の補助金を得て実施しています。第29期となる令和元（2019）年度は、これまでに5件の調査を実施しています。併せて、平成30年度（第28期）に実施した調査の整理業務も継続して行っています。本書では、第28期に実施した計8件の調査の記録を収録しています。主な成果としては、4つの新たな遺跡を発見しました。工事と埋蔵文化財保護の両立を図るため、協議資料を得ることのできる試掘調査等の重要性は高いといえます。各調査で得られた資料の蓄積が、地域の方々の目に触れ、文化財の保存･活用へとつながれば幸いに思います。

最後に、埋蔵文化財の保護に御理解と御協力をいただいた各土木工事等の事業主体者及び関係各位、日頃から本事業に格別なる御助力と御配慮をいただいている新潟県教育委員会、そして調査に御尽力いただいた調査員・補助員の皆様に対し、深く感謝と御礼を申し上げます。

令和元（2019）年12月

柏崎市教育委員会

教育長　近　藤　喜　祐

例　　言

1．本報告書は、新潟県柏崎市における各種の土木工事等に伴って実施した試掘調査･確認調査等の記録である。

2．本報告書は、柏崎市教育委員会が主体となり、国･県の補助金を得て平成3（1991）年度から実施している「柏崎市内遺跡発掘調査等事業」により作成した。令和元年度は第29年次（第29期）であることから、本報告書は『柏崎市の遺跡29』とした。

3．第29期で刊行する本報告書は、平成30（2018）年度に実施した、合計8件の試掘調査等の報告を所収する。試掘調査等の内訳は、周知の埋蔵文化財包蔵地における確認調査5件、試掘調査3件である。なお、同年度に実施した西岩野遺跡第7次確認調査は別書に所収する予定である。

4．各調査の現場業務は、主に博物館職員及び埋蔵文化財事務所のスタッフを調査員･調査補助員として実施した。整理･報告書作成業務は、埋蔵文化財事務所（柏崎市西山町坂田）において、職員（学芸員）を中心に行った。

5．調査によって出土した遺物の注記は、各遺跡・地区等の略称の他、試掘坑名、層序等を併記した。

6．本事業で出土した遺物並びに調査や整理業務の過程で作成した図面・記録類は、すべて一括して柏崎市教育委員会（埋蔵文化財事務所）が保管・管理している。

7．本報告書の執筆は、次のとおりの分担執筆とし、編集は平吹が行った。

第Ⅱ章、第Ⅲ章、第Ⅴ章、第Ⅷ章…… 中島義人

その他……平吹　靖

8．本書掲載の図面類の方位は全て真北（座標北）である。

9．発掘調査から本書作成に至るまで、それぞれの事業主体者及び関係者等から様々な御協力と御理解を賜った。記して厚く御礼を申し上げる次第である。

滝沢規朗　田海義正　橋本博文　上条町内会　畔屋地区町内会　北鯖石コミュニティセンター　北条コミュニティセンター　畔屋地区活性化委員会　本条地区活性化委員会　株式会社藤真工業　柏崎土地改良区　新潟県（柏崎地域振興局）　新潟県教育委員会　公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　柏崎市

（順不同・敬称略）

目　　次

Ⅰ　序　　説 …… 1

Ⅱ　藤元町地点 …… 5

Ⅲ　西岩野遺跡（第６次） …… 8

Ⅳ　城東地点 …… １７

Ⅴ　曽地新田地点 …… ２０

Ⅵ　畔屋地区 …… ２２

Ⅶ　本条地区 …… ３３

Ⅷ　上条城跡隣接地（第２次） …… ４５

Ⅸ　馬場・天神腰遺跡（第４次） …… ４８

Ⅹ　総括 …… ５２

〈引用・参考文献〉 …… ５２

〈報告書抄録〉 …… 巻末

図版目次

図版1　藤元町地点　1
図版2　藤元町地点　2
図版3　西岩野遺跡（第２次）　1
図版4　西岩野遺跡（第２次）　2
図版5　西岩野遺跡（第２次）　3
図版6　西岩野遺跡（第２次）　4
図版7　西岩野遺跡（第２次）　5
図版8　城東地点　1
図版9　城東地点　2
図版10　曽地新田地区
図版11　畔屋地区　1
図版12　畔屋地区　2
図版13　畔屋地区　3
図版14　畔屋地区　4
図版15　畔屋地区　5
図版16　畔屋地区　6
図版17　畔屋地区　7
図版18　畔屋地区　8
図版19　本条地区　1
図版20　本条地区　2
図版21　本条地区　3
図版22　本条地区　4
図版23　本条地区　5
図版24　本条地区　6
図版25　本条地区　7
図版26　本条地区　8
図版27　本条地区　9
図版28　本条地区　１０
図版29　本条地区　１１
図版30　上条城跡隣接地（第２次）
図版31　馬場・天神腰遺跡（第４次）　1
図版32　馬場・天神腰遺跡（第４次）　2

挿図目次

第1図　平成30年度柏崎市埋蔵文化財調査（現場業務）工程図／2
第2図　平成30年度試掘調査等位置図／4
第3図　藤元町地点試掘調査　調査位置図　／5
第4図　藤元町地点試掘調査　土層柱状模式図　／6
第5図　藤元町地点試掘調査　トレンチ位置図　／6
第6図　藤元町地点試掘調査　トレンチ平面図　／7
第8図　西岩野遺跡（第6次）　調査位置図　／9
第9図　西岩野遺跡（第6次）　トレンチ位置図　／9
第10図　西岩野遺跡（第6次）　調査トレンチ個別図1　／11
第11図　西岩野遺跡（第6次）　調査トレンチ個別図2　／12
第12図　西岩野遺跡（第6次）　調査トレンチ個別図3　／13
第13図　西岩野遺跡（第6次）　調査トレンチ個別図4　／14
第14図　西岩野遺跡（第6次）　出土遺物実測図　／16
第15図　城東地区試掘調査　対象区位置図　／18
第16図　城東地区試掘調査　トレンチ配置図　／18
第17図　城東地区試掘調査　基本層序柱状模式図　／19
第18図　曽地新田地点試掘調査　調査位置図　／20
第19図　曽地新田地点試掘調査　トレンチ配置図・土層柱状模式図　／21
第20図　畔屋地区試掘調査　対象区位置図　／23
第21図　畔屋地区試掘調査　トレンチ配置図1　／24
第22図　畔屋地区試掘調査　トレンチ配置図2　／25
第23図　畔屋地区試掘調査　トレンチ配置図3　／26
第24図　畔屋地区試掘調査　基本層序柱状模式図　／29
第25図　畔屋地区試掘調査　出土遺物　／30
第26図　本条地区試掘・確認調査　対象区位置図　／34
第27図　本条地区試掘・確認調査　トレンチ配置図1　／36
第28図　本条地区試掘・確認調査　トレンチ配置図2　／37
第29図　本条地区試掘・確認調査　トレンチ配置図3　／38
第30図　本条地区試掘・確認調査　トレンチ配置図4　／39
第31図　本条地区試掘・確認調査　トレンチ配置図5　／40
第32図　本条地区試掘・確認調査　検出遺構見取図　／41
第33図　本条地区試掘・確認調査　基本層序柱状模式図　／43
第34図　上条城跡隣接地（第2次）　試掘調査　調査位置図　／46
第35図　上条城跡隣接地（第2次）　トレンチ位置図　／47
第36図　上条城跡隣接地（第2次）　土層柱状模式図　／47
第37図　馬場・天神腰遺跡（第4次）確認調査　対象区位置図　／49
第38図　馬場・天神腰遺跡（第4次）確認調査　トレンチ配置図　／50
第39図　馬場・天神腰遺跡（第4次）確認調査　検出遺構見取図　／51
第40図　馬場・天神腰遺跡（第4次）確認調査　基本層序柱状模式図　／51

挿表目次

第1表　柏崎市内遺跡発掘調査等事業調査体制　／2
第2表　西岩野遺跡（第6次）調査トレンチ一覧表　／10
第3表　西岩野遺跡（第6次）調査出土遺物一覧表　／16
第4表　畔屋地区試掘調査　トレンチ一覧表　／28
第5表　畔屋地区試掘調査　出土遺物観察表　／31
第6表　本条地区試掘・確認調査　トレンチ一覧表　／42

Ⅰ 序　説

1　平成30（2018）年度 柏崎市の埋蔵文化財業務

柏崎市教育委員会（以下、柏崎市教委とする）では、補助事業として第28期となる平成30（2018）年度も国県の補助金を得て緊急目的の試掘調査等を実施し、第29期となる令和元（2019）年度（当該年度）に整理作業を継続した。本書には、おもに平成30（2018）年度に実施した試掘調査等について調査成果を掲載した。以下では、平成30（2018）年度の調査業務について概観する。

業務概要　平成30（2018）年度、市教委では、文化財保護法第93条の届出11件、第94条の通知15件を受理した（平成29（2017）度、届出16件、通知13件）。また、土木工事等に係る埋蔵文化財の所在確認が55件（平成29（2017）年度、68件）、不動産調査に係る所在確認は86件（平成29（2017）年度、78件）依頼があった。

実施した調査（現場業務）としては、本発掘調査2件、試掘調査・確認調査9件、工事立会20件である。また、各種調査に伴う整理作業も並行して進めており、3冊の報告書（『柏崎市の遺跡28』・『布目・前谷地』・『西岩野2』）を刊行している［柏崎市教委2018・同2019a・同2019b］。

その他、柏崎市立博物館において企画展示を2件開催した。1件目は「ドキドキ!? 縄文土器 -大むかしの文様-」と題し、縄文土器に施された数々の文様にスポットをあてた（5月3日～3月31日）。展示では、復元土器、土器片、文様を施すための原体と施文した粘土板をそれぞれ展示し、原体をどのように使用すると文様ができるのかを分かりやすく解説した。2件目は「古代三嶋郡の世界－奈良平安時代のくらしと鉄生－」と題し、柏崎市域で発掘調査された奈良・平安時代の集落遺跡と製鉄遺跡の特徴について迫った（10月13日～11月25日）。暮らしに関わる集落遺跡と生産遺跡に区分して紹介し、それぞれの特徴が分かるよう遺物展示やパネル解説を行った。併せて、展示解説4回、11月4日には関連報告会も行った。

試掘調査・確認調査　各種の開発事業等について、施工区域内における遺跡の有無等を確認するための試掘調査、範囲・性格・内容等の概要までを把握するための確認調査を実施した。平成30（2018）年度に実施した全9件の試掘調査・確認調査（保存目的で実施した西岩野遺跡第7次確認調査の1件は、別書にて掲載予定）を原因事業別にまとめると、県営ほ場整備事業2件（畔屋地区、本条地区）、県道改良工事2件（西岩野遺跡第6次、馬場・天神腰遺跡第4次）、県河川改修工事1件（曽地新田地点）、市道改良工事2件（藤元町地点、上条城跡隣接地第2次）民間等事業1件（城東地点）となる。なお、平成29（2017）年度に実施した試掘調査・確認調査の件数は6件、平成28（2016）年度の実施件数が9件であり、柏崎市における調査件数は、近年、横ばい状態となる。ただし、県営ほ場整備事業に係る試掘・確認調査の調査対象面積については近年増加している。

工事立会　調査対象範囲が狭小な場合や、工事による遺跡への影響が軽微である場合などにおいて実施した。平成30（2018）年度に実施した20件（遺跡）の工事立会を原因事業別にみると、県営ほ場整備事業9件（番ヶ表遺跡、大割遺跡、布目遺跡、ワゴ遺跡、山室深町遺跡、不退寺遺跡、内田遺跡、小寺島南遺跡、長嶺江添遺跡）、県道工事2件（坂田遺跡、馬場・天神腰遺跡）、市関連工事4件（住吉遺跡、宮平

遺跡、宮原Ａ遺跡、西岩野遺跡)、その他民間工事5件（箕輪遺跡、伝大寺跡、北条城跡、大清水城跡、）となる。民間工事は住宅建築に係るものが大半であり、1遺跡に対し複数の工事が対象となる場合がある。文化財保護法の届出とともに増加傾向にある。

本発掘調査　記録保存のための本発掘調査として、県営ほ場整備事業に伴う長嶺川田遺跡、長嶺江添の塚の調査、計2件を実施した。長嶺前田遺跡は古墳時代、古代、中世の遺物と遺構が発見された。長嶺江添の塚は、構築土に含まれている遺物等から近世の塚となる可能性がある。本発掘調査に伴う報告書は業務概要のとおり2冊を刊行することができた。

遺跡名・地区名	所在地	調査原因	4月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	対象面積	掲載章	備　考
本発掘調査																	
長嶺川田遺跡	西山町長嶺	県営ほ場整備													508		
長嶺江添の塚	西山町長嶺	県営ほ場整備													105		
試掘調査・確認調査																	
藤元町西遺跡	藤元町	市道改良工事													520	Ⅱ	
西岩野遺跡	長崎	県営ほ場整備													1,413	Ⅲ	
城東地点	城東	県営ほ場整備													704	Ⅳ	
曽地新田地点	曽地新田	県河川改修工事													1,600	Ⅴ	
西岩野遺跡	長崎	（保存目的）													48,000		別冊で報告
畔屋地区	畔屋	県営ほ場整備													250,000	Ⅵ	
本条地区	本条ほか	県営ほ場整備													380,000	Ⅶ	
上条城跡隣接地	上条	市道改良工事													580	Ⅷ	
馬場・天神腰遺跡	南条	県道改良工事													158	Ⅸ	
工事立会																	
番ヶ表遺跡	西山町五日市	県営ほ場整備															
箕輪遺跡	半田１丁目	民間工事															
大割遺跡	西山町五日市	県営ほ場整備															
布目遺跡	堀	県営ほ場整備															
坂田遺跡	西山町坂田	県道改良工事															
ワゴ遺跡	西山町田沢	県営ほ場整備															
山室深町遺跡	山室	県営ほ場整備															
馬場・天神腰遺跡	南条	県道改良工事															
伝大寺跡	高柳町板畑	民間工事															
住吉遺跡	加納	市水道工事															
不退寺遺跡	下田尻	県営ほ場整備															
山王前遺跡	宮平	市道改良工事															
宮原Ａ遺跡	女谷	市教委標柱工事															
剣下川原遺跡	劔	民間工事															
内田遺跡	西山町伊毛	県営ほ場整備															
北条城跡	北条	民間工事															
大清水城跡	大清水	民間工事															
小島寺南遺跡	新道	県営ほ場整備															
西岩野遺跡	山本	調整池撤去工事															
長嶺江添遺跡	西山町長嶺	県営ほ場整備															

（単位：㎡）

第１図　平成30（2018）年度柏崎市埋蔵文化財調査（現場業務）工程図

年度／業務	平成30（2018）年度 現場業務・整理業務	令和元（2019）年度 整理業務
調査主体	柏崎市教育委員会　教育長　本間敏博（～平成31（2019）年３月） 近藤喜祐（平成31（2019）年４月～）	
所　　管	博物館　埋蔵文化財係	
総　　括	近藤拓郎（教育部長）	
	高橋達也（館長）	小黒利明（館長）
監　　理	小池久明（館長代理兼係長）	
庶　　務	髙野智佳（非常勤職員）	
調査担当	平吹　靖（主任・学芸員） 中島義人（主任・学芸員）	平吹　靖（主任・学芸員） 中島義人（主任・学芸員） 品田髙志（再任用）
調 査 員	池田孝博（主査・学芸員） 徳間香代子（非常勤職員） 池田朝子（非常勤職員） 白井かおり（非常勤職員）	池田朝子（非常勤職員） 白井かおり（非常勤職員）
調査・整理補助員	池田文江、加藤章恵、白川智恵、山岸サチ子	池田文江、加藤章恵、白川智恵、徳間香代子、山岸サチ子

第１表　柏崎市内遺跡発掘調査等事業調査体制

2　調査体制

平成30（2018）年度の現場業務から令和元（2019）年度の報告書刊行に至るまでの調査体制は、第1表のとおりである。

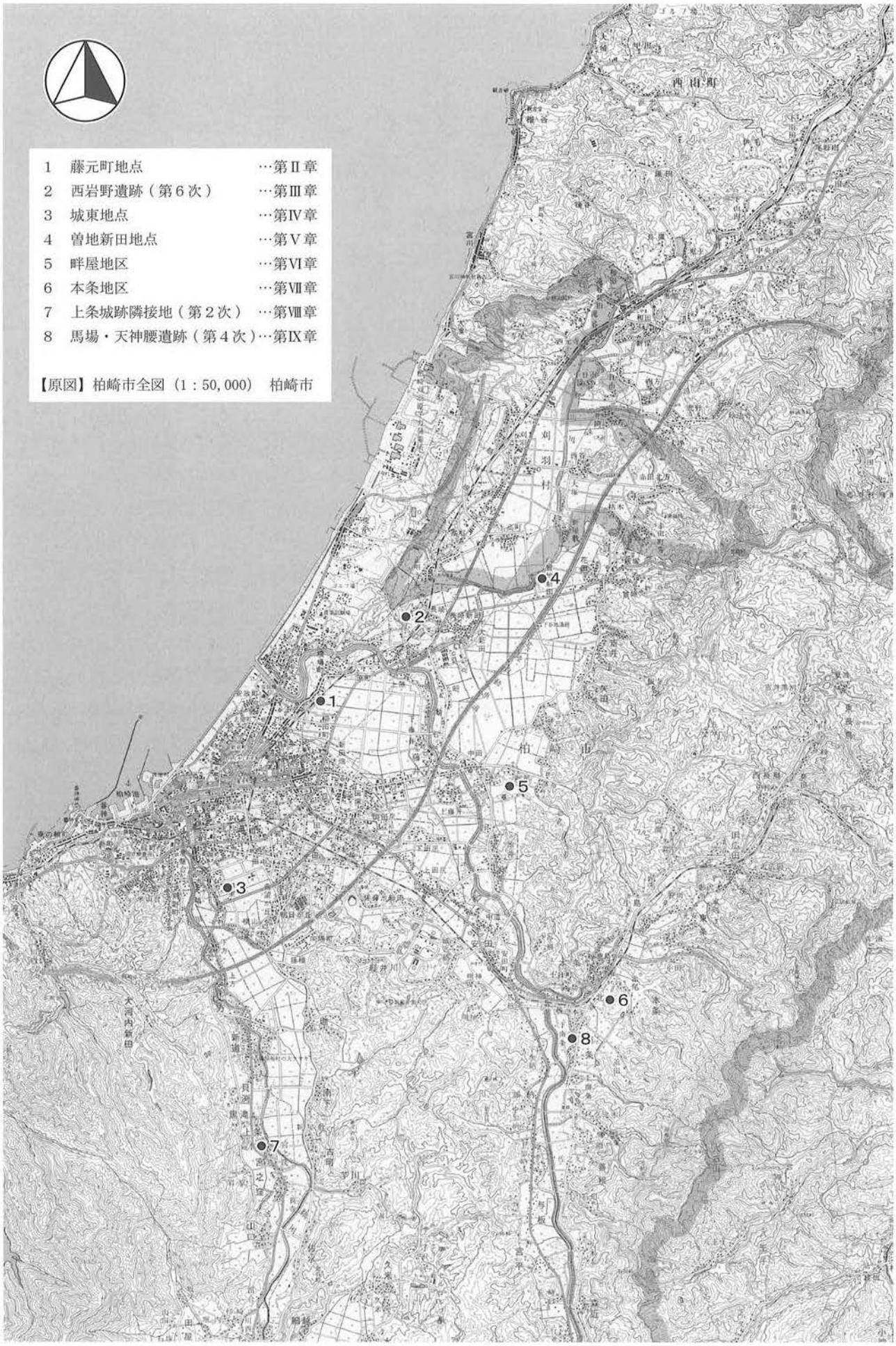
3　柏崎平野と試掘調査等の位置

柏崎平野概観　新潟県の中央部は中越地方と呼ばれている。中越は、標高1,500ｍ級以上の連山が続く東側と、河川や海岸に沿って発達した段丘・平野がみられる西側に区分されるが［小林ほか2008］、柏崎平野は西側の一部である。柏崎平野は、鯖石川と鵜川を主要河川として形成された臨海沖積平野であり、各河川は個々に独立した水系を持っている。そして、信濃川水系の越後平野や関川水系による頚城平野とは、丘陵や山塊による分水嶺によって隔されており、ひとつの独立した平野を形成している。

柏崎平野を取り巻く丘陵・山塊は、東頸城丘陵の一部である。柏崎平野一帯の丘陵地形は、北流する鵜川・鯖石川によって西部・中央部・北～東部に3分され、それぞれ米山・黒姫山・八石山の刈羽三山を頂点とする。西部は、米山を頂点とした傾斜の強い山塊であり、現在も隆起を続けているとされている。これら山塊・丘陵地形の広がりは海岸にまで達し、米山海岸と称される国定公園の景勝地を形成する。米山海岸の景観は、沿岸部に低位・中位・高位の各段丘による断崖が顕著であり、沖積地は少なく、海辺は漂石海岸で砂浜もほとんどみられないことが特徴となっている。中央部は、黒姫山を頂点に北へ緩やかに高度を下げ、沖積地に接する一帯には広い中位段丘を形成するとともに、その北側には湿地性の強い沖積地が広がっている。北～東部は、北東方向の背斜軸に沿って、西山丘陵・曽地丘陵・八石山丘陵が北から規則的に並び、向斜軸に沿って別山川・長鳥川といった鯖石川の支流が南西に流れ出る。

平野の地形は、中･上部更新統～完新統からなる段丘、多くが地下に埋没した上部更新統からなる古（旧期）砂丘のほか、更新統の最上部～完新統からなる河道・旧河道・自然堤防・後背湿地・新砂丘などに区分される［柏崎平野団体研究グループ1979］。日本海に洗われる北西部は海岸に沿って荒浜砂丘・柏崎砂丘が横たわり、現在では柏崎の市街地がこれを覆っている。平野部をなす沖積地は、砂丘後背地として湿地性が強く、鵜川・鯖石川の蛇行により、各所に幾筋もの自然堤防が形成されている。なお、柏崎平野には、柏崎市のほかに刈羽郡西山町・同郡刈羽村・同郡高柳町が所在したが、平成17年5月に西山町・高柳町が柏崎市に合併したため、現在は別山川流域の一部に刈羽村域がある以外は、柏崎市域が大半を占めている状況である。柏崎北部では、西山町・刈羽村を流れる別山川が沖積地を形成している。鯖石川の最大の支流となる別山川は、西山町町内における上中流部では幅の狭い沖積地を作りだし、下流部となる刈羽村域では急激に幅を広げて柏崎平野の北端部を形成する。

平成30（2018）年度試掘調査等の位置　平成30（2018）年度に実施した試掘・確認調査の8件について本書で報告している。これらの調査位置を主要河川の流域別にみると、鵜川中～下流域2件（上条城跡隣接地第2次、城東地点）、鯖石川中～下流域5件（馬場･天神腰遺跡、本条地区、畔屋地区、西岩野遺跡、藤元町地点）、別山川下流域1件（曽地新田地点）という内訳になる（第2図参照）。鯖石川中流域での調査が多く、地形的には沖積地での調査が大半となる。それぞれの位置や環境については、各章を参照されたい。



第２図　平成30年度埋蔵文化財試掘調査等位置

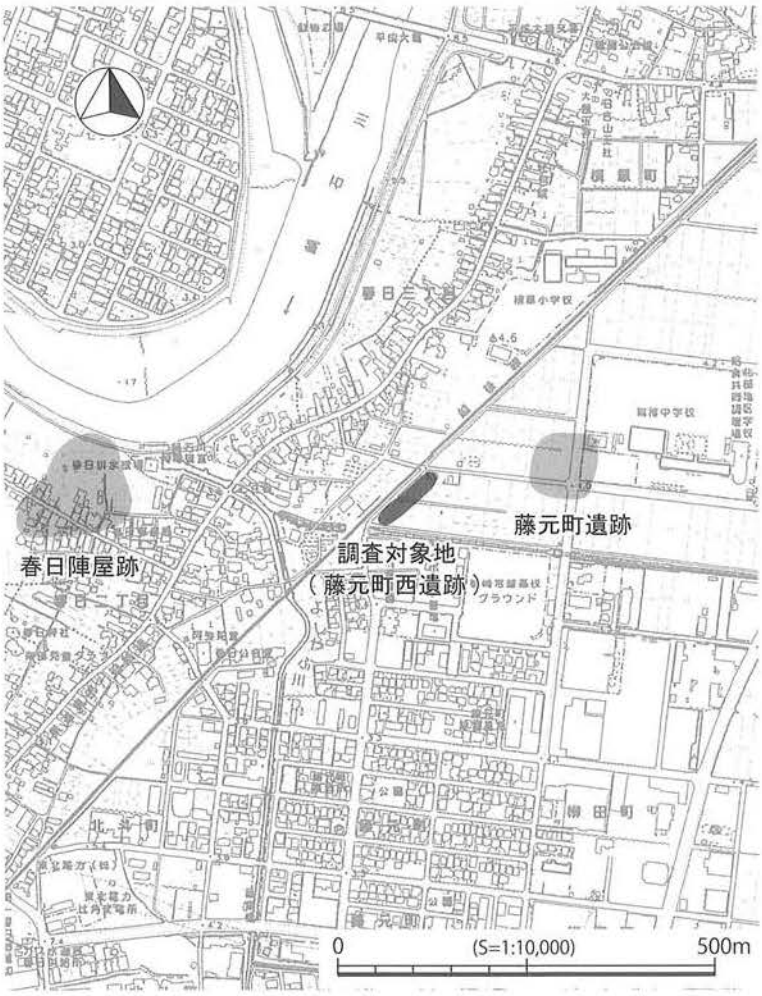
Ⅱ　藤元町地点

－ 市道柏崎11-107号線道路改良舗装工事に係る試掘調査 －

1　調査に至る経緯

柏崎市藤元町は、市街地から北東へ2.5kmに位置する。鯖石川の河口付近の左岸に形成された沖積地にあり、海岸まで約1.3kmである。鯖石川は別山川の合流点から下流で大きく蛇行を繰り返して日本海に流れ込む。調査対象地の南側は宅地や商業地、工場などとなっており、北東には柏崎市立瑞穂中学校がある。また、500ｍ東には一般国道8号が南北に通っているため交通量は多い。しかし、瑞穂中学校への主要な通学路では歩道が未整備であったことから、柏崎市は周辺の市道の拡幅を行うこととした。当該路線の周辺ではこれまで開発に伴う調査は行われておらず、周知の埋蔵文化財包蔵地はなかった。しかし、工事中の不時発見を防ぐため、事前に試掘調査を行うこととなった。事業を担当する都市整備課と協議し、事業の進捗状況に合わせて調査を行うこととなった。平成25（2013）年度には瑞穂中学校の西側の延長約170mを対象に試掘調査を行い、藤元町遺跡を発見した。今回の調査は、前回の調査対象地の西端から南へ折れた市道柏崎11-107号線の拡幅範囲を対象に行った。

平成30（2018）年4月17日付け博第508号で文化財保護法第99条第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査の報告を新潟県教育長へ提出し、調査は平成30（2018）年4月26日に行った。



第３図　藤元町地点試掘調査　調査位置図（S=1:10,000）

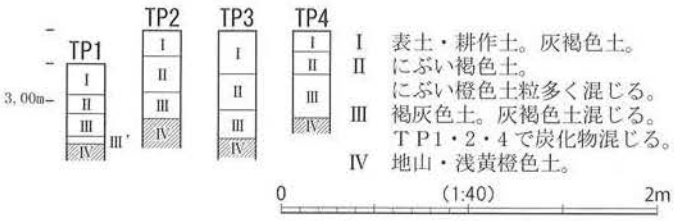
2　調査の概要

1）　調査の方法

調査対象地は、市道に隣接する畑で、幅5ｍ～6ｍ、延長約100ｍで、面積は約530㎡である。調査目的は、この拡幅範囲に遺跡が存在するかを確認することである。また、遺跡が存在して本発掘調査が必要になった際の作業量を算出するための資料を収集することも目的とした。

トレンチは幅1ｍ、長さ4ｍを基準として、任意の位置に設定した。トレンチの掘削には0.15㎥級のバックホーを

使用し、調査対象地の南西側から調査を開始した。遺物の出土状況を確認しながら遺構検出面までバックホーで掘削した後、人力で土層確認面の清掃と遺構精査を行った後に、写真と記録図面を作成した。作業完了後は掘削土で埋め戻して調査を完了した。



第４図　藤元町地点試掘調査　土層柱状模式図

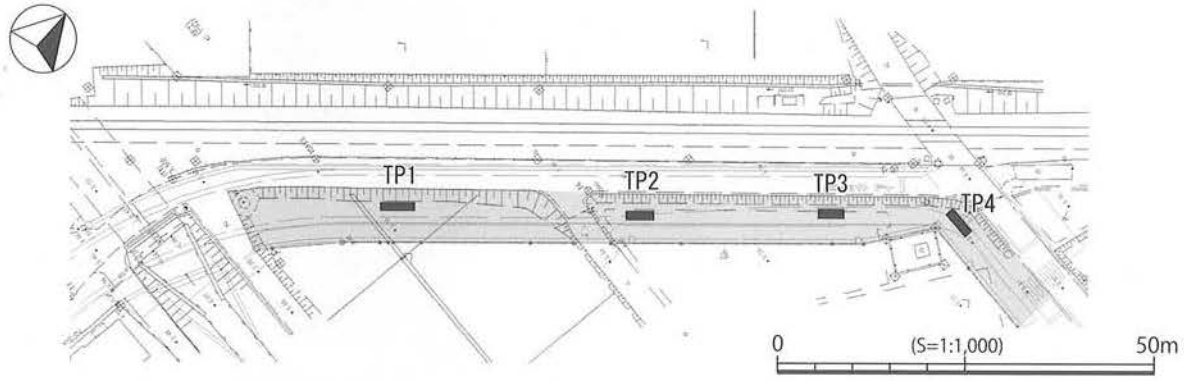
２）基本層序

今回の調査で確認した土層を4層に大別した。Ⅰ層は表土層をまとめた。灰褐色を基本とした粘質土である。Ⅱ層はにぶい褐色土層で、にぶい橙色土粒が多く混じる。珠洲などが出土しているが、撹拌されたものと思われる。Ⅲ層は炭化物を含む褐灰色土層で、灰褐色土がまだらに混じる。遺物包含層である。Ⅳ層は浅黄橙色粘質土層で、ここで遺構を確認した。Ⅲ層からⅣ層への漸移層はⅢ'層とした。すべてのトレンチでⅠ層からⅣ層までが安定して残っているが、上部からの攪乱が見られる。遺物包含層までが浅いため、耕作等により撹拌されているところが多くあると思われる。

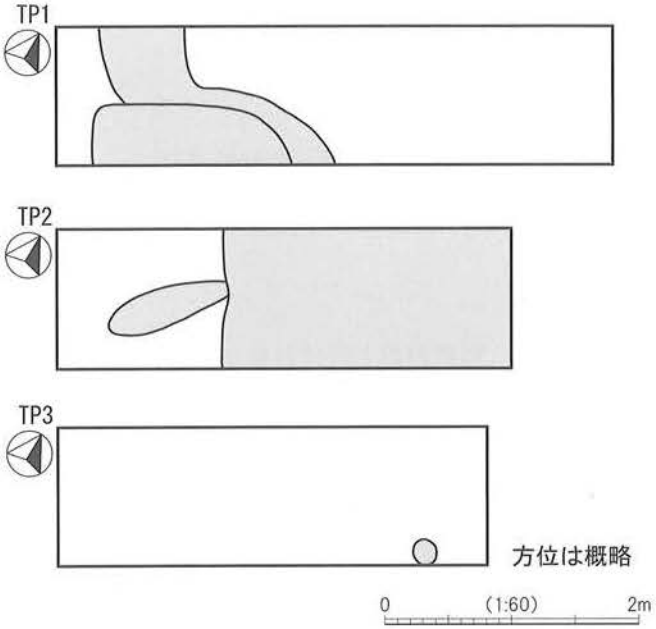
３）トレンチの概要

ＴＰ１　調査対象地の南西端付近に設定した。長さ4.4ｍ、幅1.1ｍのトレンチである。Ⅱ層から珠洲の壷もしくは甕の体部破片1点が出土した。地表から0.43ｍでⅣ層に達した。遺構精査を行い、土坑と溝を検出した。土坑は南側調査区壁の外へ続いている。壁沿いの最大長は約1.6ｍで、幅は約0.5ｍを確認した。調査区壁沿いでサブトレンチを設定して掘削したところ、検出面から底面までの深さは約0.3ｍであった。土坑の中心部はトレンチの外にあるとみられ、これより深くなるであろう。覆土は炭化物を含む褐灰色粘土で砂が混じる。溝は幅が0.6ｍ前後で、東西方向に通る。覆土は上面で褐灰色を呈し、土坑に切られる。

ＴＰ２　調査対象地のほぼ中央に設定した。長さ3.6ｍ、幅1.1ｍのトレンチである。Ⅳ層までの深さは0.47ｍである。Ⅱ層から土師器の小片3点、瓷器系陶器1点、鉄釉をかける陶器1点が出土した。遺構は、トレンチの東側半分以上を占める土坑とみられる大型の落ち込み1基と溝1条を検出した。土坑は長さ2ｍ以上で調査区外に続いている。覆土はⅢ層と同様のもので、立ち上がりは緩やかに湾曲して深まっていく。底面は確認できなかった。溝は土坑の西端から1ｍほど伸び、幅約0.3ｍである。



第５図　藤元町地点試掘調査　トレンチ位置図（S=1:1,000）



第６図　藤元町地点試掘調査　トレンチ平面図

ＴＰ３　調査対象地の北西端付近に設定した。長さ3.4ｍ、幅1.1ｍのトレンチである。Ⅳ層までの深さは0.56ｍである。トレンチの東端でピットを1基検出した。直径0.2ｍの円形で、覆土は褐灰色粘土である。Ⅰ層から中世土師器皿の口縁部破片と近世以降の磁器の破片1点が出土した。

ＴＰ４　調査対象地の北西端で、道路を右折した部分に設定した。長さ3.8ｍ、幅1.1ｍのトレンチである。Ⅳ層までの深さは0.47ｍである。遺構は検出されなかった。Ⅲ層から珠洲の壷もしくは甕の体部破片1点が出土した。

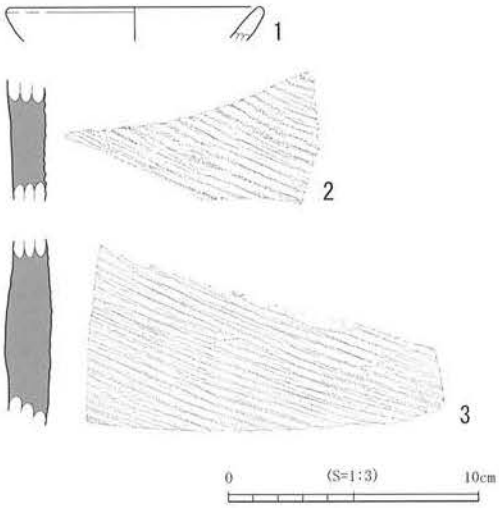
4）　出土遺物

今回の調査では主に中世の遺物が出土した。小破片のものばかりで、器形をうかがい知れるものは少ない。1はＴＰ３のⅠ層から出土した中世土師器皿の口縁部破片である。口径10cm程度に復元できる。2・3は珠洲の壷もしくは甕の体部破片である。2はＴＰ４のⅢ層から出土したもので、外面3cmあたり8目の平行叩き目がある。3はＴＰ１のⅡ層から出土したもので、外面の叩き目は3cmあたり9目の平行である。その他に、ＴＰ２のⅡ層から瓷器系陶器の壷の体部とみられる破片と鉄釉が施される陶器の破片が出土した。また、近世以降の陶磁器の破片もⅠ層から出土した。

3　調査のまとめ

調査の結果、ＴＰ１からＴＰ３では遺構と遺物が出土し、ＴＰ４では遺物が出土した。遺物の出土量は少ないが、中世が主体の集落跡と考えれば妥当であると思われる。遺構も多くはないが、ＴＰ２では大型の土坑としたものがあり、その規模からは堀などの区画を行う遺構になるとも考えられる。ＴＰ３では遺構が希薄となっており、遺跡の縁辺部であるとも考えられる。ＴＰ４では遺物が1点出土しただけではあるが、ここまで遺物の分布が及んでいるものと判断した。この調査結果を受けて、今回の調査対象範囲の全域を藤元町西遺跡とし、新潟県教育長へ新遺跡の発見について通知し、周知化した。

事業担当課と遺跡の取扱いについて協議したが、地域の要望が強く計画変更は困難であった。そのため、市道拡幅部分について記録保存のための本発掘調査を平成31（2019）年度に実施した。



第７図　藤元町地点試掘調査　出土遺物実測図

Ⅲ　西岩野遺跡（第６次）

－ 一般県道黒部柏崎線（山本拡幅）道路改築事業に伴う確認調査（第6次発掘調査）－

１　調査に至る経緯

西岩野遺跡は、柏崎平野北部の荒浜砂丘から東側に突き出た、岩野台地と呼ばれる中位段丘上に所在する。昭和58（1983）年に新潟県教育委員会の遺跡詳細分布調査により発見された。昭和61（1986）年に一般県道荒浜安田線道路改良事業に伴って本発掘調査を行い、主に弥生時代後期の遺構や遺物が見つかった［柏崎市教委1987］。今回の調査は、一般県道黒部柏崎線道路改良工事（山本拡幅）に伴う本発掘調査の積算資料を得るための確認調査である。第3次発掘調査の試掘調査で遺跡の広がりを確認していたが、遺構の分布密度や遺物の出土状況を把握できなかったため、これを明確にすることを目的とした［柏崎市教委2016］。岩野台地の頂部から北側の緩やかな斜面を対象としたもので、調査対象面積は約1980㎡である。

平成30（2018）年5月10日付け博第523号で文化財保護法第99条の規定による埋蔵文化財発掘調査の報告を新潟県教育長へ提出した。調査は平成30（2018）年5月22日から6月15日まで、延べ18日間行った。

２　調査の概要

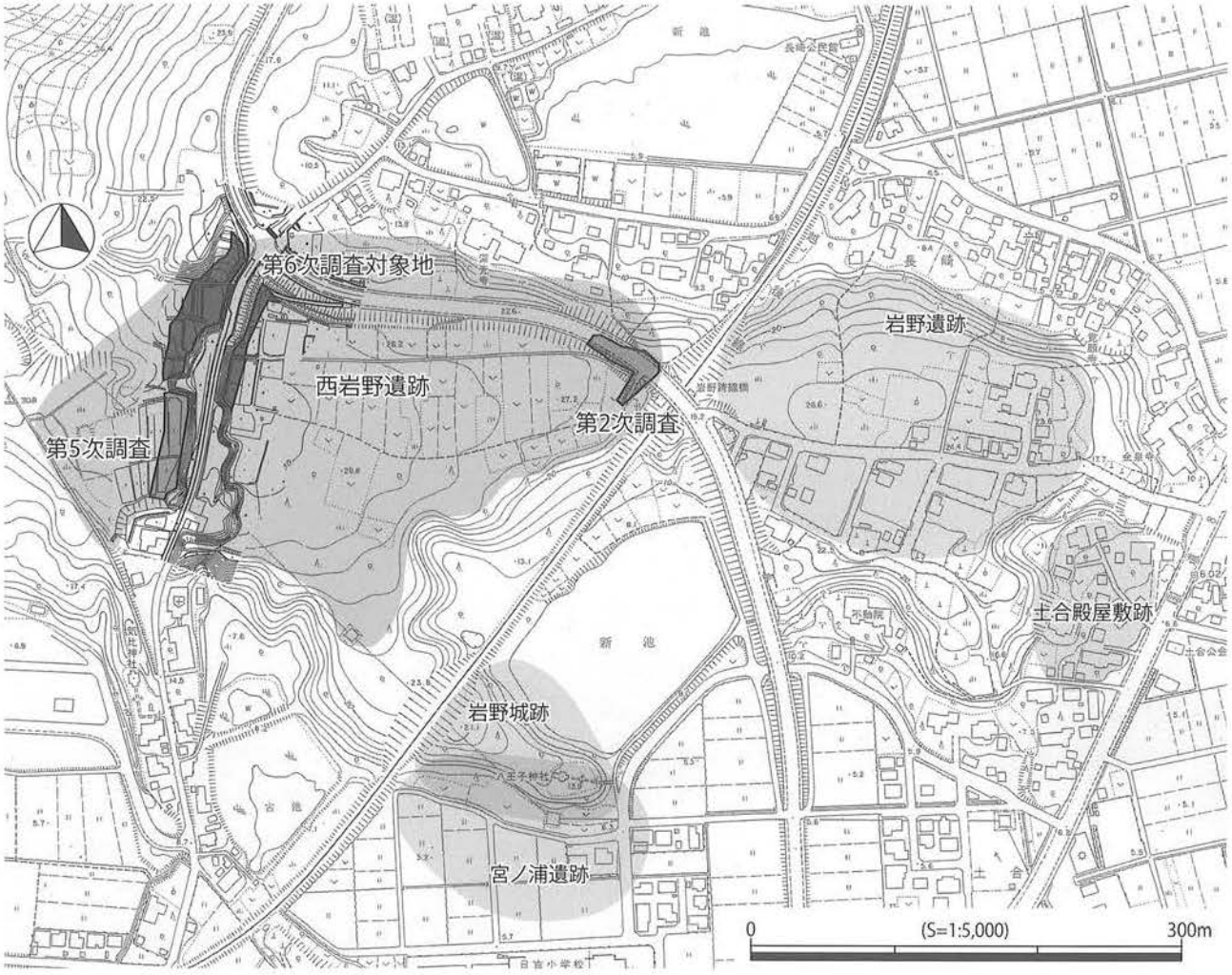
１）　調査の方法

今回の調査対象は、県道改良工事の範囲の北半分にあたる。県道西側の対象地は、台地頂部から北へ向かって緩やかに下っていく緩斜面で、現状は山林である。畑として使われていた時期があり、平坦面が段になって続いている。県道の東側は台地上の平坦面の畑地が調査対象である。調査は県道西側から開始し、ここに4か所のトレンチを設定した。続いて県道東側で2か所のトレンチで調査を行った。トレンチの掘削にはバックホーを用い、遺構検出面である地山面まで掘り下げた。新砂丘の堆積が１ｍを超える部分が多く、崩落防止のためにトレンチ上部を大きく掘り広げたところがある。このため、トレンチ上部の掘削面積とトレンチ底部の検出面積に大きな差が生じている。遺構検出面まで掘り下げた後は、人力で遺構検出を行った。その後、土層の堆積状況を確認し、遺構の検出状況と合わせて記録を作成した。検出した遺構は大型のものを中心にサブトレンチを設定して掘削した。

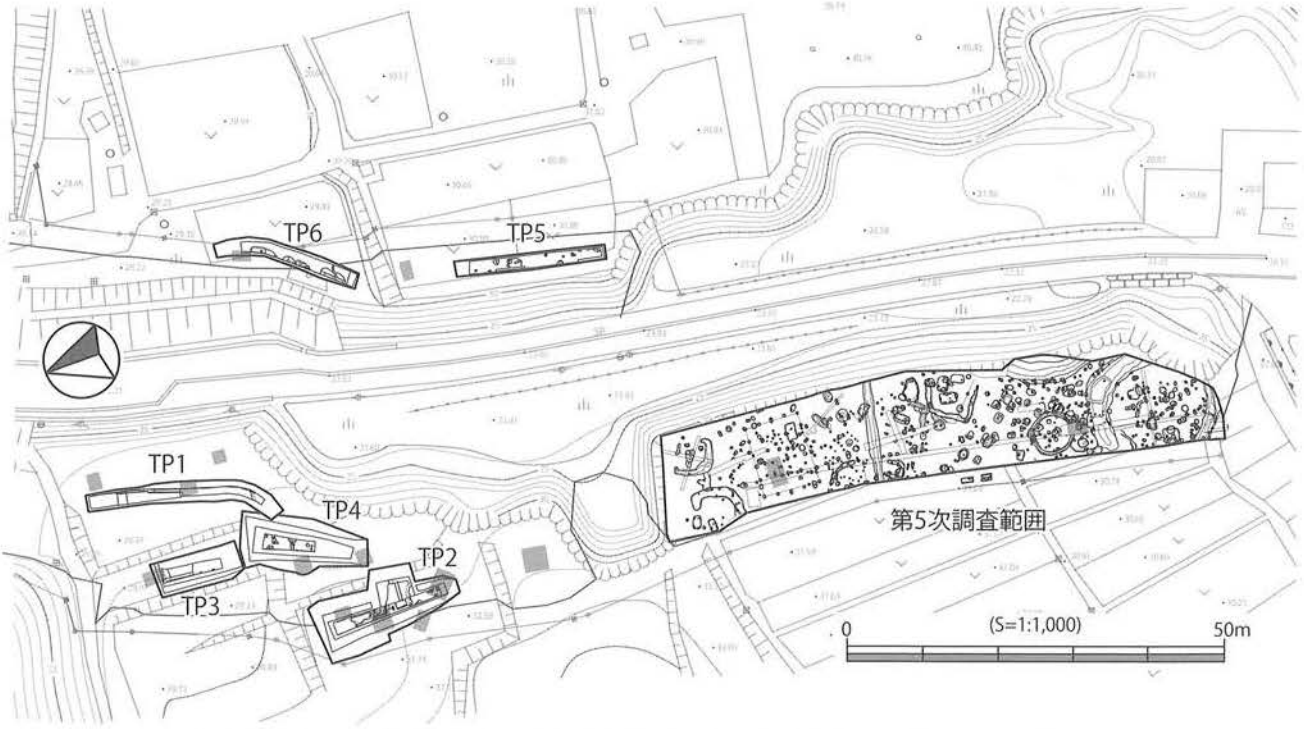
２）　基本層序

西岩野遺跡は、柏崎平野の西側に発達した荒浜砂丘に立地する。この砂丘の表面は新砂丘砂である荒浜砂丘砂層Ⅱが厚く堆積する。この新砂丘砂層と表土を基本土層の第Ⅰ層としてまとめた。荒浜砂丘における新砂丘の堆積は50ｍを超える部分もあるとされ、今回の調査対象地では最大で3ｍ程度の堆積を確認した。

新砂丘砂層の下にある黒色層を色調や土質から4種に大別した。第Ⅱ層は褐灰色を主体とした粘土層で、近世頃に形成されたと想定している。しかし、新砂丘砂層の堆積は平安時代後期以降ともいわれており、



第８図　西岩野遺跡（第６次）確認調査　位置図（S=1:5,000）



第９図　西岩野遺跡（第６次）確認調査　トレンチ位置図（S=1:1,000）

堆積の時期についてはさらに検討が必要である。粘質はあるもののしまりは弱く、ぼそぼそとした質感である。第Ⅲ層は灰黄褐色や黒褐色の粘質土層である。炭化物を含み、粘質、しまりともにやや強い。古代の遺物を包含する。第Ⅳ層は、明褐色や暗赤褐色の粘質土からなる層である。第Ⅳ層上面から掘りこまれた遺構を確認できる一方で、この層に覆われた遺構も確認できる。第Ⅴ層は黒褐色や暗褐色で炭化物を少量含む粘質土層で、一部で遺物が包含される。遺構検出を行った地山層を第Ⅵ層とした。古砂丘である番神砂層とみられ、上部は風化が進み黄褐色や褐色を呈する粘質土となっており、その下位は褐色でしまりが強く、砂岩質となっている。基本土層については、第2次調査以降で確認されたものと対比できる層がある一方で、対応関係を捉えきれていないものもあり、今後の検討課題である。

3） トレンチの概要

ＴＰ１からＴＰ４は県道の西側で、東側にはＴＰ５とＴＰ６を設定した。各トレンチの規模、出土遺物の量は表2のとおりである。遺構検出面の総面積は143.5㎡であり、調査対象地の10.2％となる。以下で各トレンチの概要と主な遺構について述べる。

ＴＰ１　丘陵北側斜面の中腹の平坦面に設定したトレンチである。調査区北端部は後世に削平されているようで、Ⅰ層の直下がⅥ層となる。ＳＤ１は調査区のおよそ6割を占める大型の落ち込みである。北側で１ｍほど掘り込まれ、平坦な底部が南へ約15ｍ続くが、南側の立ち上がりは確認できなかった。覆土は黒褐色土を主体とし、この上面を覆うようにⅣ層が堆積する。調査の段階では認識できなかったが、個別トレンチ図の16・17層はこのⅣ層を掘りこむ遺構とみられる。この層が堆積する範囲でまとまって遺物が出土した。住居の可能性があるが、平面形態を捉えられなかった。平面図のアミの範囲が概ね相当し、ＳＸ０とする。

ＴＰ２　ＴＰ１の南側で、斜面の上方に設定したトレンチである。Ⅰ層の堆積は最大で2ｍを超え、その下位にⅡ・Ⅲ層が水平に堆積する。Ⅳ・Ⅴ層は斜面の上位では見られない。遺構はピット、土坑、溝がある。ピット、土坑はⅣ層上面から掘られるものを確認できる。ＳＤ７はⅣ層に覆われる溝で、幅約3ｍ、深さ40cm前後である。底部は広い平坦面となる。ＳＤ７上部のⅣ層上面からまとまって土器が出土したが、遺構内の覆土からは遺物は出土しなかった。

ＴＰ３　ＳＤ１の西側への広がりを確認するために設定した。調査区北端部で北側の立ち上がりを検出した。遺構の形状や覆土の堆積はＴＰ１と同様で、上面にⅣ層が堆積するが、南側で消失している。遺物はⅣ層より上位で少量出土したが、ＳＤ１内の覆土から出土していない状況はＴＰ１と同様である。

ＴＰ４　ＳＤ１とＴＰ２の地形的なつながりを確認するために設定した。北から南へ向かって緩やかに標高が上がっており、ＴＰ１等のような明確な掘方による立ち上がりは見られなかった。底面で細い溝やピット、土坑を検出した。調査区の壁面ではⅣ層の上面から掘られる遺構と、Ⅳ層より下で掘られた遺構があることを確認した。遺物は出土しなかった。

ＴＰ５　県道の東側で、丘陵頂部の平坦面に設定した。ピットや土坑が散在する。壁面ではⅣ層の下位で掘られた遺構を多く確認できる。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

ＴＰ６　ＴＰ５の北側に設定した。現況はおおむね平坦だが、Ⅲ層以下は北側に向かって下る緩やか

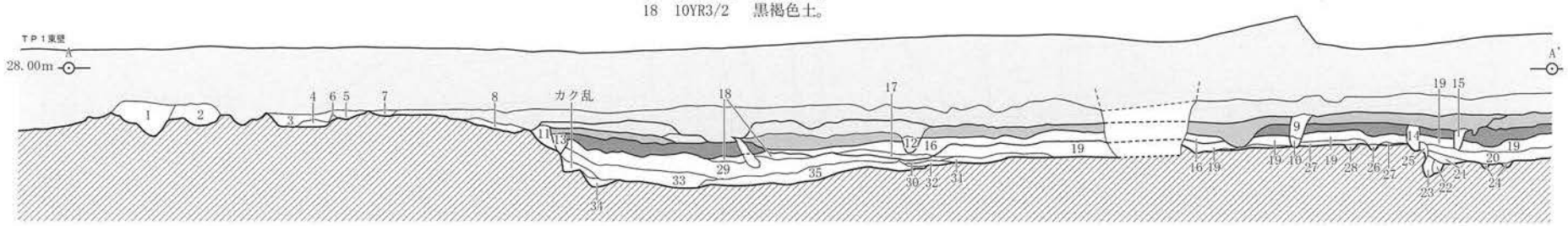
トレンチNo.	上端面積	下端面積	土器出土量	重量(g)/㎡
TP1	66.8 ㎡	30.0 ㎡	1,599.0g	53.30 g
TP2	134.5 ㎡	33.8 ㎡	531.0g	15.71 g
TP3	53.0 ㎡	12.5 ㎡	52.9g	4.23 g
TP4	104.5 ㎡	11.4 ㎡		0.00 g
TP5	41.7 ㎡	29.8 ㎡		0.00 g
TP6	46.0 ㎡	26.0 ㎡	50.0g	1.92 g
合計	446.5 ㎡	143.5 ㎡	2,232.9g	15.56 g

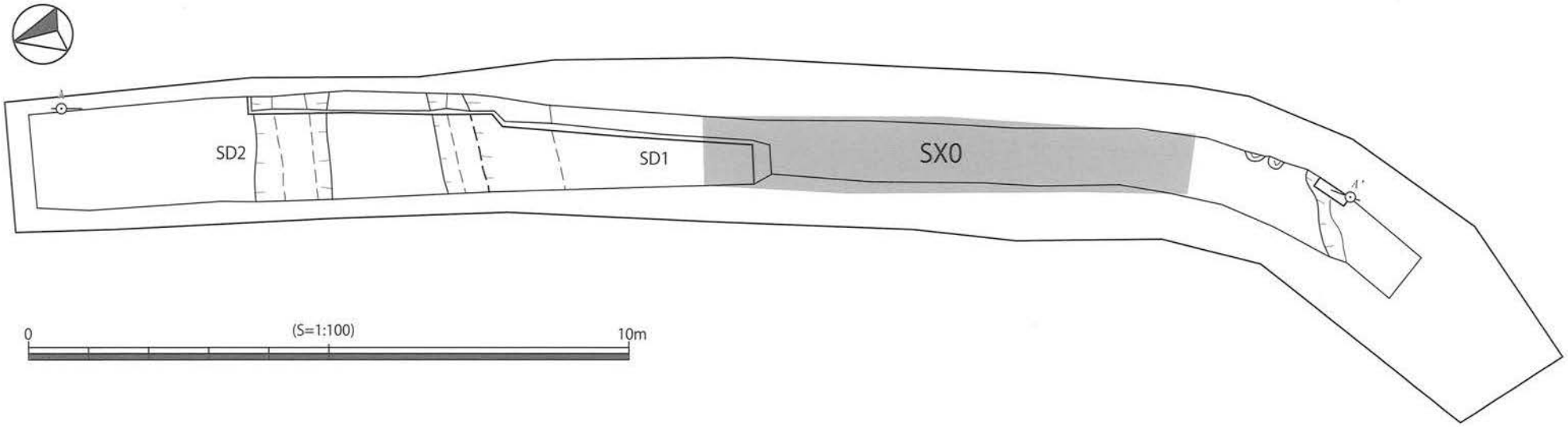
第２表　西岩野遺跡（第６次）確認調査　トレンチ一覧表

TP1

- Ⅰ：表土・新砂丘砂層
- Ⅱ：褐灰色粘土層
- Ⅲ：黒褐色粘質土
- Ⅳ：明褐色粘質土
- Ⅴ：黒褐色粘質土
- Ⅵ：古砂丘砂層（地山）

1	2.5Y4/2	暗灰黄色砂。5YR5/6暗赤褐色土ブロック混じる。
2	2.5Y4/2	暗灰黄色砂。5YR5/6暗赤褐色土ブロック少量混じる。
3	5YR4/3	にぶい赤褐色土。
4	10YR4/6	褐色土混じり砂。
5	5YR4/2	灰褐色土。
6	5YR5/6	明赤褐色土。
7	5YR4/3	にぶい赤褐色砂混じり土。
8	7.5YR3/3	暗褐色土。
9	10YR3/2	黒褐色土。ピット覆土。
10	7.5YR5/6	明褐色粘質土。攪乱か。
11	7.5YR4/2	灰褐色土。地山土小ブロック少量混じる。
12	10YR2/2	黒褐色土。ピット覆土。
13	7.5YR3/3	暗褐色土（攪乱）。
14	7.5YR3/2	黒褐色土。攪乱か。
15	7.5YR4/1	褐灰色土。しまり弱い。攪乱か。
16	7.5YR3/3	暗褐色土。
17	7.5YR3/2	黒褐色土。
18	10YR3/2	黒褐色土。
19	7.5YR4/1	褐灰色弱粘質土。
20	7.5YR3/2	黒褐色土。
21	7.5YR3/3	暗褐色土。
22	7.5YR4/4	褐色粘質土。
23	7.5YR4/1	褐灰色土。攪乱か。
24	7.5YR5/4	にぶい褐色粘質土。
25	7.5YR3/3	暗褐色粘質土。
26	7.5YR4/3	褐色土。
27	7.5YR4/3	褐色粘質土。
28	7.5YR4/2	灰褐色粘質土。
29	7.5YR2/2	黒褐色土。炭化物少量混じる。
30	7.5YR3/2	黒褐色土。
31	7.5YR3/3	暗褐色土。
32	7.5YR3/3	暗褐色土。地山土ブロック少量混じる。
33	7.5YR4/2	灰褐色粘質土。
34	7.5YR4/6	褐色土。しまり強い地山崩落土か。
35	7.5YR2/2	黒褐色粘質土。しまり強く、地山土ブロック少し混じる。





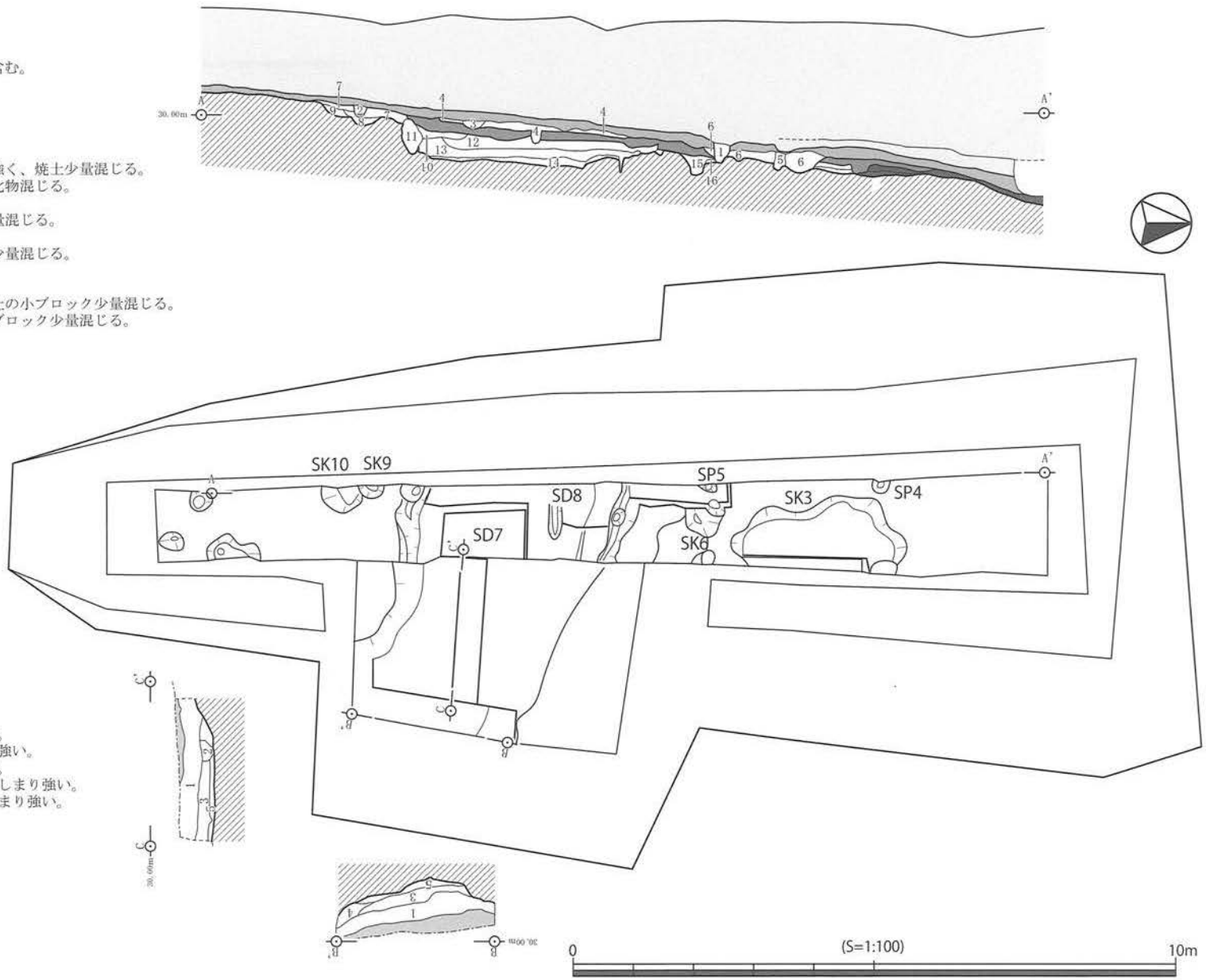
第10図　西岩野遺跡（第６次）確認調査　トレンチ個別図１（S=1:100）

TP2

1　7.5YR3/2　黒褐色土。土器少量含む。
2　5YR4/2　灰褐色土。
3　7.5YR3/2　黒褐色土。
4　7.5YR3/3　暗褐色土。
5　7.5YR3/4　暗褐色土。
6　7.5YR3/3　暗褐色土。
7　5YR3/3　暗赤褐色土。しまり強く、焼土少量混じる。
8　5YR4/3　にぶい赤褐色土。炭化物混じる。
9　5YR2/3　極暗赤褐色土。
10　7.5YR3/3　暗褐色土。炭化物少量混じる。
11　7.5YR4/1　褐灰色土。
12　5YR3/2　暗赤褐色土。焼土粒少量混じる。
13　5YR4/2　灰褐色土。
14　7.5YR4/4　褐色土。
15　5YR3/3　暗赤褐色土。明褐色土の小ブロック少量混じる。
16　7.5YR4/3　褐色土。黄橙色土小ブロック少量混じる。

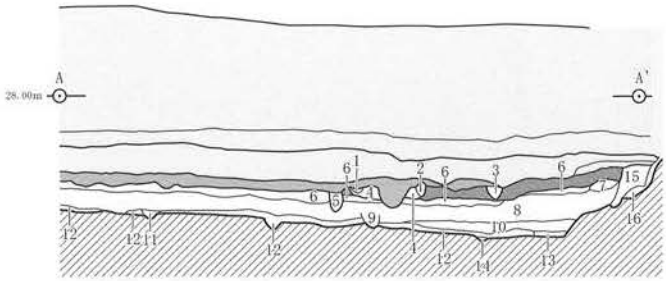
Ⅰ：表土・新砂丘砂層
Ⅱ：褐灰色粘土層
Ⅲ：黒褐色粘質土
Ⅳ：明褐色粘質土
Ⅴ：黒褐色粘質土
Ⅵ：古砂丘砂層（地山）

TP2拡張
Ⅰ　7.5YR3/3　暗褐色土。
1　7.5YR2/2　黒褐色土。しまり強い。
2　7.5YR4/2　灰褐色粘土質。しまり強い。
3　7.5YR2/2　黒褐色土。しまり強い。
4　7.5YR4/2　灰褐色土。粘質弱い。しまり強い。
5　7.5YR4/3　褐色土。粘質あり。しまり強い。

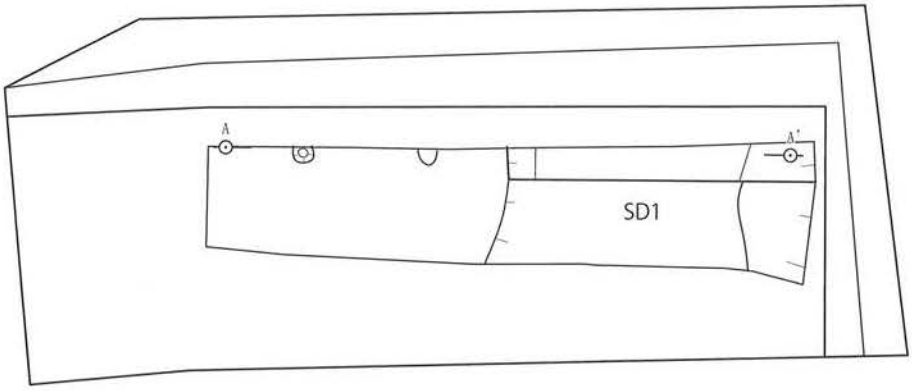


第11図　西岩野遺跡（第６次）確認調査　トレンチ個別図２（S=1:100）

TP3



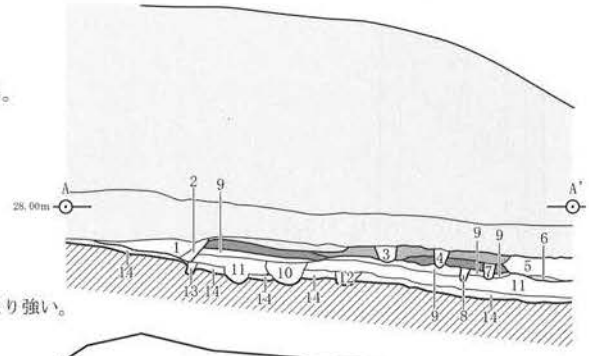
1　7.5YR3/3　暗褐色土。
2　10YR2/2　黒褐色土。
3　10YR2/2　黒褐色土。
4　7.5YR4/2　灰褐色土。炭化物混じる。土器含む。
5　7.5YR3/3　暗褐色土。炭化物ごく少量混じる。
6　7.5YR4/2　灰褐色土。
7　7.5YR3/3　暗褐色土。
8　7.5YR2/2　黒褐色土。
9　7.5Y3/2　黒褐色土。
10　7.5YR4/2　灰褐色土。やや粘質でしまり強い。
11　7.5YR3/4　暗褐色やや粘質土。
12　10YR3/3　暗褐色土。やや粘質でしまり強い。
13　7.5YR2/3　極暗褐色土。しまり強い。
14　7.5YR4/4　褐色土。やや粘質でしまり強い。
15　7.5YR5/4　にぶい褐色土。
16　7.5YR4/6　褐色土。

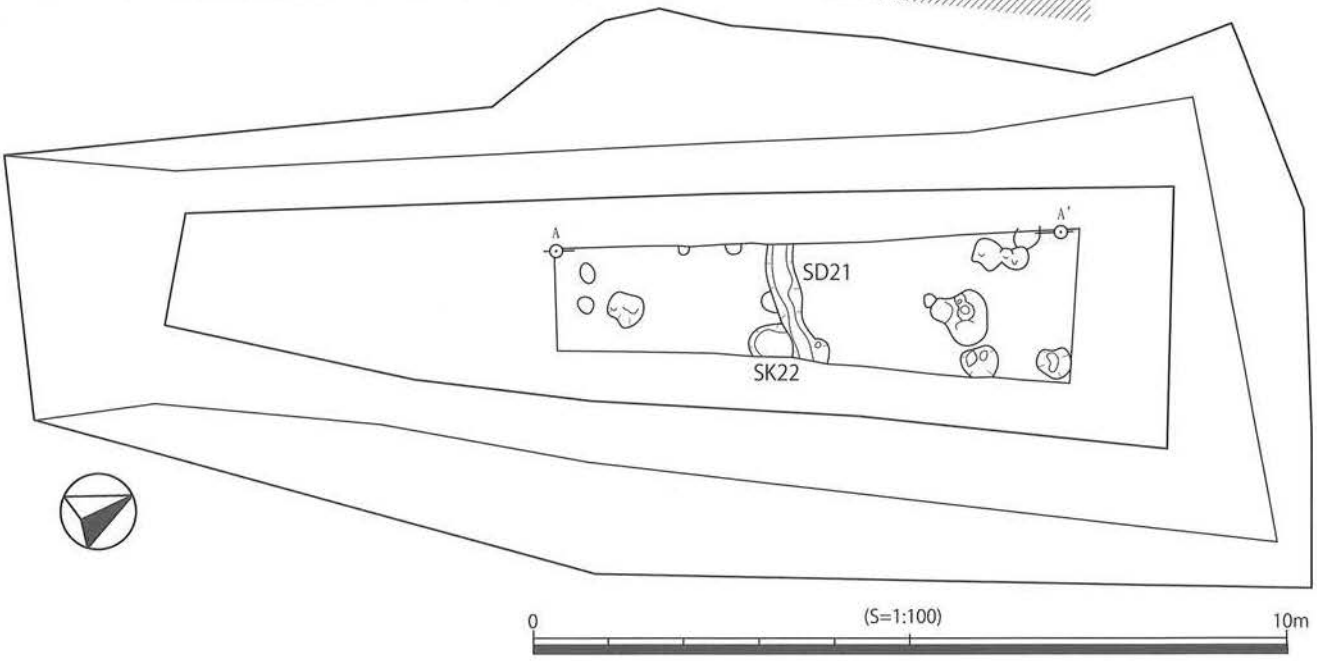


Ⅰ：表土・新砂丘砂層
Ⅱ：褐灰色粘土層
Ⅲ：黒褐色粘質土
Ⅳ：明褐色粘質土
Ⅴ：黒褐色粘質土
Ⅵ：古砂丘砂層（地山）

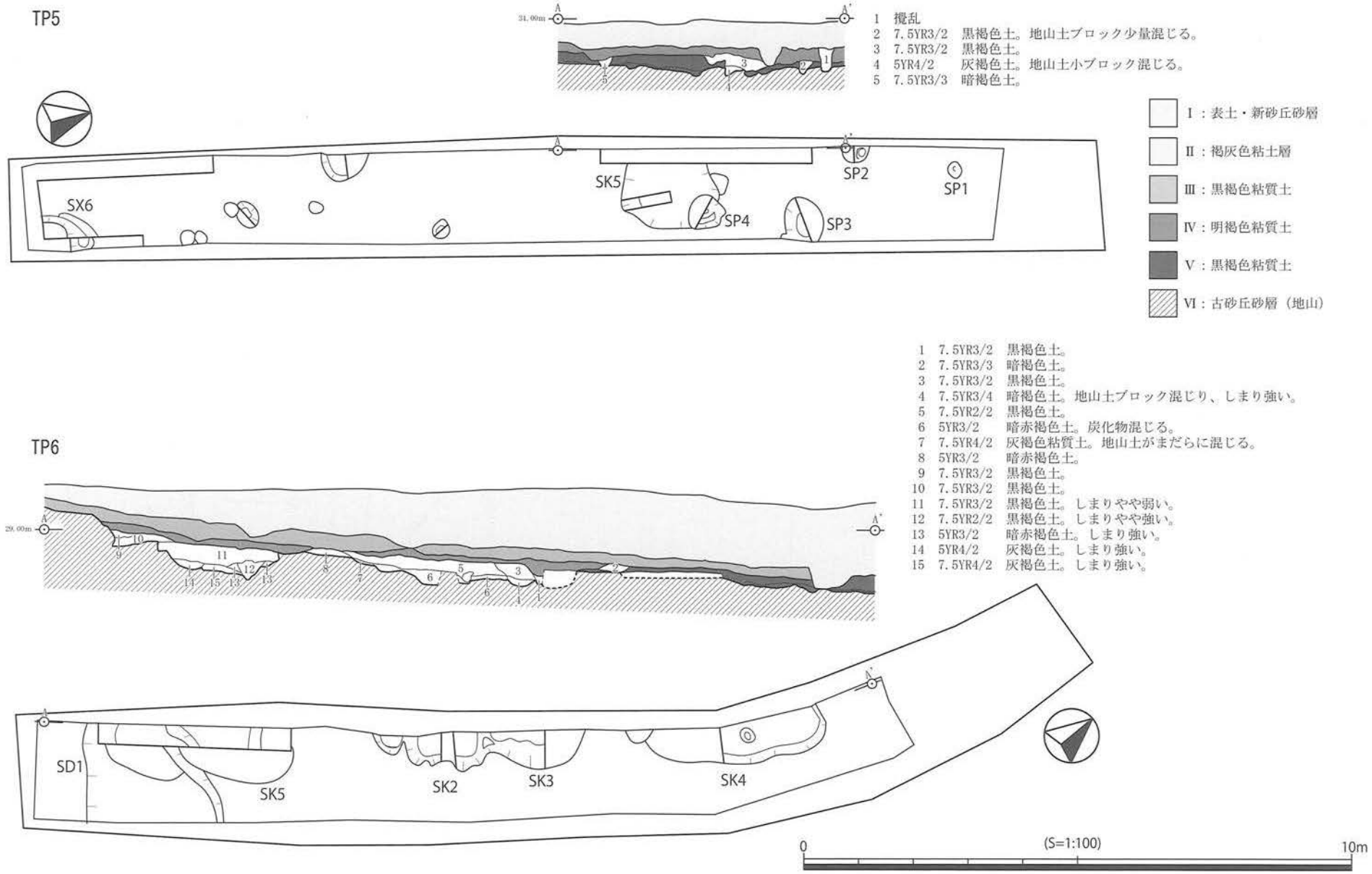
TP4

1　7.5YR2/3　極暗褐色土。
2　7.5YR3/4　暗褐色土。しまりやや弱く、Ⅲ層に似る。
3　7.5YR4/1　褐灰色土。黄橙色土がまだらに混じる。
4　7.5YR4/1　褐灰色土。黄橙色土小ブロック少量混じる。
5　7.5YR3/2　黒褐色土。
6　7.5YR2/3　極暗褐色土。やや粘質でしまり強い。
7　攪乱
8　攪乱
9　5YR3/2　暗赤褐色土。
10　7.5YR2/3　極暗褐色土。
11　7.5YR3/2　黒褐色土。
12　7.5YR2/3　極暗褐色土。
13　攪乱
14　7.5YR3/3　暗褐色土。黄橙色土ブロック混じり、しまり強い。





第12図　西岩野遺跡（第６次）確認調査　トレンチ個別図３（S=1:100）



第13図　西岩野遺跡（第６次）確認調査　トレンチ個別図４（S=1:100）

な斜面となる。溝と土坑があり、いずれもⅣ層より下で掘られる。出土遺物は少なく、包含層から出土したものの層位は確認できなかった。

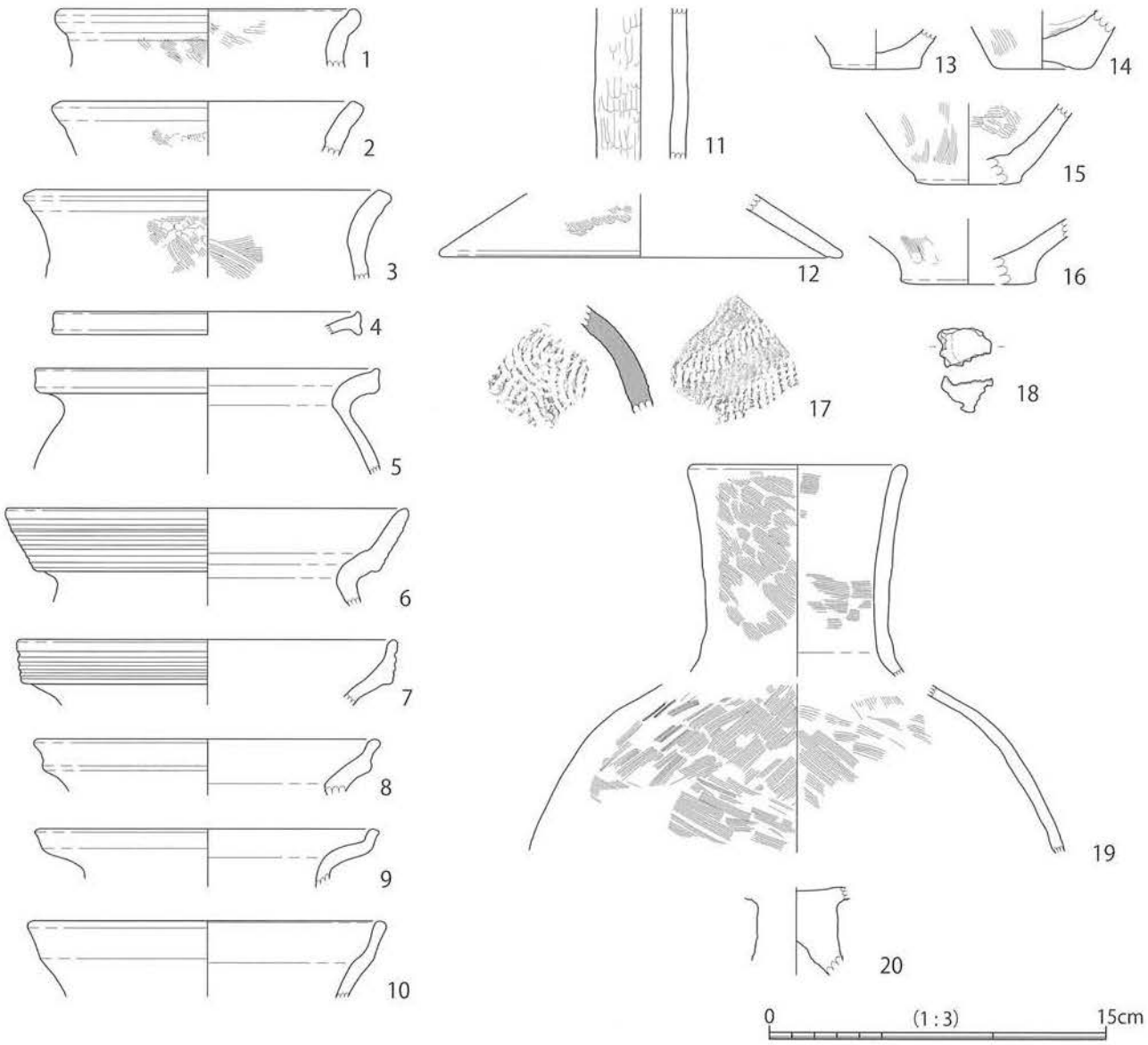
4） 出土遺物

ＴＰ１でやや多く遺物が出土したが、他のトレンチでは少量の遺物しか出土していない。ＴＰ１では、先述のとおりⅣ層を掘りこむＳＸ０からまとまって出土している。その他のトレンチでは、Ⅳ層より上で出土したものが多い。1～18がＴＰ１のもので、6が調査区壁面9層のピットから、他はＳＸ０から出土した。1～9は甕で、端部に面をもつもの（1～3）、口縁端部を拡張するもの（4・5）、有段口縁に擬凹線をめぐらすもの（6・7）と無紋のもの（8・9）がある。10は長頸壺の有段口縁部である。11は高杯の棒状脚で、縦方向にミガキ調整をする。12は蓋の口縁部とした。他の土器類は浅黄橙色やにぶい黄橙色を呈するが、これだけは明褐色で他のものと質感が異なる。内面は煤けている。13～16は甕の底部である。17は須恵器甕の体部破片である。Ⅲ層以上から掘られた遺構がＳＸ０まで達して混入したと考えられる。18は鉄製品である。こぶ状に錆が付いており、本体は厚さ１mm以下の板状である。用途は不明である。19はＴＰ２のⅣ層上面で多くの破片がほぼ一カ所でまとまって出土した長頸壺である。球胴の体部と緩く外反する口頸部を確認できたが、接合できなかった破片が多く残っている。内外面ともに細かいハケメを施す。20はＴＰ３のⅢ層から出土した高杯の脚部である。

3　調査のまとめ

今回の調査では、調査対象地の全域に遺構や遺物が分布していることを再確認できたとともに、大型の溝と思われる遺構が存在すること、その上部を覆うⅣ層の上面に弥生時代後期の遺構が構築されていることが分かった。Ⅳ層とした明褐色土層は第2次調査でも確認されており、そこでは大溝を覆うように堆積していた第Ⅲｂ層が該当する。その上面でSX-50（土坑状遺構）が検出され、弥生時代後期後半の土器等がまとまって出土している。第2次調査の対象地とは約250m離れた今回の調査地でも同様に堆積していることを確認できた。今回の確認調査ではⅣ層上面で十分な遺構確認を行えなかったが、ＴＰ1では壁面の土層観察や遺物の出土範囲から住居のような掘り込みが存在することを推定した。ＴＰ2でもⅣ層上面で遺物がまとまって出土した場所があり、ここを生活面と捉えて調査する必要性を認識した。本発掘調査においては、Ⅳ層上面とⅥ層上面の最低2面での調査を必要とする。Ⅳ層より下位は、確実に遺構があるものの、その遺構から出土する遺物は確認できなかった。第2次調査の大溝からも弥生時代の遺物は出土しておらず、遺構の帰属時期は断定できなかった。今後の本発掘調査で、Ⅳ層堆積以前の遺構の帰属時期を明らかにしていくことで、西岩野遺跡の成立と変遷の過程を明らかにしていくことができそうである。

今回の調査で出土した土器は、北陸系の弥生時代後期後半のものが大半であり、他地域から搬入されたものは出土しなかった。出土状況では、ＴＰ1の一部で集中的に出土しただけで、他のトレンチではほとんど出土していない。このことは、居住域とそれ以外の空間など場の使い分けがあったことも想定できる。本発掘調査を行う際にはその点も留意する必要がある。



第14図　西岩野遺跡（第６次）確認調査　出土遺物実測図

No	出土地点	種類	器種	口径	底径	器高	残存	外面	内面	色調	胎土	焼成	備考
1	TP1 SX0	弥生	甕	13.7			口縁部	ハケメ		にぶい黄橙		良	
2	TP1 SX0	弥生	甕	13.8			口縁部	ハケメ		にぶい黄橙		良	
3	TP1 SX0	弥生	甕	16.0			口縁部	ハケメ		にぶい黄橙		良	
4	TP1 SX0	弥生	甕C1	13.8			口縁部			にぶい黄橙	海綿骨針	良	
5	TP1 SX0	弥生	甕C2	15.0			口縁部	斜ハケメ	斜ヘラケズリ	浅黄橙		良	
6	TP1 9層ピット	弥生	甕A	18.0			口縁部	擬凹線	横ナデ	明黄橙		良	
7	TP1 SX0	弥生	甕A	16.8			口縁部	擬凹線	ナデ	橙	赤チャート	良	
8	TP1 SX0	弥生	甕B	15.6			口縁部	横ナデ	横ナデ	にぶい橙	海綿骨針	良	外面に煤
9	TP1 SX0	弥生	甕B	15.4			口縁部	横ナデ	横ナデ	浅黄橙	海綿骨針	良	受け口状、端部面取り
10	TP1 SX0	弥生	壷VⅡ	16.0			口縁部	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙		良	
11	TP1 SX0	弥生	高杯				脚柱部	縦ヘラミガキ		浅黄橙		良	径4.2cm
12	TP1 SX0	弥生	蓋BⅢか	18.0			口縁部	斜ハケメ		橙		良	内面に煤
13	TP1 SX0	弥生	甕		4.0		底部			浅黄橙		良	
14	TP1 SX0	弥生	甕		4.0		底部	縦ハケメ	斜ハケメ	にぶい黄橙		良	
15	TP1 SX0	弥生	甕		4.6		底部	縦ハケメ	横ハケメ	にぶい橙		良	
16	TP1 SX0	弥生	壷		6.0		底部	縦ハケメ	斜ハケメ	浅黄橙	海綿骨針	良	外面に煤、内面黒化
17	TP1 SX0	須恵器	甕				肩部	平行叩き	同心円当て具	暗灰	チャート・石英	還元硬質	
18	TP1 SX0	鉄製品	板状製品	2.2	1.7	1.3							3.7g
19	TP2 Ⅳ層上面	弥生	壷C	9.6			口～肩部	斜ハケメ	横ハケメ	浅黄橙	赤チャート	良	口縁・体部の破片多い
20	TP3 Ⅲ層	土師器	高杯				脚柱部			橙		良	

第３表　西岩野遺跡（第６次）確認調査　出土遺物一覧表

Ⅳ　城東地点

－ 民間宅地造成に係る試掘調査 －

1　調査に至る経緯

城東地点は柏崎市街地から南へ約2kmの距離となる城東2丁目地区に位置する。地形的には鵜川下流域右岸に形成された沖積地に立地している。これより東側一帯は沖積地でも標高が低く、かつては鏡が沖と呼ばれる湿地が広がっていた。付近の標高は2m程度を図る。近年宅地開発が進行している地区であり、水田の宅地化が徐々に広がっている。付近には室町時代の城館である琵琶嶋城跡、鎌倉時代を中心とした集落遺跡である下沖北遺跡などが分布する。東側約400ｍには弥生時代と平安時代を中心とする箕輪遺跡が所在するが、とくに近接する遺跡はなく遺跡の分布が困難な湿地帯と考えられてきた。

今回の試掘調査は民間宅地開発に伴うものであり、対象区付近で試掘確認調査が実施されたことはなく地下の状況は不明であった。平成30（2018）年5月に事業主体者との当該工事に係る協議を開始した。同年度内に用地買収や工事に着手したいことから、可能な限り早期の試掘調査を要望され、急きょ調査の準備を始めた。造成工事は概ね水田に盛土して行われる、道路用地（市道認定予定）については事前に試掘調査の必要があると判断された。

平成30（2018）年7月18日に調査を実施することで準備が整った。調査にあたっては、平成30（2018）年7月13日付け博第555号で文化財保護法第99条に基づく発掘調査の報告を提出している。終了報告は同年7月24日付け博第557号で県教育委員会に提出している。

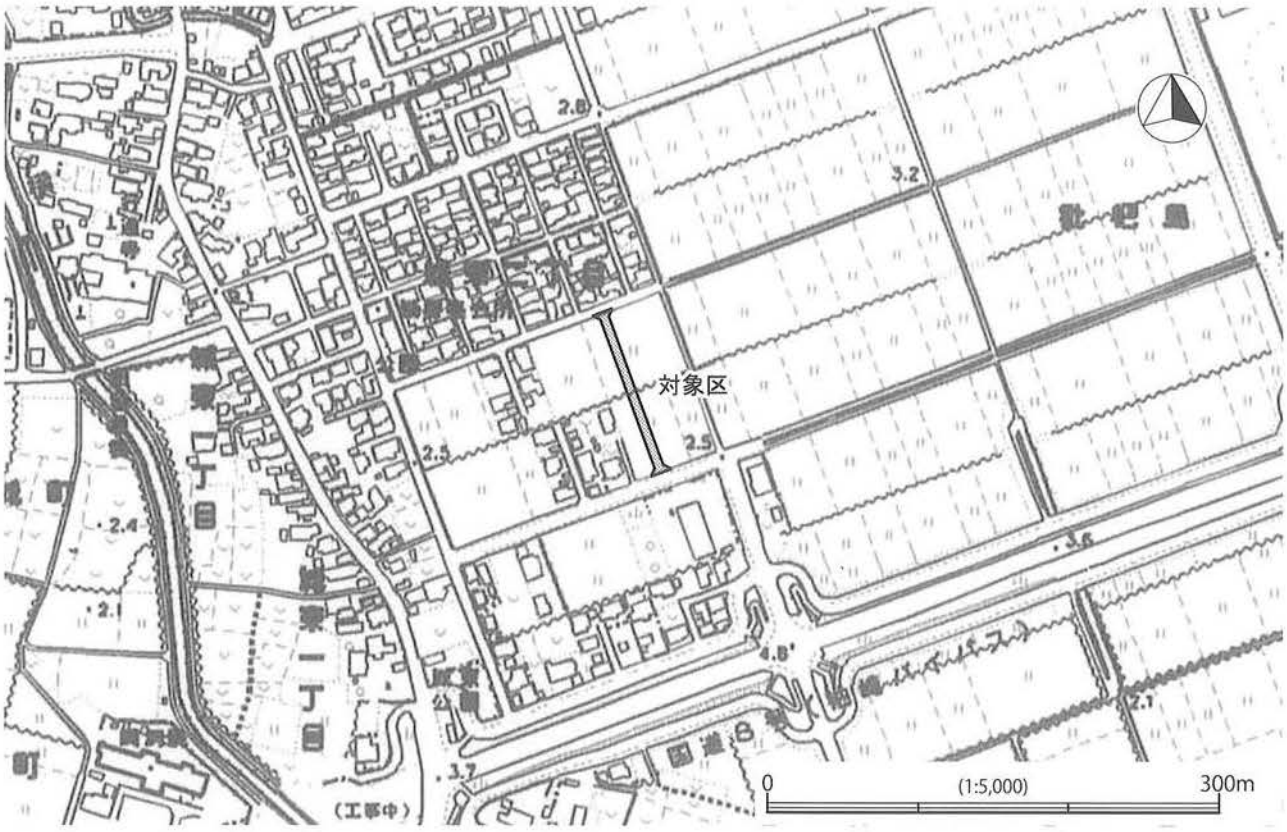
2　調査の概要

1）　調査の目的と方法

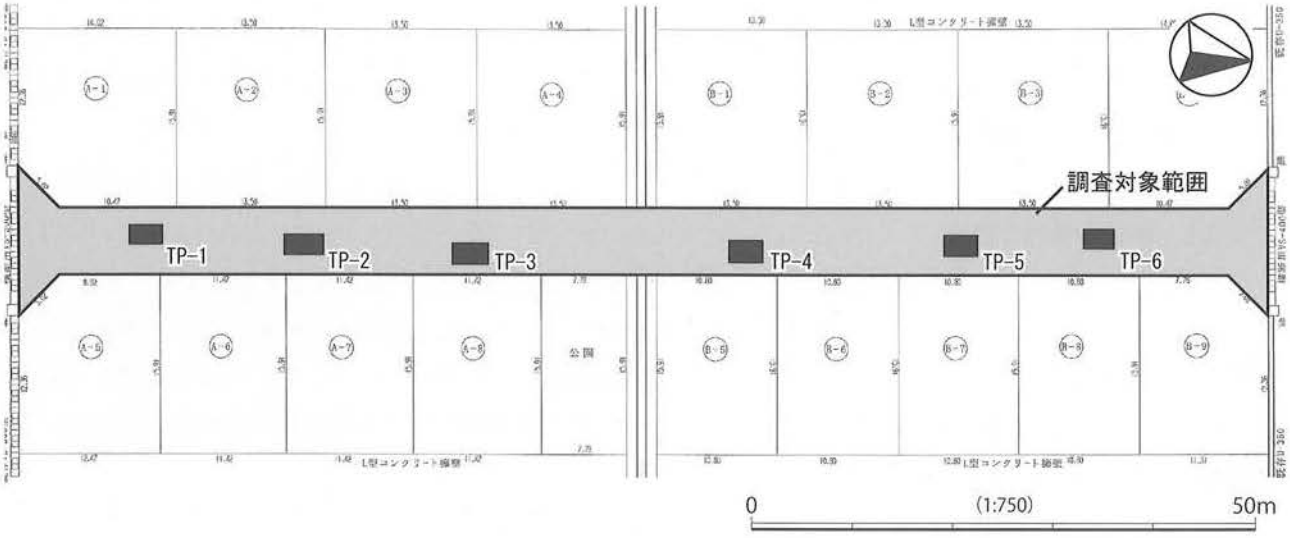
試掘調査の目的は、宅地造成工事範囲内の道路計画部分における遺跡の有無などを確認することである。この調査対象範囲は、幅約6ｍ、延長約112ｍと細長い形状であり、面積は約704㎡となる。試掘トレンチの発掘はバックホー（0.25㎡級）を使用し、対象範囲内の任意の位置6ヶ所（10～15ｍ間隔）に設定した。試掘坑6ヶ所の発掘面積は約34.65㎡であり、調査対象面積に対する発掘面積の比率（発掘率）は約4.9%となる。

2）　調査の経過と試掘坑の概要

試掘調査は、平成30（2018）年7月18日の1日間で実施した。調査員は担当職員を含む4名となる。天候は晴れであった。現況は水田であり、調査対象範囲は道路計画部分であり、幅約6ｍ、延長約112mと細長い範囲となる。調査区中央に大排水路があり、その北側の水田に3ヶ所（ＴＰ-1～3）、南側の水田に3ヶ所の試掘坑（TP-4～6）を発掘した。トレンチの配置は10～15ｍ間隔でほぼ等間隔となり、一直線上に位置するものとなった。



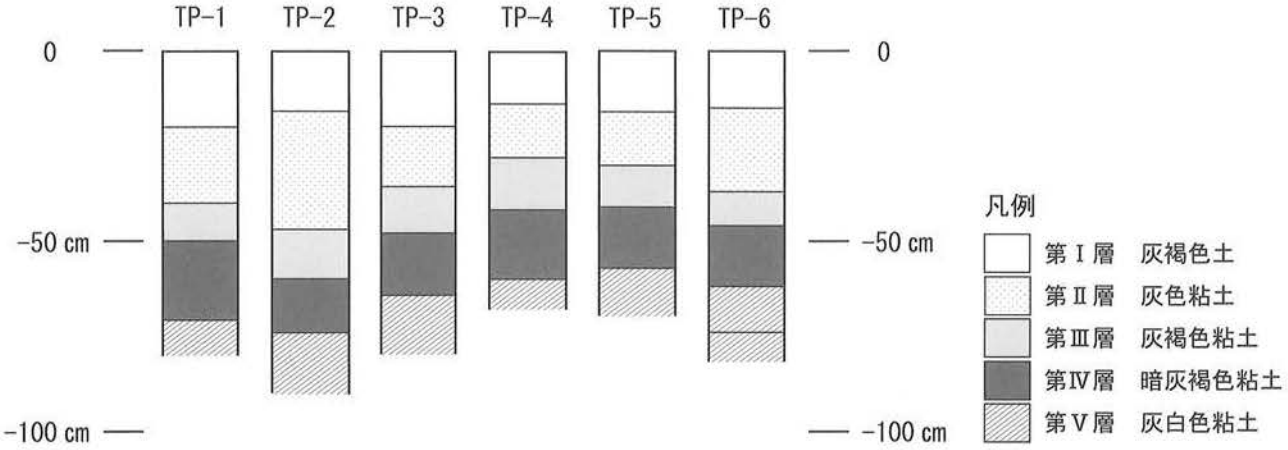
第15図　城東地区試掘調査　対象区位置図（S=1:5,000）



第16図　城東地区試掘調査　トレンチ配置図（S=1:750）

TP-1　南端に設定した。トレンチの大きさは、幅約1.8m、長さ約3.2mとなる。水田に関わる土層の下に湿地性堆積が続き、深度約70cmで灰白色粘土が検出された。腐植物等を含まず、当該地周辺の地山土と判断されため、本層を遺構確認面とし遺跡の存在を確認することとした。遺物・遺構は発見されなかった。

TP-2　TP-1の北側約11mに位置する。土層堆積状況はTP-1とほぼ同様であった。下層からは湧水があった。遺構・遺物ともに検出されなかった。



第17図　城東地点試掘調査　基本層序柱状模式図（S=1:20）

TP-3　TP-2の北側約11ｍに位置する。土層状況はTP-1・2とほぼ同様であった。遺構・遺物は確認できなかった。

TP-4　TP-3から水路を跨いだ北側約22ｍに位置する。土層状況はTP-1～3とほぼ同様であったが、地山の検出深度は約60cmと若干浅かった。遺構・遺物は確認できなかった。

TP-5　TP-4の北側約16ｍに位置する。土層状況はこれまで発掘したトレンチとほぼ同様であり、遺構・遺物は確認できなかった。

TP-6　調査区北端に位置し、TP-5の北側約9ｍの距離となる。深度約80cmまで掘削した。地山は深度約60cmで検出されたが、20cm以上続いていることが確認された。遺構・遺物は確認できなかった。

3）基本層序

試掘調査で検出された土層は概ね5層に分類される。

第Ⅰ層は水田耕作土・現表土である。第Ⅱ層は灰色粘土であり、炭化物を少量含み締りがある。色調は不均一であり水田造成に伴う土層と考えられる。第Ⅲ層は灰褐色粘土である。腐植物を少量含み10cm前後と薄い堆積となる。第Ⅳ層は暗褐色粘土である。腐植物をやや多く含み下部には小礫が含まれていた。やや締りが弱く、層内から湧水がみられた。湿地に堆積した土層と考えられる。第Ⅴ層は灰白色～青灰色粘土である。腐植物等を含まず粘性・締りが強い。当該地周辺の地山土と判断された。本層の上部で遺構確認を実施した。

3　調査のまとめ

今回の試掘調査は未周知遺跡の有無等を確認するために実施したものである。調査の結果としては、遺構・遺物が発見されず、遺跡の存在は否定的と判断されるものであった。調査区の東側一帯はかつて「鏡が沖」と呼ばれた湿地帯が広がっており、調査区もその影響を受けていた立地と考えられる。湿地帯特有の厚いカクモ層の堆積こそみられなかったが、腐植物を多く含む沖積層が堆積しており、堆積層の観察から湿地の影響が少なからず確認された。また、周辺では国道8号柏崎バイパスや横山川改修などの工事に伴う試掘調査が実施されている。結果として遺跡の痕跡は確認されておらず、付近が居住に適した環境下にはなかったものと考えられる。

V　曽地新田地点

－ 二級河川別山川広域河川改修に伴う試掘調査 －

1　調査に至る経緯

別山川は、柏崎平野を形成する主要河川の一つである鯖石川の最大の支流で、延長17,370ｍの二級河川である。柏崎市西山町別山字仲尾・甲戸を源に蛇行を繰り返して南へ向かって流れ、刈羽郡刈羽村を貫流して柏崎市上原地内で鯖石川に合流する。新潟県は、平成7（1995）年の水害を契機に、鯖石川との合流点から4.8kmの区間で治水対策を行うこととした。すでに、緊急対策区間とされた1.7kmでは工事が完了しているが、事業は継続して行われている。この事業は、新潟県柏崎地域振興局地域整備部治水・港湾課が担当する。

今回の調査対象は、柏崎市大字曽地新田地内の大沼橋の上流部分であり、平成27（2015）年に事業担当課と市教委が協議を行っていた。平成30(2018)年度は延長約40ｍにおいて改修工事を行うとのことで、この範囲に未知の埋蔵文化財包蔵地が所在するかを確認してほしい旨の依頼を受けて試掘調査を行った。

平成30（2018）年7月18日付け博第556号で文化財保護法第99条第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査の報告を新潟県教育長へ提出し、調査は平成30（2018）年7月31日に行った。

2　調査の概要

1）　調査の方法

調査対象地は、柏崎市大字曽地新田と刈羽村大字上高町を結ぶ大沼橋の上流で、別山川左岸の延長約40ｍの区間である。川沿いには堤防があるため調査は困難だが、その隣接する畑地で調査を行えた。樹木が林立しているため、その間の適当な空間を確保できる部分を選定して任意にトレンチを設定した。下流側から調査を開始し、トレンチの掘削には0.15㎥級のバックホーを使用した。遺物の出土状況や土質の変化を確認しながら基盤層とみられる面までバックホーで掘削した後、人力で土

第18図　曽地新田地点試掘調査　調査位置図（S=1:20,000）

層確認面の清掃と遺構精査を行い、写真と図面記録を作成した。作業完了後は掘削土で埋め戻して調査を完了した。

2） 基本層序

今回の調査で確認した土層は5種に大別して理解した。０層は表土層と盛土整地層をまとめた。瓦礫等が多く混じっている。調査地の現況は樹木が林立しているが元は宅地のため、その際の整地に関わるものとみられる。Ⅰ層も盛土に関わる層と考えられる。シルト質で黄橙色に近い色調で、3種に細分した。Ⅱ層は明青灰色砂混じりシルト層である。Ⅲ層は自然堆積層で、暗灰色に近い色調で、粘質土が主体である。Ⅳ層を基盤となる地山層と認識し、ここまでを調査対象とした。土質と色調で3種に細分した。

3） 調査結果

調査対象地は現況の土手部分を含めて約1,600㎡で、ここに3か所のトレンチを設定して調査した。トレンチの合計面積は8.16㎡であり、調査対象地の約0.6％である。調査の結果として、いずれのトレンチでも遺構、遺物とも出土しなかった。

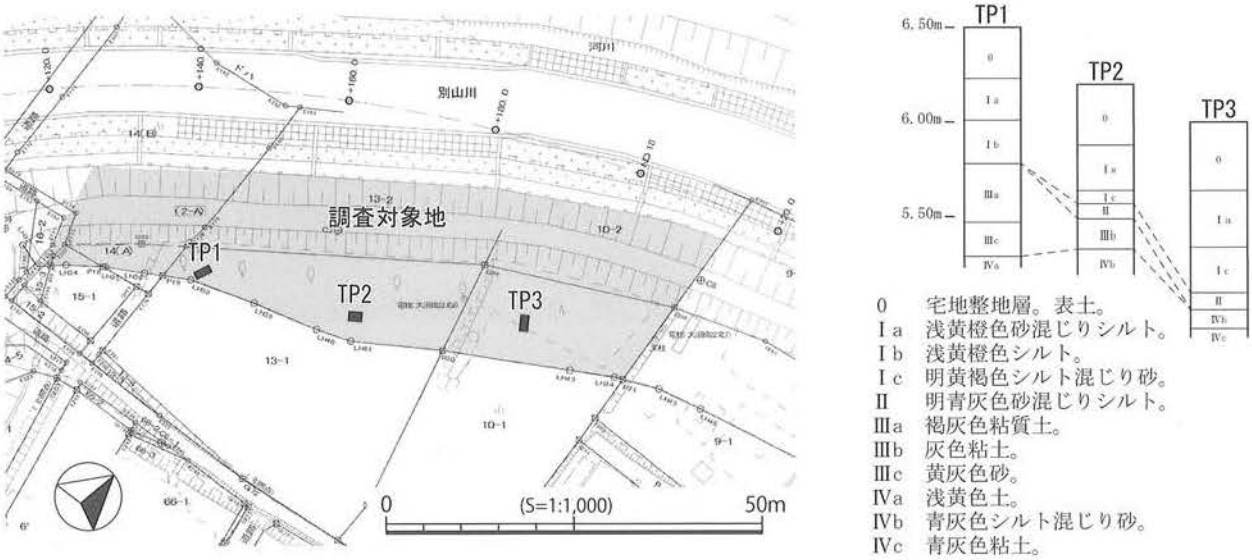
ＴＰ１　Ⅰ層の下位の灰色粘土層（Ⅲａ層）はしまりが強く、その下のⅢｂ層の黄色砂は粒がやや粗い。Ⅳ層は酸化した浅黄色のシルト質土である。

ＴＰ２　Ⅰ層の下に青灰色の砂混じりシルト層が10cm近く堆積する。その下の灰色粘土層はしまりが弱く、炭化物がごく少量混じる。包含層に相当すると思われたが、遺物は出土しなかった。地山となるⅣ層は、しまりが弱い砂混じりシルト層で青灰色を呈する。

ＴＰ３　Ⅲ層を確認できないが、他はＴＰ２と同様の堆積である。下位の状況を確認するためⅣｂ層を掘り下げたところ、砂層から粘土層へ変わったが、締まりはⅣｂ層と同様に弱かった。

3　調査のまとめ

調査の結果、いずれのトレンチでも遺構、遺物ともに出土せず、当該範囲に遺跡は存在しないと判断した。調査対象地の下位の堆積は砂層が多いことから河道跡と考えられる。ただし、ＴＰ１の地山層は酸化しており、この辺りは川岸に近かったとみられ、周囲に未知の遺跡が存在する可能性は残る。



第19図　曽地新田地点試掘調査　トレンチ配置図・土層柱状模式図（1：40）

Ⅵ　畔屋地区

－ 経営体育成基盤整備事業畔屋地区に係る試掘調査 －

1　調査に至る経緯

畔屋地区は柏崎市大字畔屋地内に所在する。柏崎市街地からは東へ約6㎞の位置となる。地形的には曽地陵西側の裾野に面している。丘陵裾部には葉脈状に開削された沢地が各地にみられる。このような沢地は鯖石川中流域右岸に形成された沖積地に接しており、今日では一帯的に水田耕作地となっている。周囲の沖積地の標高は9ｍ～10ｍであり、沢地の上部では標高20ｍを超える。地区内には周知の遺跡は存在しないが、近接地には幾つかの遺跡がみられる。畔屋集落東側の丘陵尾根には中世の山城である畔屋城が所在し、北側の与三地内には縄文時代の与三遺跡が低丘陵に所在する。また、与三集落との境界には出口の塚が所在している。

試掘調査の原因事業は、経営体育成基盤整備事業畔屋地区である。新潟県柏崎地域振興局農業振興部が事業主体者であり、平成30（2018）年度に事業採択を受け、それ以降に設計、施工を計画するものである。平成28(2016)年度に事業主体者と埋蔵文化財調査に係る協議を開始した。事業面積は約25haであり、主に面整備と用排水路工が計画されている。計画範囲は大きく3ヶ所に分かれ、北側から出口工区、北入工区、南入工区となる。何れの工区も沢地とその延長となる沖積地に相当する。沢地については大規模な遺跡は想定困難と思われた。

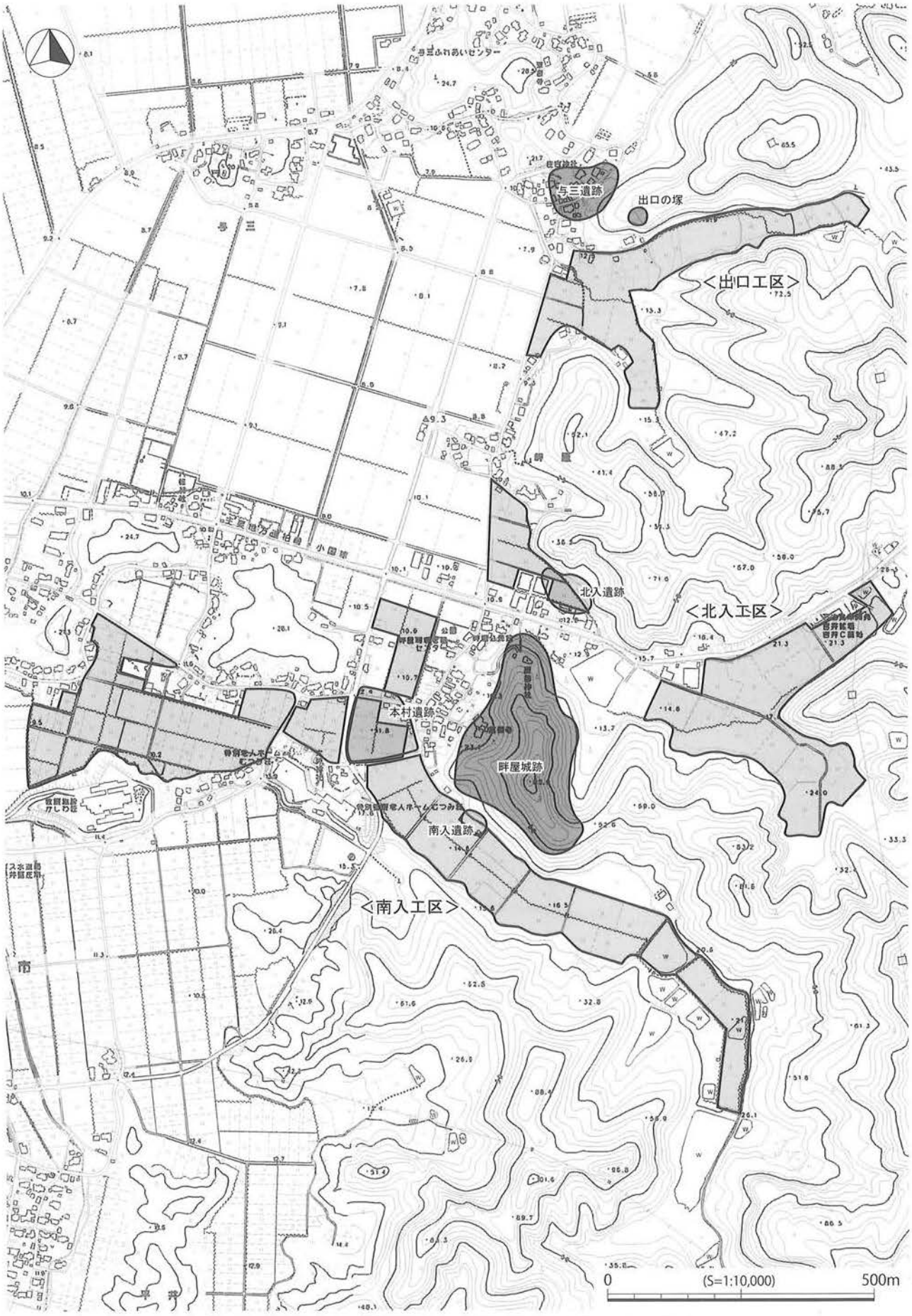
試掘調査に先行し、平成30（2018）年4月10日に遺物の散布状況を把握するための現地踏査を実施した。1日間で行い、主に南入工区内の狭い範囲から古代の遺物がまとまって採集された。この付近には新発見遺跡が所在する可能性が高いと想定された。調査実施にあたっては、事前に畔屋地区活性化委員会の役員会で調査方法の説明を行い、復旧方法などを確認したうえで試掘調査を開始している。文化財保護法の手続きとして、平成30（2018）年10月15日付け博第588号で、新潟県教育長宛に文化財保護法第99条の規定による埋蔵文化財発掘調査の報告を行い、同日から試掘調査を開始した。

2　調査の概要

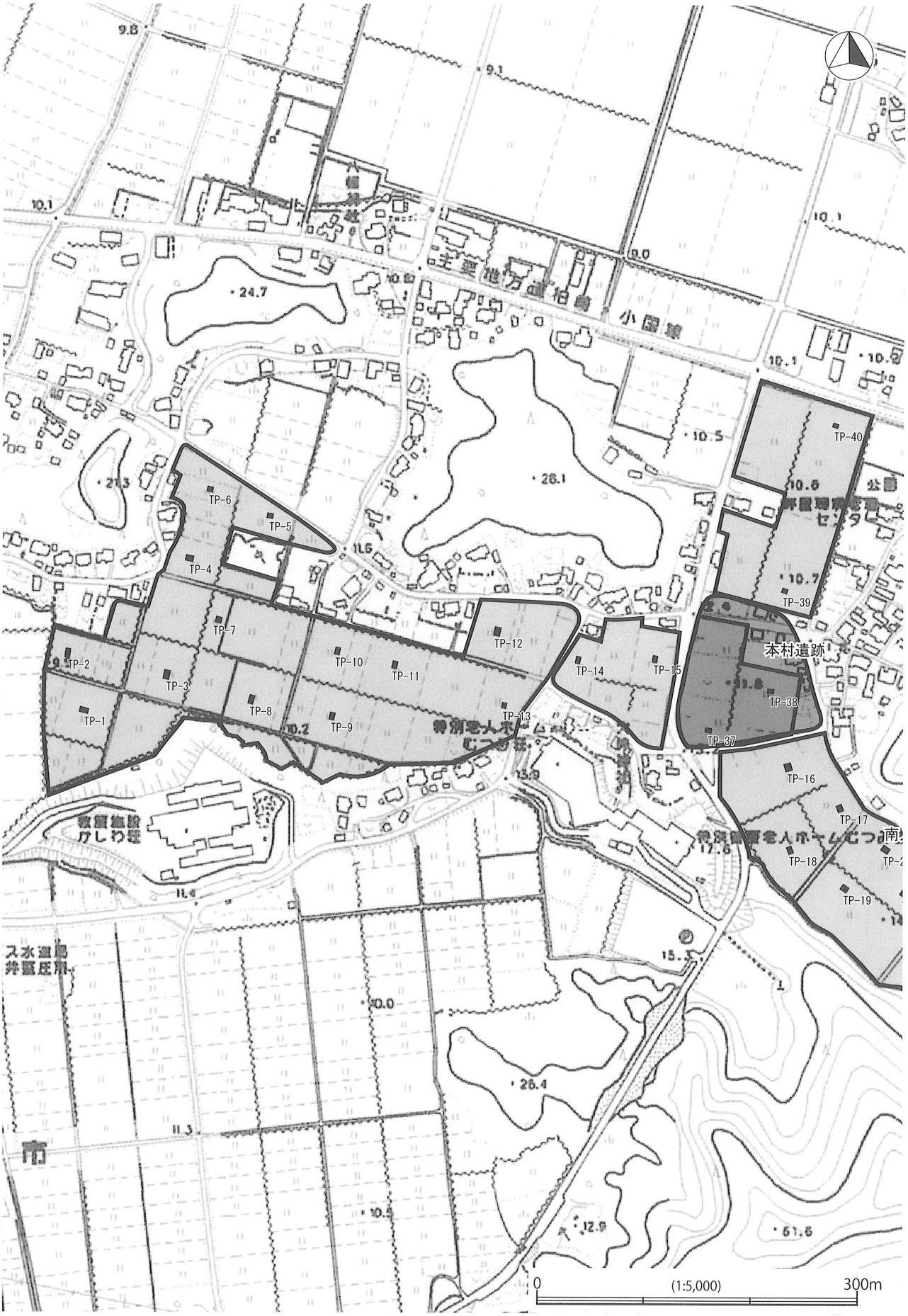
1）　調査の目的と方法

試掘調査の主目的は未周知遺跡の有無を確認することである。調査対象範囲は事業区域全域となり、対象面積は約25haとなる。調査では試掘坑の情報をもとに遺跡の範囲や深度を記録し、工事設計に係る協議資料データ作成を行った。

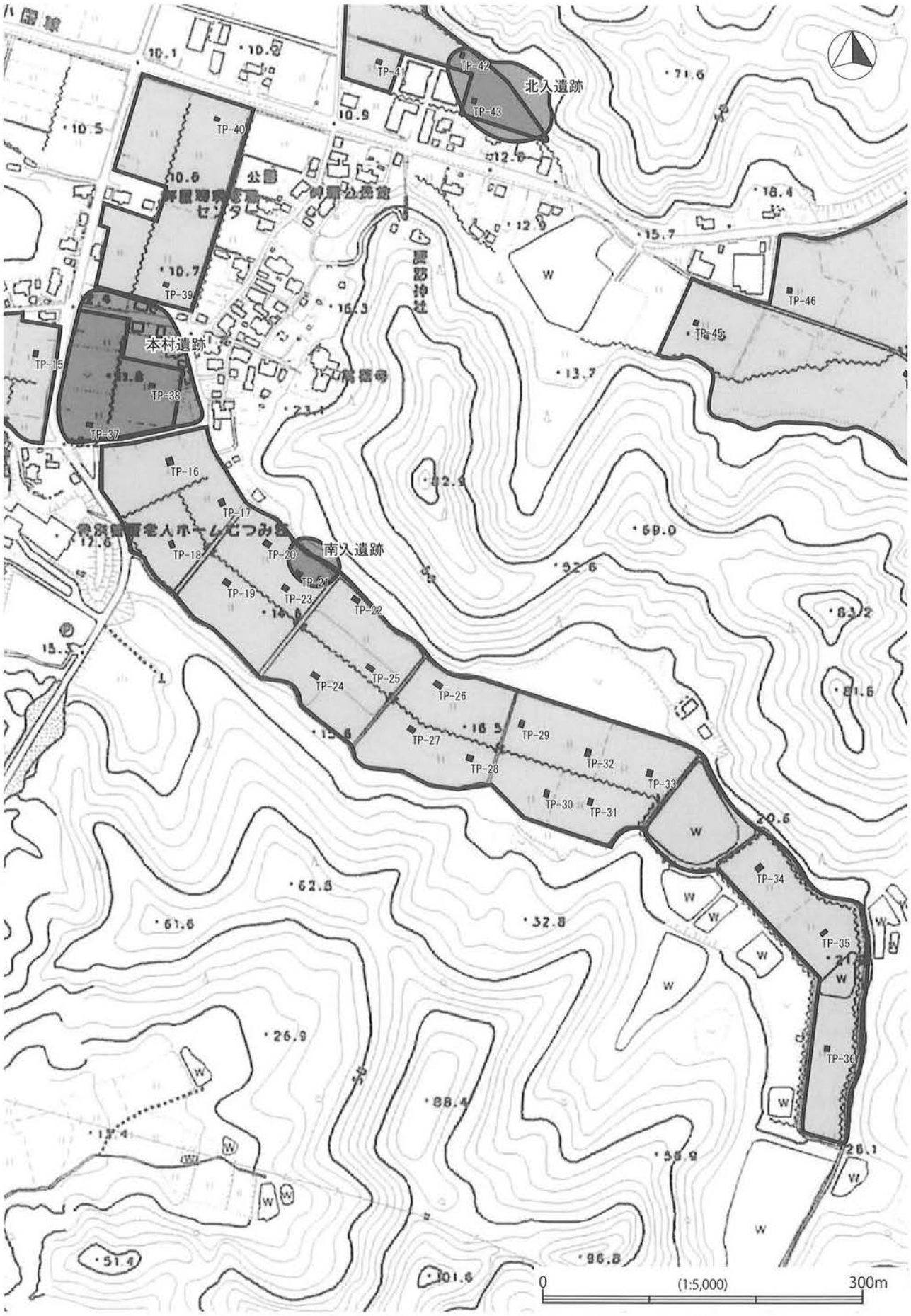
試掘坑の発掘は、バックホー（0.25㎥級）を使用した。記録作業は土層深度計測や遺構平面図作成、写真撮影などを調査員で実施した。調査区は大半が水田となるが、次年も耕作を予定しており、作付け時において農耕機の運行に支障が無いよう、入念に埋戻しを行うこととした。なお、調査にあたっては、地元の畔屋地区活性化委員会から事前に発掘承諾書の提出を受けている。



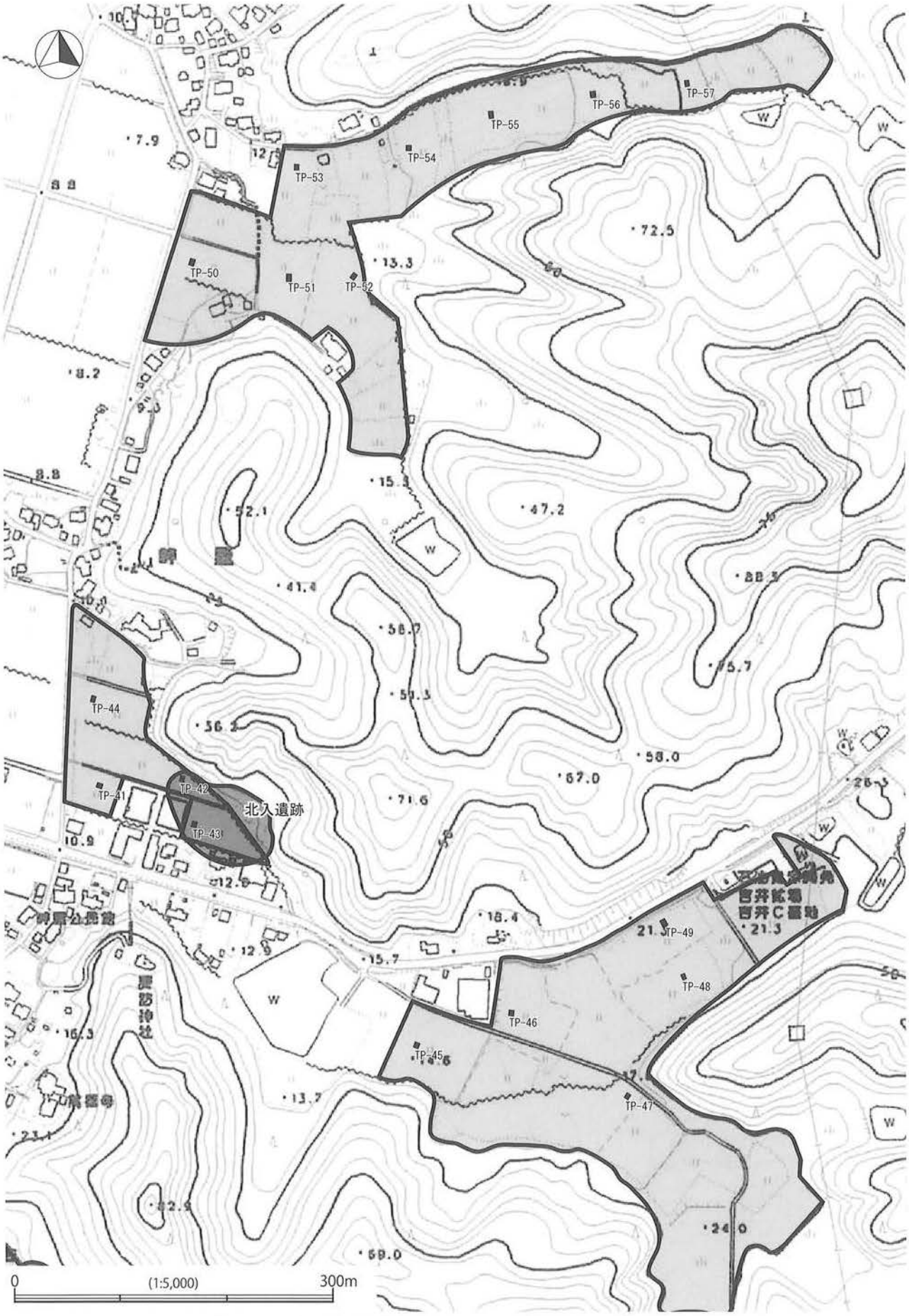
第20図　畔屋地区試掘調査　対象区位置図（S=1:10,000）



第21図　畔屋地区試掘調査　トレンチ配置図１（S=1:5,000）



第22図　畔屋地区試掘調査　トレンチ配置図２（S=1:5,000）



第23図　畔屋地区試掘調査　トレンチ配置図３（S=1:5,000）

2） 調査の経過と試掘坑の概要

調査の経過

試掘調査は、平成30（2018）年10月15日～10月26日までの延9日間で実施した。調査員は担当職員を含む延べ36名（市博物館職員）となる。調査対象範囲は大きく3地区（北から、出口工区、北入工区、南入工区）に分割される。最初に南入工区の西端から調査を実施した。その後、北入工区、出口工区の順で調査を行った。試掘坑は計57ヶ所を発掘し、全体を通し番号としTP-1～57とした。

農道が狭いことなどから重機の移動は難しく、水田の畔を跨ぐ必要もあった。翌年も耕作が予定されているため、重機の移動や掘削、復旧に時間が必要であった。また、調査後にも荒れた農道の復旧作業を実施する必要があった。調査対象範囲が3地区に分かれており、重機は公道を移動できないため、重機の回送も複数回必要であった。

発掘面積は57ヶ所のトレンチを合わせると約337㎡となる。調査対象区域の面積は約25haとなり、発掘面積の比率（発掘率）は、約0.1％となる。

発見された遺跡と試掘坑の概要

今回の試掘調査では3つの遺跡が新たに発見された。うち、1遺跡は現地踏査の際に大量の遺物が発見されており事前に想定されていたものである。その他2遺跡については、現地踏査では周辺で目立った遺物散布は見られなかった。遺跡周辺の試掘坑の概要について以下に記述する。各試掘坑の詳細については、一覧表（第4表）を参照されたい。

本村遺跡　南入工区の中央部に位置する。今回の試掘調査で新発見された遺跡である。立地としては、低丘陵から沖積地に延びる沢が2又に分岐する地点となる。推定範囲は東西約130ｍ、南北約140ｍとなる。

TP-37・38から古墳時代、古代の遺物が出土している。明確な遺物包含層（第Ⅳ層）が深度40cm前後で確認されたが、TP-37で流路跡と推定されるプランが発見された以外、遺構については不明確であった。TP-38では遺構確認面は弱酸化色を呈しており、沖積地における微高地であったと考えられる。TP-38の古墳時代の遺物出土量は極めて多く、廃棄行為等に係る出土状況の可能性もある。

南入遺跡　南入工区の東側に位置し、今回の試掘調査で新発見された遺跡である。現地踏査では遺跡内にある畑から多くの遺物が採取されていた。沢地と低丘陵の中間部にある微高地に立地し、調査対象区外にも及ぶと考えられる。付近には石塔（米山塔）1基がみられ、畔屋城のある低丘陵へと向かう赤道が始まる。一方、沢地に沿って林道が伸びており、北条方面に続くものである。このことから古くから交通があった地点と考えられる。試掘調査で明らかとなった推定範囲は東西約50ｍ、南北約50ｍと狭い。

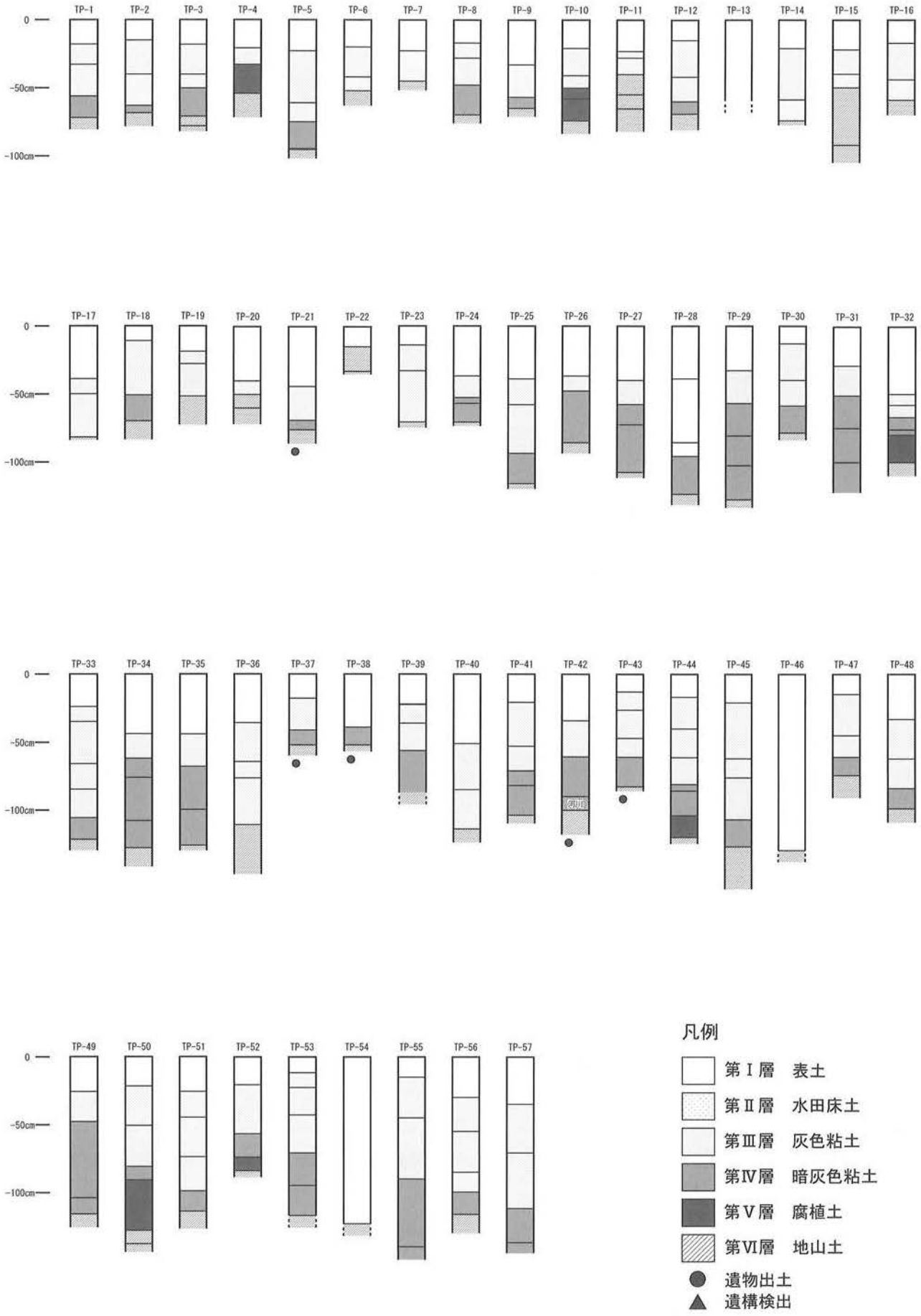
TP-21から古代の遺物がやや多く出土した。深度約70cm以下の湿地堆積から出土し、遺構は確認できなかった。遺跡の中心は北側の丘陵裾と推定される。湿地堆積土からは流木も発見されており、遺跡の縁辺ととらえることができる。遺跡に隣接するTP-22では、表土直下から地山が確認され、過去の水田造成で切土が行われたと考えられる。

北入遺跡　北入工区の調査対象区の北端に位置し、試掘調査で新発見された遺跡である。沢地と沖積地の中間部にある微高地に立地し、南入遺跡に類似する。推定範囲は南北約100ｍ、東西約85ｍとなる。

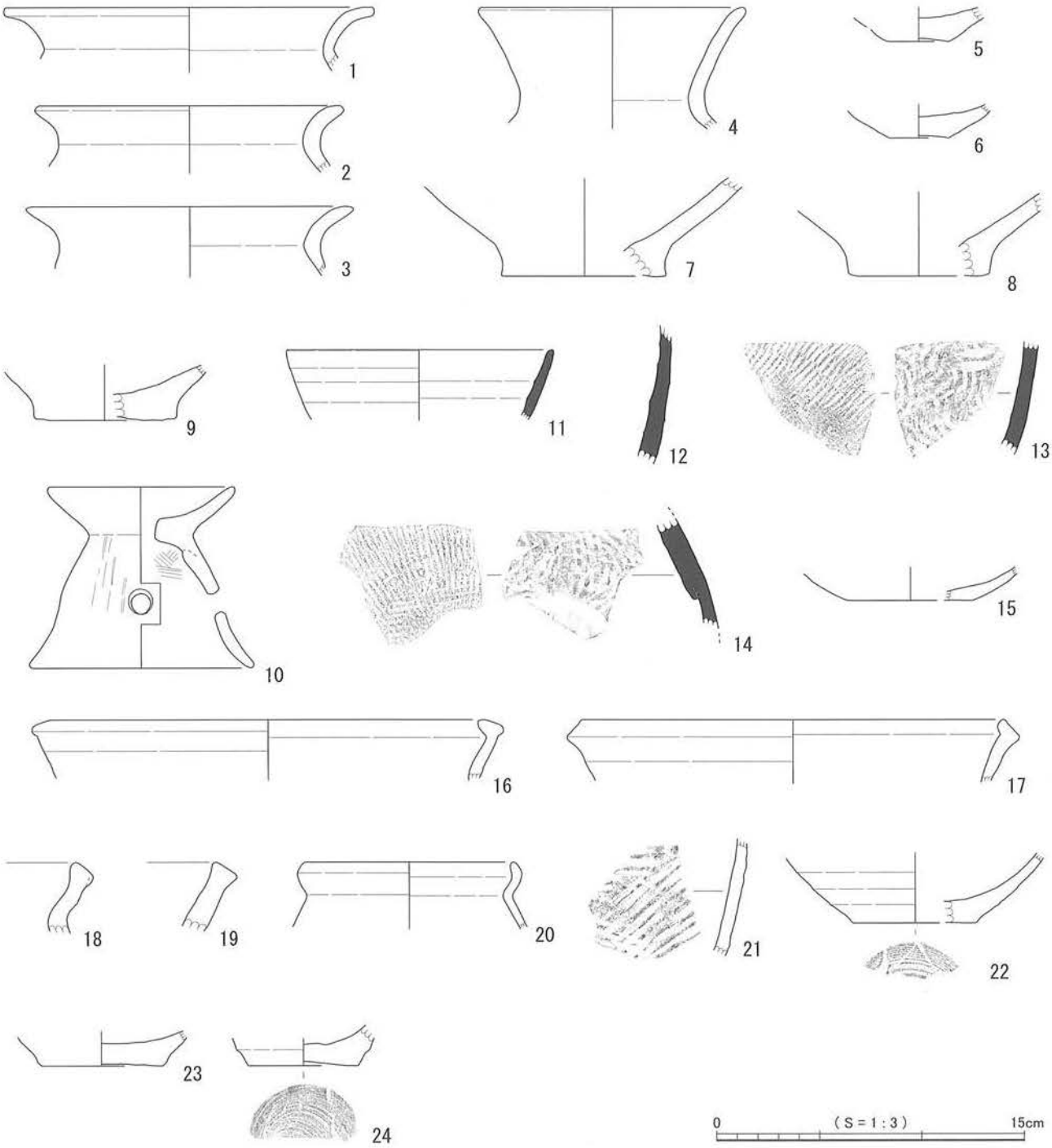
TP-42、TP-43で古代の遺物がやや多く出土している。遺物が発見されたのは湿地堆積土や河川に関わる土層内であり、深度は約60cmと深い。遺構は確認できなかった。遺跡の中心は標高の高い東側丘陵裾にあると推定される。遺物のみ発見された2つのトレンチは何れも遺跡の縁辺部と考えられる。

No.	長さ (m)	幅 (m)	面積 (㎡)	土層	遺跡深度 (cm)	掘削深度 (cm)	遺物 (個数)	掲載遺物No.	遺跡
1	2.7	2.0	5.40	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ		80	1		
2	2.8	2.1	5.88	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ		78			
3	2.5	2.0	5.00	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ		82			
4	2.6	2.2	5.72	Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ		72			
5	2.4	2.2	5.28	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ		102			
6	2.7	2.2	5.94	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ		63			
7	2.4	2.3	5.52	Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ		52			
8	3.0	2.2	6.60	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ		76			
9	2.8	2.2	6.16	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ		71			
10	2.9	2.2	6.38	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ		84			
11	2.7	2.3	6.21	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ		82			
12	3.0	2.3	6.90	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ		81			
13	2.5	2.1	5.25	水漏れのため記録なし		60			
14	2.3	2.3	5.29	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ		77			
15	2.3	2.2	5.06	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ		105	2		
16	2.8	2.6	7.28	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ		70			
17	2.6	2.3	5.98	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ		84			
18	2.5	2.1	5.25	Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ		84			
19	2.3	2.3	5.29	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ		73			
20	2.4	2.2	5.28	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ		72			
21	2.6	2.2	5.72	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ	−69	86	48	16.17.20.22	南入遺跡
22	2.5	2.2	5.50	Ⅰ・Ⅵ		35			
23	2.3	2.1	4.83	Ⅰ・Ⅱ・Ⅵ		75			
24	2.5	2.1	5.25	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ		74			
25	2.8	2.1	5.88	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ		120			
26	2.8	2.3	6.44	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ		94			
27	3.0	2.3	6.90	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ		112			
28	2.8	2.3	6.44	Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ		132			
29	3.1	2.0	6.20	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ		134			
30	3.0	2.3	6.90	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ		84			
31	3.0	2.2	6.60	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ		122			
32	3.2	2.4	7.68	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ		110			
33	2.5	2.2	5.50	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ		130			
34	3.0	2.1	6.30	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ		142			
35	3.6	2.3	8.28	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ		130			
36	2.5	2.3	5.75	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ		148			
37	2.8	2.2	6.16	Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ	−41	60	11	23	本村遺跡
38	2.8	2.3	6.44	Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ	−39	57	722	1.2.3.4.5.6.7.8.9.10	本村遺跡
39	3.1	2.2	6.28	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ		87			
40	2.9	2.3	6.67	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ		124			
41	2.6	2.1	5.46	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ		110			
42	2.6	2.2	5.72	Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ	−61	118	55	11.12.13.14.15.18.19.21.24	北入遺跡
43	2.8	2.2	6.16	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ	−61	86	30		北入遺跡
44	2.6	2.3	5.98	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ		125			
45	2.3	2.2	5.06	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ		158			
46	2.4	2.3	5.52	壁崩落のため記録なし		130	1		
47	2.6	2.2	5.72	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ		91			
48	2.5	2.1	5.25	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ		109			
49	2.2	2.0	4.40	Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ		126			
50	2.9	2.2	6.38	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ		144			
51	2.5	2.4	6.00	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ		127	2		
52	2.7	1.6	4.32	Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ		89			
53	2.6	2.2	5.72	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ		117			
54	2.3	2.3	5.29	壁崩落のため記録なし		123			
55	2.7	2.5	6.75	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ		150			
56	2.4	2.2	5.28	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ		130			
57	2.5	2.3	5.75	Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ		145			

第４表　畔屋地区試掘調査　トレンチ一覧表



第24図　畔屋地区試掘調査　基本層序柱状模式図（S=1:40）



第25図　畔屋地区試掘調査　出土遺物

3）基本層序

確認調査で検出された土層は概ね6層に分類される。調査区が数ヶ所に分かれ立地も多少異なるが、類似した土層をまとめ共通の基本層序とした。

第Ⅰ層は表土であり、水田・畑の耕作土となる。第Ⅱ層は灰色粘土であり、耕作土よりも暗色となる水田床土となる。第Ⅰ層と第Ⅱ層は分層困難な地点もあった。第Ⅲ層は灰色粘土である。炭化物や腐植物を少量含む。第Ⅳ層は暗灰色粘土である。炭化物や腐植物を多く含み暗色となる。古墳時代、古代の遺物が

No.	試掘坑	層位	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (残存高)	焼成	色調	胎土	備考
古墳時代											
1	TP-38		土師器	甕	18.0		(3.1)	やや不良	にぶい橙(2.5YR6/4)	径2mm以下の白色砂、灰色砂多量に含む。	
2	TP-38		土師器	甕	15.0		(3.3)	やや不良	外:にぶい黄橙(2.5YR6/4) 内:にぶい黄橙	径2mm以下の白色砂、灰色砂多量に含む。	
3	TP-38		土師器	甕	16.0		(3.4)	不良	橙(5YR6/8)	径2mm以下の白色砂、灰色砂多量に含む。	
4	TP-38		土師器	壺	13.0		(5.9)	やや不良	浅黄橙(10YR8/3)	径2mm以下の白色砂、灰色砂、褐色粘土粒含む。	
5	TP-38		土師器	甕ヵ		3.2	(1.7)	良	外:橙(2.5YR6/6) 内:浅黄(2.5YR7/3)	径2mm以下の白色砂、黒色砂多量に含む。	
6	TP-38		土師器	甕		2.8	(1.6)	やや不良	外:黒褐(10YR3/1) 内:にぶい橙(7.5YR7/4)	径3mm以下の砂礫多量に含む。	
7	TP-38		土師器	壺		8.0	(4.8)	良	外:オリーブ黒(5YR3/1) 内:浅黄(2.5YR7/3)	径3mm以下の砂礫多量に含む。	
8	TP-38		土師器	壺		7.0	(4.1)	良	浅黄(2.55Y8/3)	径2mm以下の砂多量に含む。	
9	TP-38		土師器	壺		7.0	(2.7)	良	外:橙(7.5YR6/6) 4 内:黄灰(2.5Y7/2)	径3mm以下の砂礫多量に含む。	
10	TP-38		土師器	器台	9.1	11.0	8.9	やや不良	淡黄(2.5Y8/3)	径2mm以下の砂多量に含む。	外、内にハケ調整 約2/3残存
平安時代											
11	TP-42		須恵器	杯	13.0		(3.5)	良	灰(N7/)	径1mm以下の白色砂含む。	
12	TP-42		須恵器	壺			(6.5)	良	灰(N7/)	径1mm以下の白色砂含む。	
13	TP-42		須恵器	甕			(5.5)	良	外:灰(5Y6/1) 内:浅黄(2.5Y7/4)	径2mm以下の白色砂・灰色砂含む。	
14	TP-42		須恵器	横瓶			(5.9)	良	灰(N7/)	径3mm以下の白色砂・灰色砂含む。	側面の閉塞部付近
15	TP-42		土師器	椀		6.0	(1.6)	良	にぶい黄橙(7.5YR7/3)	径1mm以下の白色砂、雲母含む。	
16	TP-21	Ⅲ	土師器	長甕	23.0		(3.1)	良	外:淡橙(5YR8/4) 内:にぶい黄橙(10YR7/3)	径2mm以下の白色砂・灰色砂含む。	
17	TP-21	Ⅲ	土師器	長甕	20.2		(3.1)	良	橙(5YR6/6)	径2mm以下の灰色砂やや多く含む。	
18	TP-42		土師器	長甕			(3.4)	良	にぶい黄橙(10YR7/3)	径1mm以下の白色砂、灰色砂僅かに含む	
19	TP-42		土師器	鍋	10.4		(3.5)	良	にぶい黄橙(10YR7/3)	径1mm以下の白色砂僅かに含む	
20	TP-21	Ⅲ	土師器	小甕			(3.3)	やや不良	灰白(2.5Y8/2)	径1mm以下の白色砂、灰色砂含む	
21	TP-42		土師器	長甕			(5.7)	良	にぶい黄橙(10YR7/3)	径1mm以下の白色砂、雲母含む。	
22	TP-21	Ⅲ	土師器	甕		6.0	(3.4)	やや不良	にぶい黄橙(10YR7/3)	径2mm以下の白色砂、雲母混入	
23	TP-37		土師器	小甕		6.0	(1.7)	やや不良	橙(2.5YR6/8)	径1mm以下の白色砂僅かに含む	
24	TP-42		土師器	甕		5.4	(1.4)	良	にぶい黄橙(10YR7/3)	径2mm以下の白色砂混入	

第５表　畔屋地区試掘調査　出土遺物観察表

出土する。第Ⅴ層は黒色腐植土であり、深い深度から検出されている。腐植物が主体であり、粘性・締りは弱い。第Ⅵ層は黄灰色～青緑色粘土であり、粘性・締りは強く炭化物等を含まない。調査区周辺に堆積する地山土と判断される。本層上部で遺構確認を実施している。

4）出土遺物

試掘調査で出土した遺物は、約870点となる。本村遺跡（TP-37･38）からは古墳時代の遺物が多く（約730点）出土している。一方、南入遺跡（TP-21）、北入遺跡（TP-42・43）では平安時代の遺物が主体的に出土している（南入遺跡：約50点、北入遺跡：約90点）。小片が多くを占め、図化・掲載可能な遺物は24点にとどまる（第25図、図版8）。以下に概要と特筆される遺物のみを記述し、個別の詳細については観察表（第5表）を参照されたい。

a.古墳時代（1～10） 1～10は古墳時代の土師器である。器種は甕、壺、器台がみられる。砂礫が大量に混入されており、平安時代の土師器との違いは明瞭である。1～3は甕の口縁部である。何れも曲線的に強く外反する口縁となり、端部に面取りは施されない。4は長頸壺の口縁～頸部と推定される。5～9は甕、壺の底部である。7、8は大型、厚手であり壺の底部と考えられる。10は小型器台であり、比較的残存率が高い。脚部は中間部に膨らみをもち、3箇所の穿孔が施される。外面にナデ、内面にハケメがみられる。これらは、概ね古墳時代前期頃の特徴をもつと考えられる。

b.平安時代（11～24） 須恵器と土師器がみられる。

11～14は須恵器である。11は無台坏であり、12は壺、13は甕の体部となるが、全体の形態まではうかがえない。14は横瓶の体部である。円盤状の粘土が外側に張り付いており閉塞の痕跡とみられる。15～24は土師器である、16～19は長甕の口縁部であり、21は胴部となる。20は小甕の口縁部で、22～24は底部である。22は底部付近まで稜線が明瞭にみられる。無台椀も少量出土しているが、小片に限られ図化可能なものは15のみであった。

3　調査のまとめ

今回の試掘調査は、調査対象区内における未周知遺跡の有無を把握する目的で実施したものである。調査結果は、新たに3つの未周知遺跡が発見された。事前に実施した現地踏査では、1ヶ所のみで遺物がまとまって採集されており、試掘調査でその付近から南入遺跡が新発見された。その他にも北入遺跡、本村遺跡の2遺跡が発見される結果となった。後者の2遺跡は現地踏査でまとまった遺物は採集されていない。これは、水田造成での影響が少なく遺存状態が良好であるためと考えられる。何れの遺跡も明確な遺構を発見することはできず、詳細は不明確である。北入遺跡と南入遺跡は調査対象区の外周部やさらに外側に中心があると推定される。本村遺跡は古墳時代の集落跡と考えられ、中通地区にある吉井遺跡群との関わりが想定される。付近には中世の山城となる畔屋城が所在するが、調査対象区内からは中世の遺物はとくに発見されず、集落は現畔屋集落中に埋没しているものと推定される。調査範囲は沢地が大半であり、遺跡の立地はあまり想定されていなかった。しかしながら、丘陵の僅かな張出部分から遺跡が発見され、北鯖石地区の生活を垣間見ることができた。柏崎市域では、今後も大規模なほ場整備計画に伴う試掘調査の実施が見込まれ、沖積地を活用した人々の生活史が明らかとなっていくことが期待される。

Ⅶ　本条地区

－ 経営体育成基盤整備事業本条地区に係る試掘・確認調査 －

1　調査に至る経緯

本条地区は柏崎市大字本条、大字北条、大字東条ほかに所在する。柏崎市街地からは南東へ約7～9kmの位置となる。地形的には主に鯖石川と長鳥川付近の沖積地に相当する。沖積地は河川に近接し幅は広くなく、大部分は氾濫原であったと想定されるものである。今日では一帯的に水田耕作地となっている。周囲の沖積地の標高は14mから25mとなる。地区内には亀ノ倉遺跡が所在し、馬場・天神腰遺跡は地区に近接している。

試掘・確認調査の原因事業は、経営体育成基盤整備事業本条地区である。新潟県柏崎地域振興局農業振興部が事業主体者であり、平成30（2018）年度に事業採択を受け、それ以降に設計、施工を計画するものである。平成28（2016）年度に事業主体者と埋蔵文化財調査に係る協議を開始した。事業面積は約38haであり、主に面整備と用排水路工が計画されている。計画範囲は大きく4工区に分散する。西側から今熊工区（大字平井、大字安田、大字本条地内ほか）、十日市工区（大字本条地内）、愛宕沖工区（大字北条、大字本条地内ほか）、東条工区（大字東条地内）となる。十日市工区は付近に北条城が所在し、愛宕沖工区内には亀ノ倉遺跡が所在することから、調査期間は長期におよぶものと想定された。

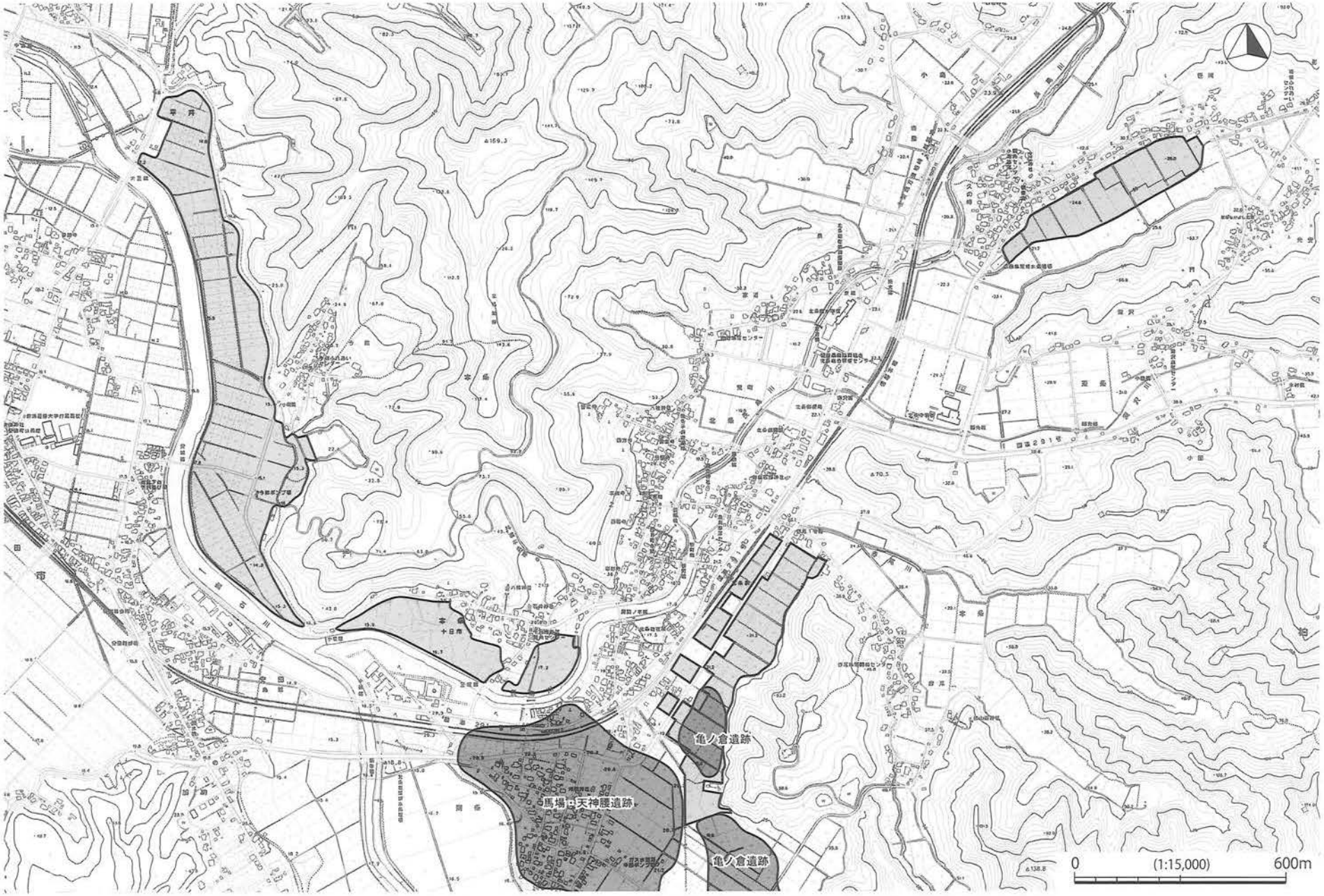
試掘・確認調査に先行し、平成30（2018）年4月9日、1日間で遺物の散布状況を把握するための分布調査を実施した。愛宕沖工区における亀ノ倉遺跡推定範囲付近から比較的多くの遺物が採集されたが、その他の工区ではまとまった量の遺物は採集されなかった。調査実施にあたっては、事前に本条地区の地権者説明会（計5回）で調査方法の説明を行い、復旧方法などを確認したうえで試掘調査を開始している。文化財保護法の手続きとして、平成30（2018）年10月29日付け博第604号で、新潟県教育長宛に文化財保護法第99条の規定による埋蔵文化財発掘調査の報告を行い、同日から試掘・確認調査を開始した。

2　調査の概要

1）　調査の目的と方法

試掘・確認調査の主目的は亀ノ倉遺跡の範囲や詳細、未周知遺跡の有無などを確認することである。調査対象範囲は事業区域全域となり、対象面積は約38haとなる。ただし、旧河道跡と判断される部分には試掘坑は原則として発掘しない方針とした。調査では試掘坑の情報をもとに遺跡の範囲や深度を記録し、工事設計に係る協議資料データ作成を行った。

試掘坑の発掘は、バックホー（0.25㎥級）を使用した。記録作業は土層深度計測や遺構平面図作成、写真撮影などを調査員で実施した。調査区は大半が水田となるが、次年も耕作を予定しており、作付け時において農耕機の運行に支障が無いよう、入念に埋戻しを行うこととした。なお、調査にあたっては、地元の本条地区活性化委員会から事前に発掘承諾書の提出を受けている。



第26図　本条地区試掘・確認調査　対象区位置図（S=1:15,000）

2） 調査の経過と試掘坑の概要

調査の経過

試掘・確認調査は、平成30（2018）年10月29日～11月15日までの延12日間で実施した。調査員は担当職員を含む延べ49名（市博物館職員）となる。調査対象範囲は4工区に分散して所在する（西から、今熊工区、十日市工区、愛宕沖工区、東条工区）。最初に今熊工区、次に十日市工区、東条工区、愛宕沖工区の順に調査を進めた。愛宕沖工区については周知の遺跡が所在することから長期間を要すると想定され、最終地点としたものである。試掘坑は計91ヶ所を発掘し、全体を通し番号としＴＰ-1～91とした。

調査区の現況は水田であり、翌年も耕作が予定されているため、重機の移動や掘削、復旧に時間が必要であった。また、調査後にも荒れた農道の復旧作業を実施する必要があった。調査対象範囲が距離を隔て4地区に分かれていることから、重機の回送も複数回必要であった。

発掘面積は91ヶ所のトレンチを合わせると約430㎡となる。調査対象区域の面積は約38haとなり、発掘面積の比率（発掘率）は、約0.1％となる。

確認された遺跡と試掘坑の概要

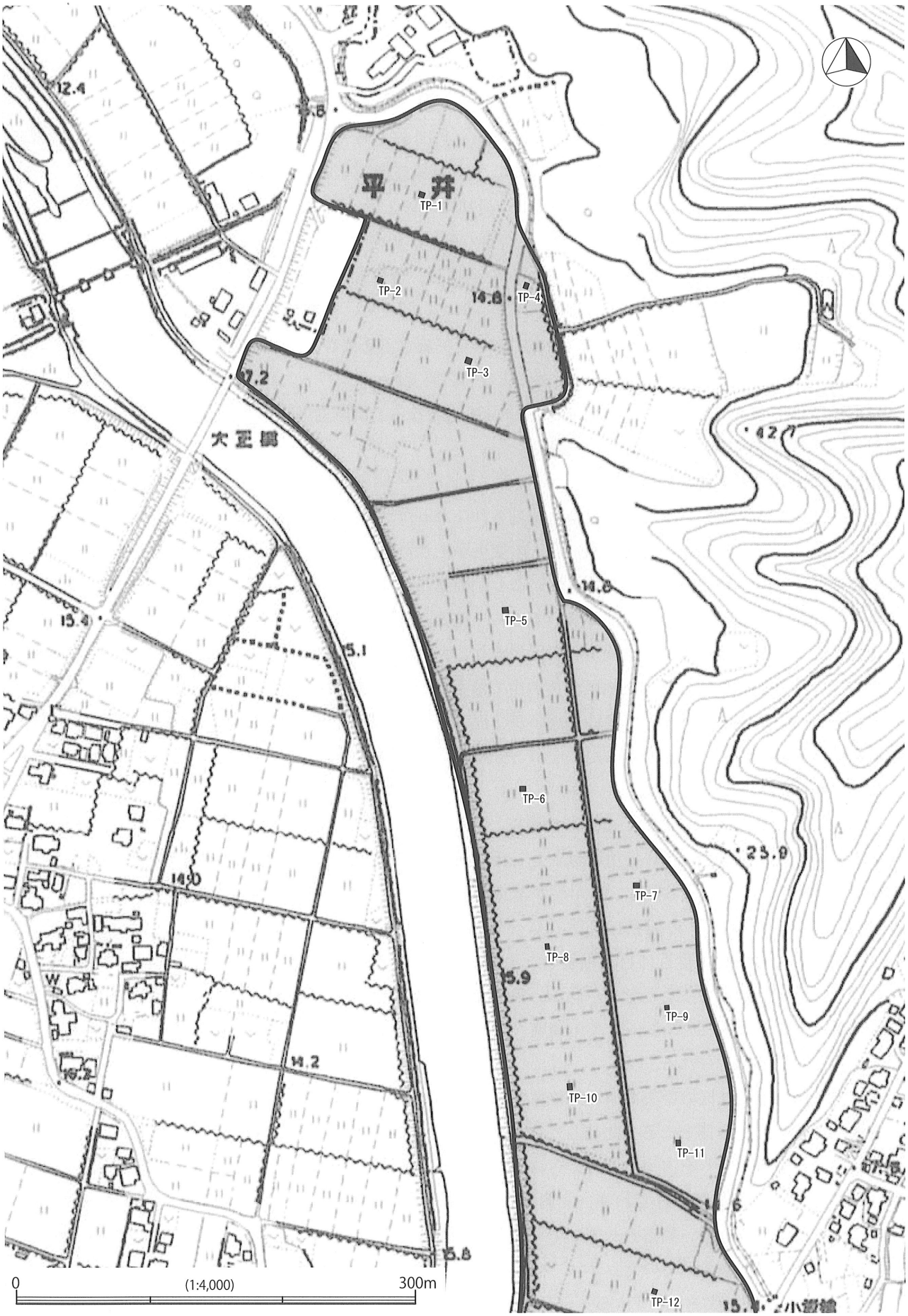
今回の試掘・確認調査では新たな遺跡は発見されなかったが、周知の遺跡である亀ノ倉遺跡の広がりが確認された。調査の結果から推定範囲に若干の変更が生じた。一方、調査対象範囲に隣接する馬場・天神腰遺跡については、範囲内には及んでいないことが確認された。各工区、遺跡周辺の試掘坑の概要について以下に記述する。各試掘坑の詳細については、一覧表（第6表）を参照されたい。

今熊工区　本条地区の西側に位置する工区であり、大字平井、大字安田、大字本条地内に所在する。鯖石川右岸の沖積地に相当し、本条地区全体の中で最も広い工区となる。標高は13～15ｍとなる。地形的には鯖石川の氾濫原に相当する可能性が高いが、部分的に自然堤防が存在する可能性もあるため、調査対象範囲から除外することはしなかった。なお、分布調査の結果としては、中世以前の遺物はほとんど採集されていない。

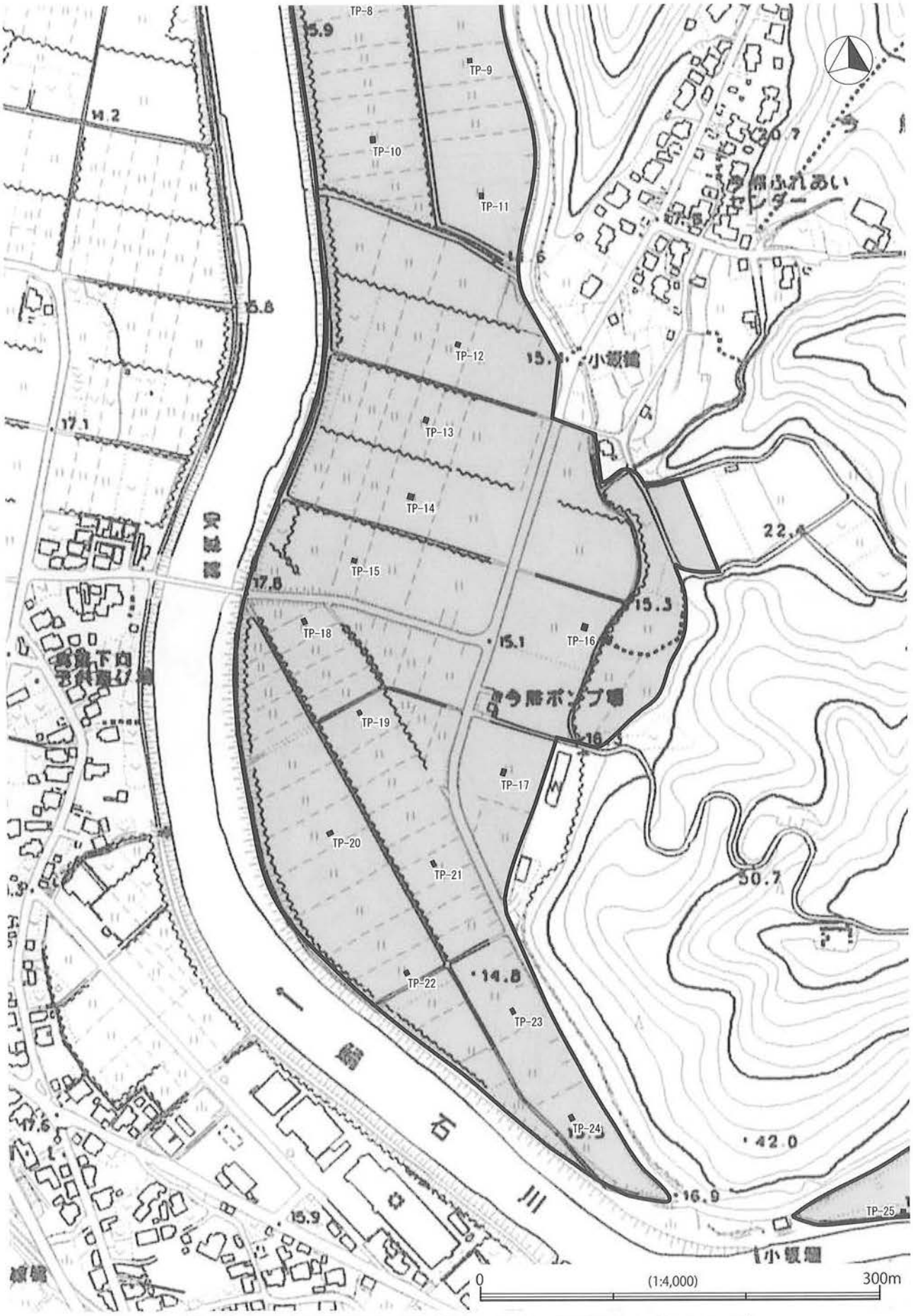
10月29日～11月1日までの延べ3日間で実施した。TP-1～TP-24の24ヶ所に試掘トレンチを発掘した。自然堤防の存在が想定されない箇所ではトレンチの間隔を広く開けた。また、常時湿地となる水田もあり、調査では除外した。TP-3・8などでは川砂が厚く堆積していた。搬入されたものであり河川改修などに係わる層と推定される。一方、TP-10・18・20～22などでは自然堆積土となる川砂が細かく幾層かに分かれて堆積しており、河川付近に自然堆積した土層と考えられる。TP-4などでは腐植土が深くまでおよんでおり、周囲が湿地であったと考えられる。地山土を確認したトレンチは無く、河川や湿地に係わる土層のみが確認された。何れのトレンチでも遺構、遺物は発見されなかった。このため、当該工区全体が氾濫原であったものと考えられる。

十日市工区　本条地区の中央部西側に位置する工区であり、大字本条地内に所在する。長鳥川が鯖石川に合流する位置の右岸側となる。先述した今熊工区の東側に近接し、標高は15～16ｍとなる。地形的には長鳥川の氾濫原が多くを占めると考えられるが、一部河岸段丘状の高地もみられる。十日市集落は標高20ｍ前後の丘陵裾部に営まれており、北側丘陵には北条毛利の要害である北条城跡が存在する。丘陵の裾には寺社が多くみられ、集落の一部は中世的な街並みの姿をとどめている。分布調査では東側で僅かに中世以前の遺物が採集されていた。

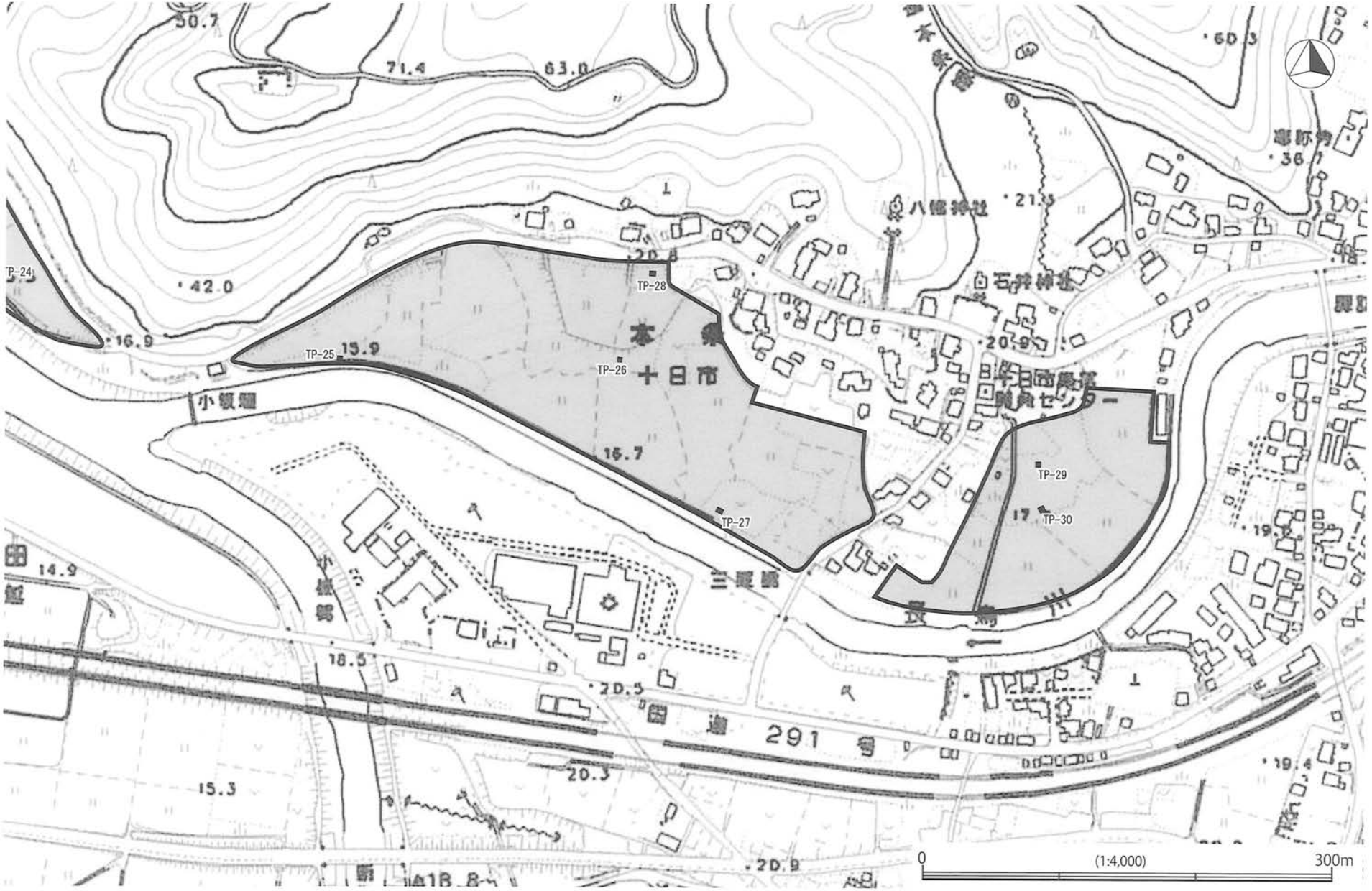
11月2日の1日間で実施し、TP-25～TP-30の6ヶ所を発掘した。調査対象区の水田は湿地性が強く農



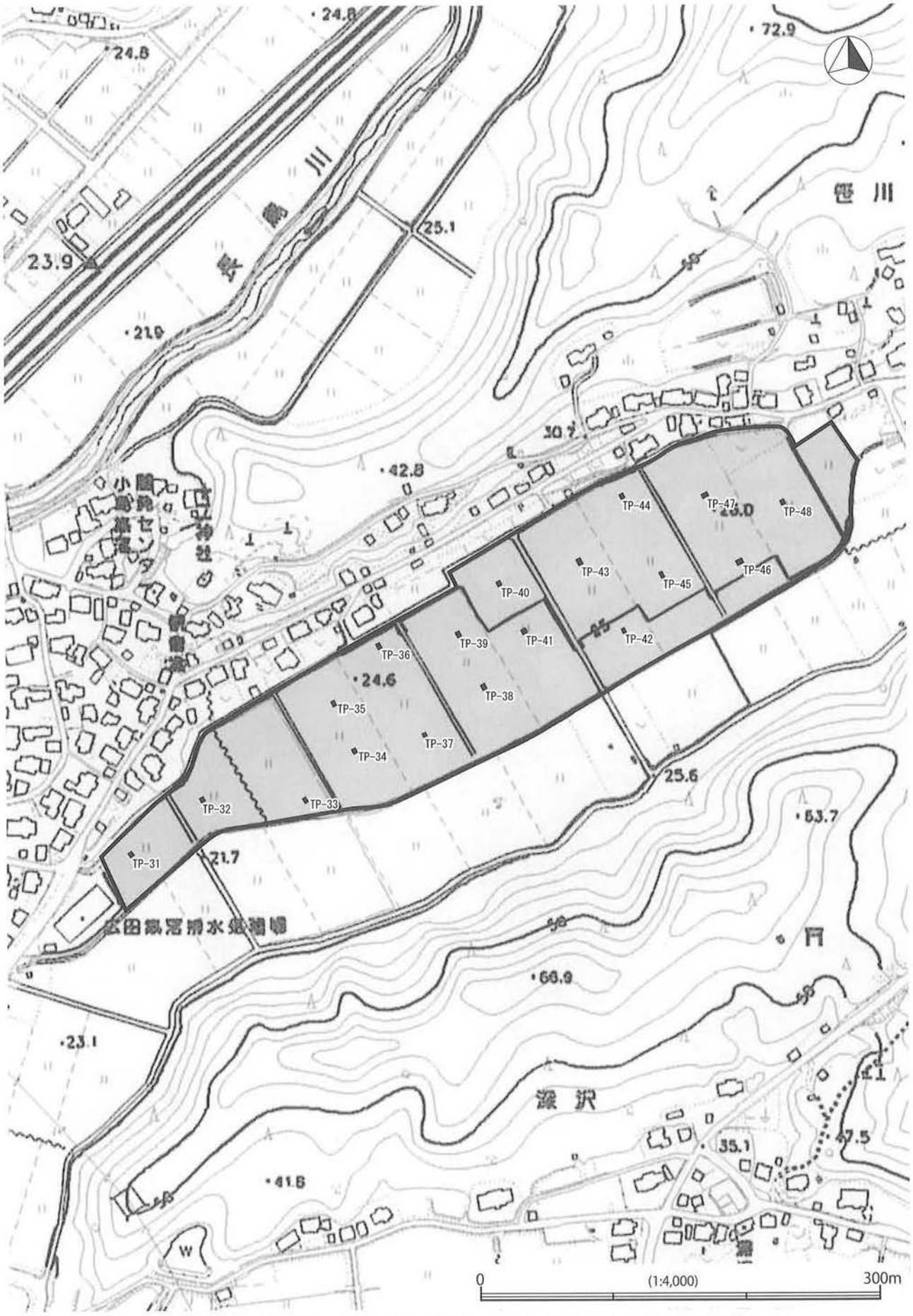
第27図　本条地区試掘・確認調査　トレンチ配置図１（S=1:4000）



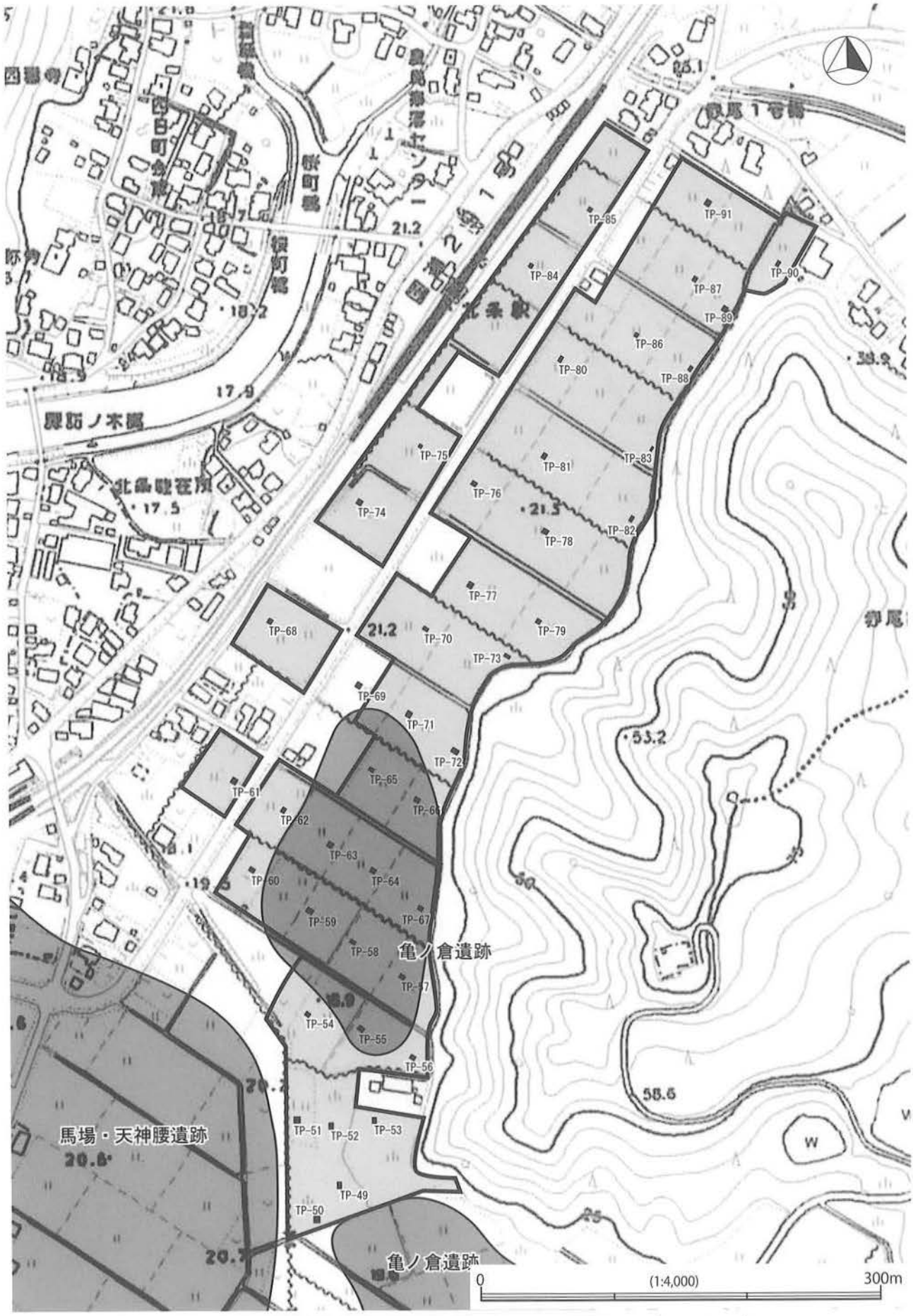
第28図　本条地区試掘・確認調査　トレンチ配置図２（S=1:4000）



第29図　本条地区試掘・確認調査　トレンチ配置図３（S=1:4000）



第30図　本条地区試掘・確認調査　トレンチ配置図４（S=1:4000）



第31図　本条地区試掘・確認調査　トレンチ配置図５（S=1:4000）

道が未整備な地点も多いため、重機が侵入可能な水田は限られていた。このため、試掘トレンチは6ヶ所に限定された。TP-26では深度約70cmで地山となる青灰色粘土が検出されたが、その他のトレンチでは腐植土が深く及んでいた。TP-28は段丘上の高地となる水田に設定した。丘陵の堆積が想定されたが、実際には沖積地にみられる腐植土が深くまで及んでいた。丘陵から続く沢跡に位置する可能性があるが遺物等は発見されなかった。当工区内のトレンチから遺物・遺構は発見されなかった。

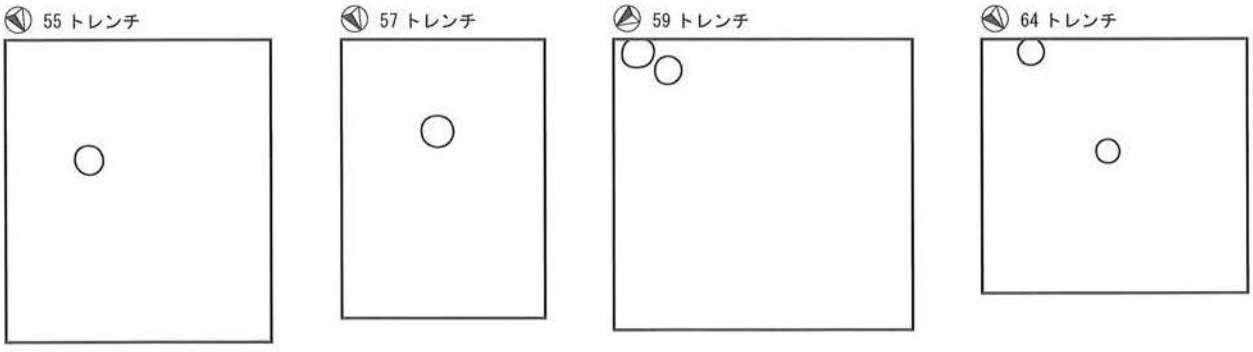
東条工区　本条地区の北東に距離を隔てて位置する工区であり、大字東条地内に所在する。長鳥川中流域に位置し、地形は八石山塊から続く丘陵の合間に形成された狭小な沖積地となる。標高は25m前後となるが南側に小河川の高津川が流れやや標高が低くなる。沖積地の南西側約400mの距離には平安時代の音無瀬遺跡が所在する。調査対象範囲は約600m×130mとなる。分布調査では僅かながら遺物が採集されている。

11月5日～11日7日までの3日間（2.5日間）で、TP-31～TP-48の18ヶ所に試掘トレンチを発掘した。地下堆積は、概ね70cm～1mに青灰色粘土となる地山が検出された。腐植土が堆積していたのはTP-46だけであり、比較的締りのある沖積層が堆積していた。TP-45では土師質土器小片1点が発見された。その他のトレンチでは遺物は発見されなかった。遺構は全トレンチで検出されなかった。

愛宕沖工区　本条地区の中央部東側に位置する工区であり、大字本条地内ほかに所在する。長鳥川下流域の左岸側に位置する。付近にはＪＲ信越線の北条駅が存在する。標高は20～21mとなる。地形的には長鳥川が形成した小規模な沖積地となる。工区内には古墳時代、平安時代、鎌倉時代の亀ノ倉遺跡が所在する。また、工区南西には南条毛利氏との関わりが考えられる馬場・天神腰遺跡が隣接する。分布調査では亀ノ倉遺跡推定範囲付近で古代を中心とした遺物がやや多く採集されている。

調査は11月7日～11月15日の6日間で実施し、TP-49～TP-91の43ヶ所を発掘した。とくに亀ノ倉遺跡推定範囲周辺ではトレンチを多く設定し、遺跡範囲を明確にするものとした。工区南西側は現況が荒地であり水田に盛土がなされていた。TP-49～50では河川跡が検出された。旧追田川の可能性があり、TP-49では覆土から土器片数点が出土した。TP-51でも水路跡が検出されている。中央部南寄りは後述のとおり亀ノ倉遺跡が所在し微高地であったが、北半部は腐植土が堆積する湿地性が強い状況が確認されている。

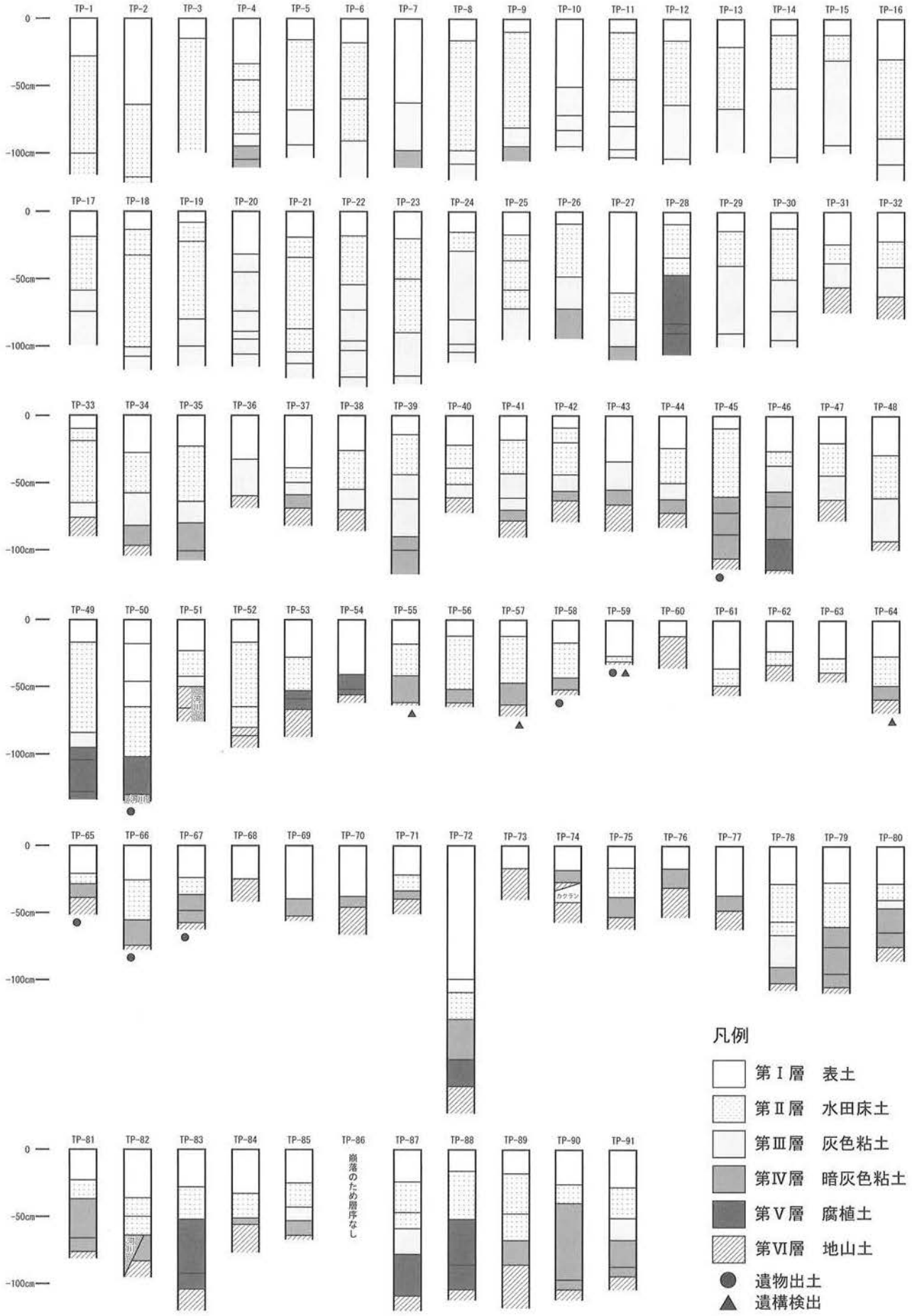
＜亀ノ倉遺跡（Ｂ地点）＞　TP-55･57～59･63～67では遺構･遺物が発見されており、亀ノ倉遺跡（Ｂ地点）の範囲内と判断される。従来の推定範囲とは若干異なる結果を受け、範囲変更するものとした（平成31（2019）年2月に変更完了）。東西約130m、南北約230mの推定範囲とした。概ね深度30～50cmで遺跡が発見されているが、地山が酸化色を呈していることから微高地であったと判断される。ただし、小ピットや古代の遺物が少量確認されるだけであり、遺跡の遺存状況は不良といわざるを得ない。TP-59～



第32図　本条地区試掘・確認調査　検出遺構見取図（S=1/60）

No.	長さ (m)	幅 (m)	面積 (㎡)	土層	遺跡深度 (cm)	掘削深度 (cm)	遺物 (個数)	掲載遺物No.	遺跡
1	2.7	2.4	6.48	Ⅰ・Ⅱ		116			
2	2.6	2.6	6.76	Ⅰ・Ⅱ		122			
3	2.8	2.3	6.44	Ⅰ・Ⅱ		100			
4	2.5	2.3	5.75	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ		111			
5	2.4	2.4	5.76	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ		104			
6	2.3	2.2	5.06	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ		118			
7	2.2	2.1	4.62	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ		111			
8	2.8	2.4	6.72	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ		120			
9	2.5	2.3	5.75	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ		106			
10	2.4	2.1	5.04	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ		98			
11	2.7	2.4	6.48	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ		105			
12	2.3	2.1	4.83	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ		108			
13	2.5	2.2	5.50	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ		99			
14	2.6	2.0	5.20	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ		107			
15	2.6	2.2	5.72	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ		100			
16	2.6	2.2	5.72	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ		120			
17	2.8	2.1	5.88	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ		100			
18	2.3	1.9	4.37	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ		118			
19	2.1	1.8	3.78	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ		115			
20	2.8	2.2	6.16	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ		115			
21	2.2	1.7	3.74	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ		124			
22	2.2	1.8	3.96	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ		130			
23	2.1	1.8	3.78	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ		128			
24	2.1	1.9	3.99	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ		112			
25	1.9	1.5	2.85	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ		95			
26	2.1	1.8	3.78	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ		94			
27	2.3	2.0	4.60	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ		110			
28	2.4	2.0	4.80	Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ		106			
29	2.2	2.0	4.40	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ		100			
30	2.3	2.1	4.83	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ		100			
31	2.2	2.0	4.40	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ		75			
32	2.1	1.8	3.78	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ		79			
33	2.2	1.9	4.18	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ		90			
34	2.3	1.8	4.14	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ		105			
35	2.1	1.8	3.78	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ		108			
36	2.2	1.7	3.74	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ		69			
37	2.3	2.0	4.60	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ		82			
38	2.3	2.1	4.83	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ		86			
39	2.3	1.8	4.14	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ		118			
40	2.2	2.1	4.62	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ		72			
41	2.2	2.1	4.62	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ		90			
42	2.1	1.9	3.99	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ		79			
43	2.2	1.8	3.96	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ		86			
44	2.2	1.9	4.18	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ		83			
45	2.3	2.0	4.60	Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ		114	1		
46	2.3	2.2	5.06	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ		117			
47	2.2	2.0	4.40	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ		78			
48	2.2	1.9	4.18	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ		100			
49	2.2	1.9	4.18	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ		134			
50	2.4	2.2	5.28	Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ		135	6		
51	2.2	2.2	4.84	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ		76			
52	2.2	2.2	4.84	Ⅰ・Ⅱ・Ⅵ		95			
53	2.4	2.0	4.80	Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ		87			
54	2.2	1.9	4.18	Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ		62			
55	2.5	2.2	5.50	Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ	−42	64			亀ノ倉遺跡
56	2.2	1.7	3.74	Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ		65			
57	2.3	1.7	3.91	Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ	−47	72			亀ノ倉遺跡
58	2.2	1.8	3.96	Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ	−43	56	1		亀ノ倉遺跡
59	2.5	2.4	6.00	Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ	−31	33	5		亀ノ倉遺跡
60	2.2	1.6	3.52	Ⅰ・Ⅵ		36			
61	2.3	2.3	5.29	Ⅰ・Ⅱ・Ⅵ		56			
62	2.2	2.1	4.62	Ⅰ・Ⅱ・Ⅵ		45			
63	2.2	2.0	4.40	Ⅰ・Ⅱ・Ⅵ	−39	46			亀ノ倉遺跡
64	2.2	2.1	4.62	Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ	−49	69			亀ノ倉遺跡
65	2.4	2.3	5.52	Ⅰ・Ⅱ・Ⅳb・Ⅵ	−29	52	4		亀ノ倉遺跡
66	2.2	2.2	4.84	Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ	−56	78	1		亀ノ倉遺跡
67	2.4	2.2	5.28	Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ	−37	63	2		亀ノ倉遺跡
68	2.2	2.2	4.84	Ⅰ・Ⅵ		42			
69	2.2	2.1	4.62	Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ		57			
70	2.3	1.9	4.37	Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ		67			
71	2.3	2.2	5.06	Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ		51			
72	3.2	2.3	7.36	Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ		200			
73	2.2	1.5	3.30	Ⅰ・Ⅵ		40			
74	2.1	2.1	4.41	Ⅰ・Ⅳ・Ⅵ		57			
75	2.0	1.9	3.80	Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ		62			
76	2.3	2.2	5.06	Ⅰ・Ⅳ・Ⅵ		53			
77	2.4	2.2	5.28	Ⅰ・Ⅳ・Ⅵ		62			
78	2.3	2.2	5.06	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ		107			
79	2.1	2.0	4.20	Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ		109	1		
80	2.3	2.1	4.83	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ		85			
81	2.3	2.1	4.83	Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ		81			
82	2.4	2.1	5.04	Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ		95			
83	1.9	1.4	2.66	Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ		120			
84	2.1	2.1	4.41	Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ		77			
85	2.1	2.0	4.20	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ		67			
86	2.1	2.0	4.20	壁崩落		—			
87	2.2	2.2	4.84	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ		110			
88	2.2	2.1	4.62	Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ		112			
89	2.5	2.3	5.75	Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ		118			
90	2.1	1.4	2.94	Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ		112			
91	2.3	2.2	5.06	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ		104			

第６表　本条地区試掘・確認調査　トレンチ一覧表



第33図　本条地区試掘・確認調査　基本層序柱状模式図（S=1/40）

63・68では表土直下の深度30cm前後から地山が検出されており、遺跡が掘削されている可能性がある。昭和50年代前半頃に耕地整理が実施され、浅い位置から遺物が出土したとの記録があり、遺跡は大きく失われている可能性もある。

3） 基本層序

今回の調査で検出された土層は概ね6層に分類される。調査区が数箇所に分かれ立地も多少異なるが、類似した土層をまとめ共通の基本層序とした。

第Ⅰ層は表土であり、水田・畑の耕作土および盛土も含む。第Ⅱ層は黄灰色～灰色粘土であり、水田床土となる。厚い堆積となる地点もあり、水田造成に伴う盛土となる場合もある。第Ⅰ層と第Ⅱ層は分層困難な地点もあった。第Ⅲ層は灰色粘土～灰色砂である。腐植物をあまり含まない沖積層を一括した。河川に近い今熊地区ではシルトや砂の層が幾重にも堆積していた。第Ⅳ層は暗灰色粘土であり、炭化物や腐植物をやや多く含み暗色となる。亀ノ倉遺跡の範囲内では、古代の遺物が少量出土する。第Ⅴ層は黒色腐植土であり、第Ⅳ層の下位となる深い深度から検出されている。腐植物が主体であり、粘性・締りは弱い。第Ⅵ層は黄色～青灰色粘土である。浅い位置では酸化色となる。粘性・締りは強く炭化物等を含まない。調査区周辺の沖積地に堆積する地山土と判断される。本層上部で遺構確認を実施している。

4）出土遺物

試掘･確認調査で出土した遺物は、約20点と少ない。亀ノ倉遺跡（Ｂ地点）内からの出土が大半であり、平安時代の遺物に限定される。TP-59では須恵器2点、土師器5点の遺物が出土した。出土遺物は全て小片であり、図化可能な遺物は皆無なため、写真のみを掲載した（図版29-r）。

3　調査のまとめ

今回の試掘・確認調査は、亀ノ倉遺跡の範囲や詳細、未周知遺跡の有無などを確認することであった。亀ノ倉遺跡はA･Bの2地点が周知化されている。A地点は平成20（2008）年度に実施した本発掘調査から、古墳時代前期を主体とする集落であると考えられる［柏崎市教委2011］。一方、B地点については今回の調査によりある程度実態を明らかにすることができた。調査結果から、平安時代を主体とする遺跡であることが分かったが、同時に過去の工事により遺存状態は不良となっていることが確認された。A地点とB地点の間には河川跡が発見され、遺跡の広がりはみられなかった。また、隣接する馬場・天神腰遺跡とは古くから追田川の氾濫原により分断されていたと考えられる。このため、亀ノ倉遺跡B地点は南側に所在した河川と北側の湿地に挟まれた狭い範囲内に営まれた集落であったと推定される。出土遺物の時期からほぼ平安時代に限定される。

未周知遺跡については全工区において発見することはできなかった。今熊工区は鯖石川の十日市工区は長鳥川の氾濫原であることが確認された。東条工区についても遺跡の痕跡は確認できなかった。愛宕沖工区は亀ノ倉遺跡B地点の周囲以外は河川跡や低湿地であることが確認された。鯖石川、長鳥川流域の沖積地は水田が営まれているが、地下の旧地形や古環境を知ることができた。今後も大規模な試掘・確認調査の実施が見込まれ、各地域の生活史が明らかとなっていくことが期待される。

Ⅷ　上条城跡隣接地（第2次）

－ 市道柏崎14-12号線道路改良舗装工事に伴う試掘調査 －

1　調査に至る経緯

上条城跡は鵜川中流域の大字黒滝字城地内に所在する。室町時代に関東管領や越後守護を務めた上杉氏の一族である上条上杉氏の居城で、標高約15m、周囲の水田との比高差は5m前後の丘陵上に構築された。城の範囲は東西250m、南北140mに及び、実城、二ノ曲輪等が堀に囲まれ、その外に外曲輪や家臣の屋敷地が設けられた。城の東側を流れる鵜川支流の浦の川も外堀の役目を担っている。

平成20（2008）年と平成21（2009）年には上条地区コミュニティ振興協議会が主体の「上条城夏の陣」と銘打った調査が行われた。この調査は畑の礫などを集積したマウンドを発掘するもので、このマウンドから多くの土器や陶磁器が出土した。その多くは14世紀代から16世紀後葉までの中世のものであった[伊藤2010]。

今回の試掘調査は市道改良工事に伴う第2次試掘調査であり、道路法線の西側半分を対象とした。ここは周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが、浦の川を挟んで上条城に隣接しているため何らかの遺構が及んでいないかを確認することとした。

文化財保護法第99条第1項の規定による新潟県教育長への埋蔵文化財発掘調査の報告は、平成30（2018）年11月14日付け博第606号で行った。

2　調査の概要

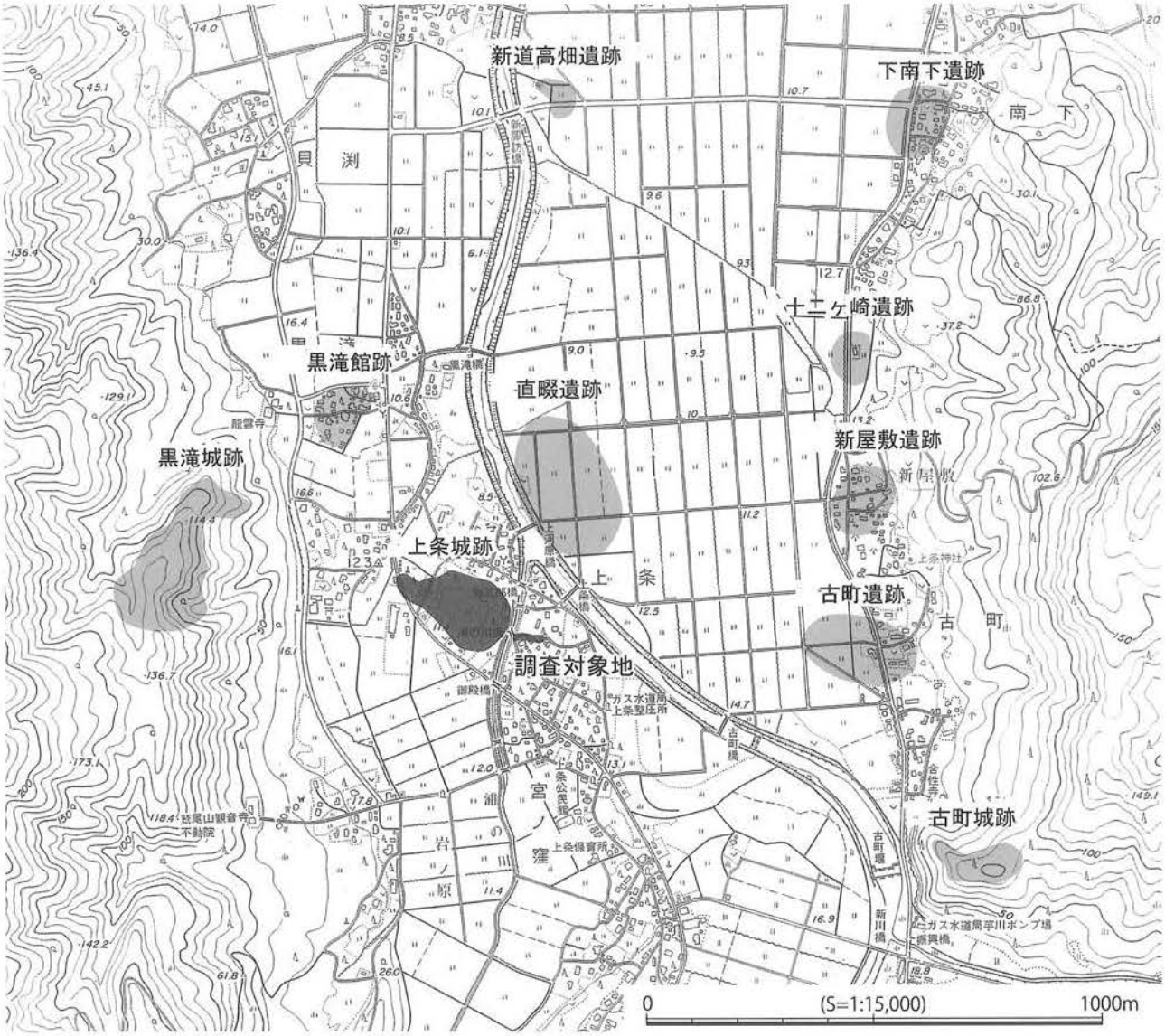
1）　調査の目的と方法

試掘調査の主な目的は、上条城跡に関係する遺構群や遺物の有無を確認することである。また、他の時代の集落が営まれていた可能性もあり、工事前に時代を問わず遺跡の有無を確認することが必要であった。調査対象範囲は事業区域のうち第1次調査時に用地買収が未了だった範囲、延長約70mで面積は約580㎡である。

試掘坑は法線内に任意に設定し、0.15㎥級のバックホーで掘削した。基底部までバックホーで掘り下げた後に、人力で土層観察のために壁面を精査し、遺構面の清掃を行った。記録図面の作成と写真撮影は調査担当が行った。調査終了後は掘削土により埋め戻しを行った。調査したトレンチは4か所、調査面積は合計8.82㎡であり、調査対象地に占める割合は1.5％である。

2）　基本土層

調査で確認した土層は大きく6層に分けた。Ⅰ層は表土層で、腐植物が多く混じる暗褐色土である。Ⅱ層は、角ばった礫やブロック状の粘質土が多く含まれるもので、客土層と捉えた。Ⅲ層は自然堆積層で褐色土を基本に炭化物や円礫が混じっている。Ⅳ層はやや粘質の暗褐色土で、炭化物が少量混じる。遺物包含層に相当するとみられる。Ⅴ層とⅥ層を地山層とした。Ⅴ層は灰色砂からなり、下位に円礫が多く混じっ



第34図　上条城跡隣接地（第２次）試掘調査　調査位置図（S=1:15,000）

ており、川床の様相を呈する。Ⅵ層は灰白色砂層で、橙色砂がまだらに混じる。確認した範囲では礫の混入は認められなかった。

3）トレンチの概要

ＴＰ１　調査対象地の東端の、杉が林立した畑地に設定した。長さ1.9ｍ、幅1.3ｍのトレンチである。表土の下に客土であるⅡ層が厚く盛られ、その下のⅢ層には拳大の円礫が多く混じる。トレンチの西側半分にはⅢ層まで到達する攪乱がある。地山はⅥ層で、遺構はない。遺物は出土しなかった。

ＴＰ２　ＴＰ１と同じ畑地に設定した。長さ1.7ｍ、幅1.2ｍのトレンチである。土層の堆積はＴＰ１とほとんど同じである。遺構、遺物ともに出土しなかった。

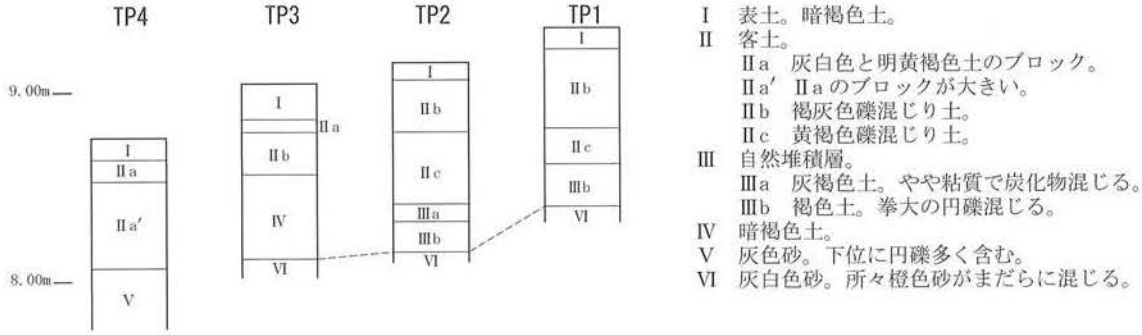
ＴＰ３　果樹が生えていた畑地である。長さ2.2ｍ、幅1.1ｍのトレンチを設定した。これまでに比べて客土の堆積は薄い。その下位に遺物包含層に相当すると考えられるⅣ層が堆積する。やや粘質がある土で、炭化物が少し混じっている。トレンチの東半分はⅡ層からの攪乱がⅣ層の大部分まで及んでいる。地山はこれまでと同様のⅥ層である。遺構、遺物ともに出土しなかった。

ＴＰ４　調査対象地でトレンチが設定できた最も西側である。ここまでは調査地隣の道路と地表の高さはほぼ同じであったが、ここは40～50cmほど低い畑地である。長さ2.1ｍ、幅0.9ｍのトレンチで調査した。表土の下に客土のⅡ層が厚く堆積し、その下位で灰白色砂となった。さらに掘り下げたところ、土質はほとんど変化せず、大小の円礫が多く混じるようになった。旧河川の底と判断した。遺物は出土しなかった。

３　まとめ

今回の試掘調査で当事業に伴う試掘調査は完了した。結果として当事業の法線内では遺構は検出されず、遺物は第１次調査で少量出土しただけであり、遺跡は存在しないと判断した。円礫や砂層が堆積する今回の調査地は旧河道や湿地帯であったと考える。遺跡範囲とはならなかったが、上条城周辺の一部で過去の様相を明らかにすることができた。

第35図　上条城跡隣接地（第２次）試掘調査　トレンチ位置図（S=1:1,000）



第36図　上条城跡隣接地（第２次）試掘調査　土層柱状模式図（S=1:40）

Ⅸ　馬場・天神腰遺跡（第4次）

－ 県道改良工事に係る第4次確認調査 －

1　調査に至る経緯

馬場・天神腰遺跡は柏崎市街地から南東へ約8kmの距離となる南条地区に位置する。地形的には鯖石川中流域右岸の河岸段丘上に立地している。北側には長鳥川が西進し北東約500ｍの位置で鯖石川に合流する。段丘西側に位置する現下南条集落の標高は20ｍ前後であり、やや標高の低い東側は水田となっている。当遺跡は中世では鯖石川流域に成立した佐橋荘に属しており、鎌倉時代に地頭職を有していた越後毛利氏に関わりが深いと考えられ、戦国時代に中国地方で勢力を伸ばす安芸毛利氏の祖とされている。越後毛利氏は南条にあった本拠地を北条に移し北条氏を称するようになる。当該地北側の丘陵には北条氏の要害である北条城が所在する。その南東側の丘陵裾に広がる集落には現在も寺院が多く、中世末の景観を残している。当遺跡は、平成3・4年に市道改良工事に伴う当遺跡の発掘調査が実施されている。13～14世紀を主体時期とするが、12～16世紀の間に集落が続いていることが調査で明らかとなっている。側溝を備えた道路や方形区画溝が伴う館跡も発見されていること、手工業を示す木製品の未成品も出土していることから、一般集落とは異なる都市的な性格が推測される［品田1993］。

今回の確認調査は県道改良工事に伴うもので、確認調査としては第4次となる。平成26（2014）年度に事業主体者との当該工事に係る協議を行っている。事前に拡幅部分を対象とした確認調査を実施し、遺跡の広がり等を把握する必要があると判断された。その後、平成29（2017）年度に北側隣接部で第3次確認調査が実施されている。結果としては遺構・遺物は発見されず、遺跡の密度が希薄な範囲と判断されるものであった。

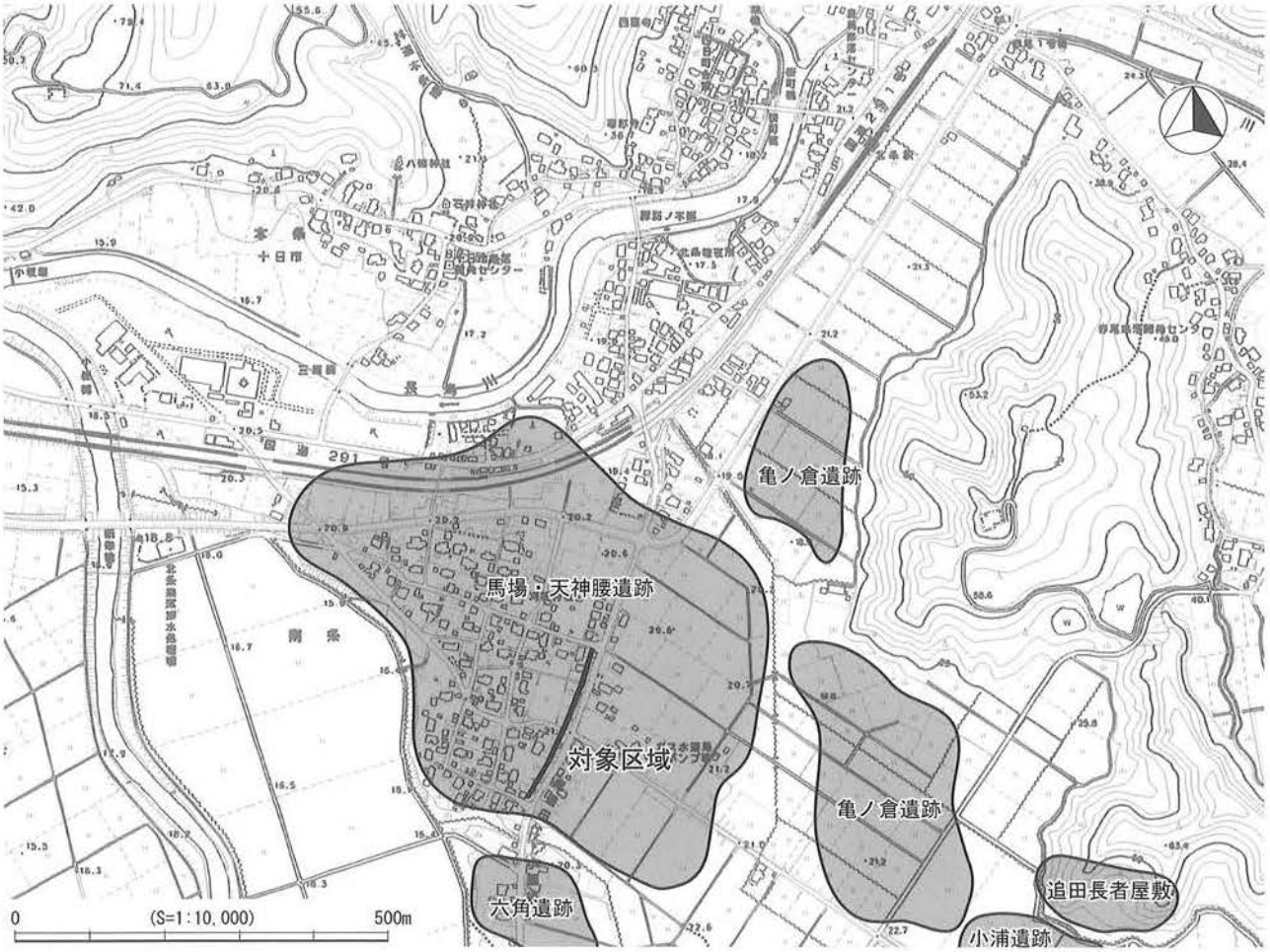
第4次確認調査は、平成30（2018）年度末に用地買収が進んでいたため実施することとなった。調査にあたっては、平成31（2019）年2月28日付け博第657号で文化財保護法第99条に基づく発掘調査の報告を提出し、3月4日に確認調査を実施した。終了報告は3月12日付け博第662号で県教育委員会に提出した。

2　調査の概要

1）　調査の目的と方法

確認調査の目的は、道路拡幅部分における遺跡の広がりなどを確認することである。標高は21ｍ前後となる。調査対象範囲は、道路拡幅範囲で新規掘削工事が生じる範囲であり、概ね歩道部分に相当する。宅地化された部分が多く、道路拡幅幅も3ｍ未満と狭いことから調査可能な範囲はかなり限定された。

試掘トレンチの発掘は小型バックホー（0.06㎡級）を使用し、対象範囲内の任意の位置3ヶ所に設定した。調査対象区の面積は約158㎡である。発掘した3つのトレンチの合計面積は約4.5㎡であり、調査対象面積に対する発掘面積の比率（発掘率）は約2.8%となる。



第37図　馬場・天神腰遺跡（第４次）確認調査　対象区位置図（S=1:10,000）

２）　調査の経過と試掘坑の概要

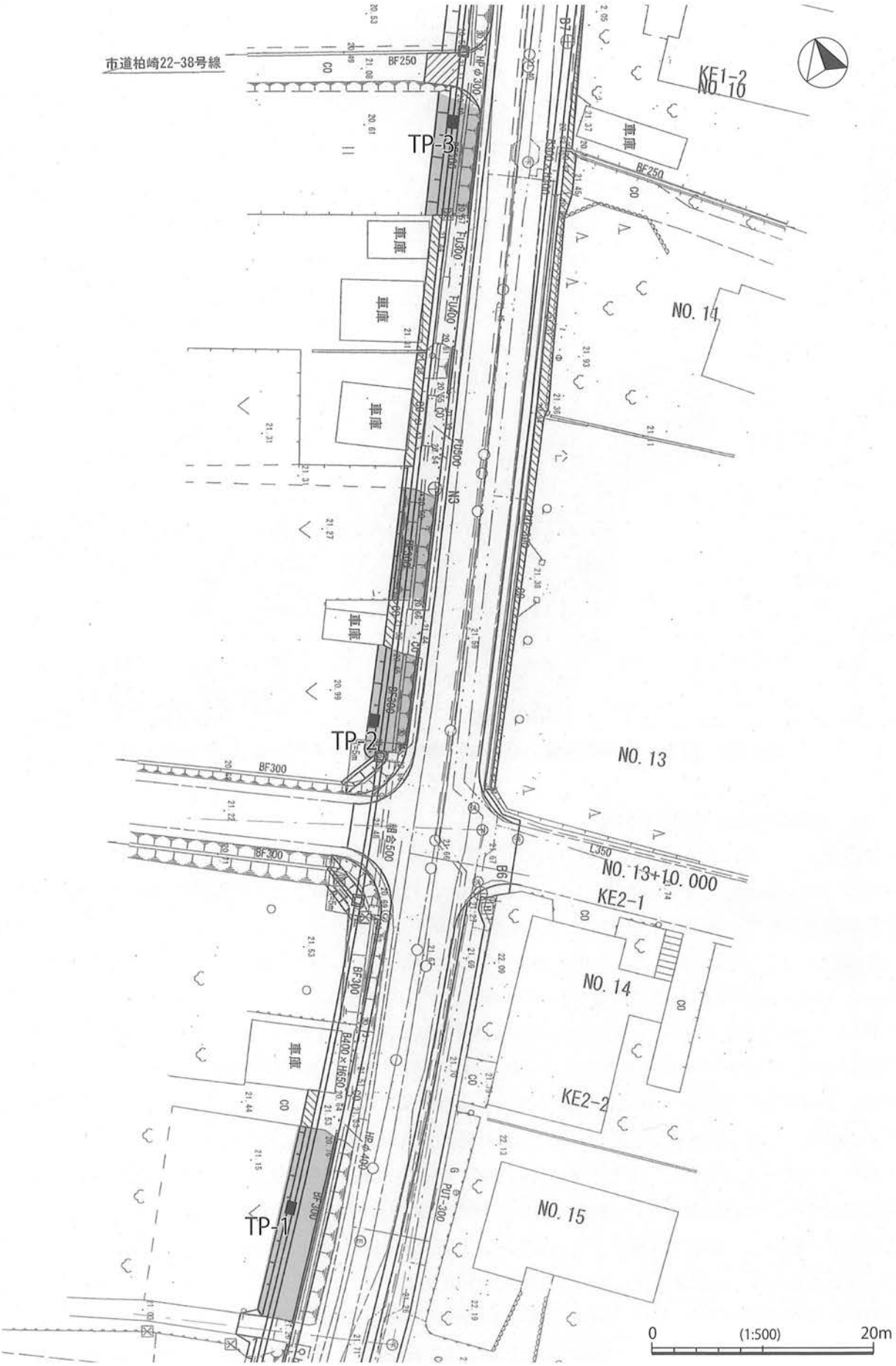
試掘調査は、平成31（2019）年３月４日の１日間で実施した。調査員は担当職員を含む４名となる。

天候は雨であった。調査対象範囲は、延長約49ｍ、幅約２～３ｍとなる西側拡幅部分である。ただし、宅地の乗り入れ等は発掘が不可能であり、発掘可能な田畑部分は４ヶ所に分断される。４ヶ所それぞれの延長は10～17ｍ程度であった。水田は概ね本来の地形と想定され、畑は盛土により造成されていた。発掘可能な範囲部分に計３ヶ所の試掘トレンチを設定した（TP-1～3）。

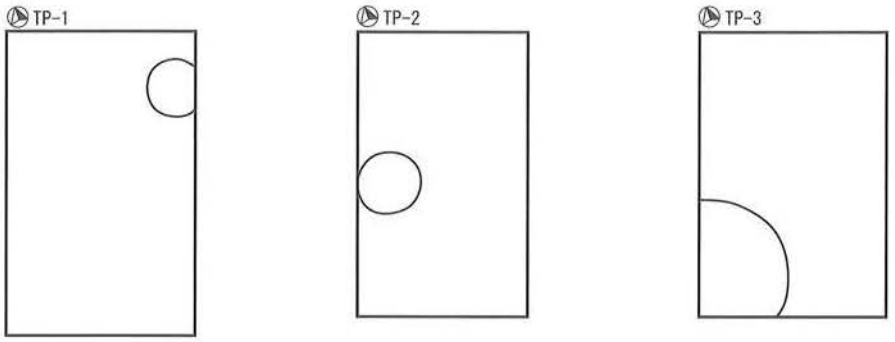
TP-1　南側に設定した。トレンチの大きさは、幅約1.0ｍ、長さ約1.5ｍとなる。現表土は畑耕作土であり、深度約40㎝で灰色粘土が検出された。炭化物を含み粘性が強い。分層は困難であったが、上部は水田に係る土層の可能性がある。深度約70cmで青灰色粘土が検出された。炭化物等を含まず、当該地の地山と判断された。本層で遺構確認を行いピット１基が発見された。遺物は発見されなかった。

TP-2　中央部に設定した。トレンチの大きさは、幅約0.9ｍ、長さ約1.5ｍとなる。現況は畑であり、土層堆積はTP-1と酷似していた。深度約40cmで灰色粘土が検出された。下部は砂利の混入が認められた。青磁１点が出土し、遺物包含層ととらえられる。深度約65cmで地山（青灰色粘土）が検出された。ピット１基が発見された。なお、廃土から須恵器１点が出土した。

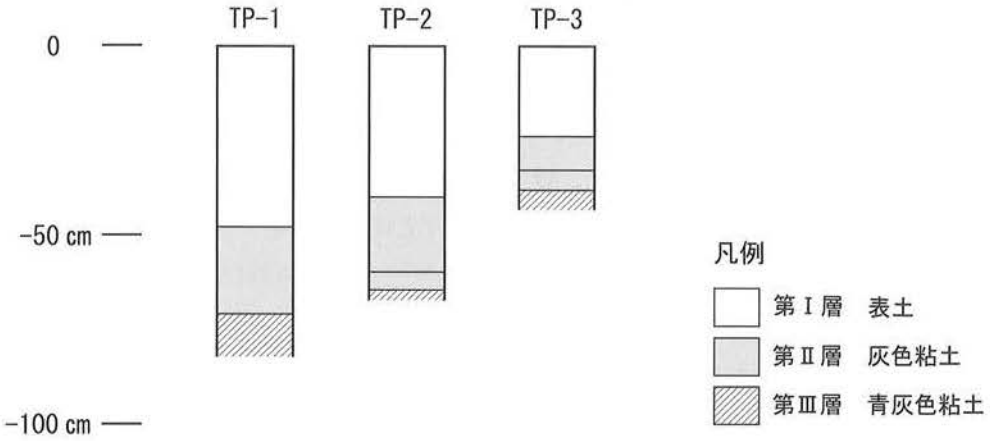
TP-3　北側に設定した。トレンチの大きさは、幅約1.0ｍ、長さ約1.6ｍである。現況は水田であり、表土以下約25cmで灰色粘土が、深度約40cmで地山（青灰色粘土）が検出された。堆積状況はTP-2と酷似



第38図　馬場・天神腰遺跡（第４次）確認調査　トレンチ配置図（S=1:500）



第39図　馬場・天神腰遺跡（第４次）確認調査　検出遺構見取図（S=1/40）



第40図　馬場・天神腰遺跡（第４次）確認調査　基本層序柱状模式図（S=1:20）

するものであった。直径60cm以上の土坑1基が検出されている。遺物の出土は見られなかった。

3）　基本層序

確認調査で検出された土層は概ね3層に分類される。

第Ⅰ層は耕作土･現表土である。第Ⅱ層は灰色粘土であり、炭化物を多く含む。分層は困難であったが、上部は水田に係る層の可能性があり、下部は締りがあり砂利の混入が認められた。本層内から古代・中世の遺物が発見されている。第Ⅲ層は青灰色粘土である。粘性・締りが強く炭化物等の混入がみられず、地山と判断される。本層の上面で遺構確認を実施している。

3　調査のまとめ

今回の調査対象区は遺跡推定範囲の中央付近に位置するものである。確認調査の結果としては、調査範囲内から古代・中世の遺物と遺構が発見され、遺跡の存在が明確に確認することができた。調査対象区は現在の下南条集落の東端に位置するものであるが、古くから居住域であったと推定される。調査面積は僅かであったが、全トレンチから遺構が検出されており、遺跡の中心部付近であった可能性もある。一方、平成29（2017）年度に実施した北側隣接地の確認調査では遺跡の痕跡は認められなかった。このことから、遺跡推定範囲内でも遺構の粗密があると考えられる。今後も、小規模な調査を継続し、遺跡の実態を明らかにすることが重要である。

X　総括

第29期となった令和元（2019）年度の柏崎市内遺跡発掘調査事業では、当該年度の試掘調査・確認調査の現場業務のほかに、平成30（2018）年度に実施した9件の調査について整理業務を継続し、報告書として本書を作成した。本報告書に掲載した計8件の調査の内訳は、試掘調査5件、確認調査3件である。西岩野遺跡第7次確認調査は別書に掲載予定である。

試掘調査では、藤元町地点（第Ⅱ章）で藤元町西遺跡の1遺跡が新発見された。畔屋地区（第Ⅵ章）では本村遺跡・南入遺跡・北入遺跡の3遺跡が新発見された。一方、城東地点（第Ⅳ章）、曽地新田地点（第Ⅴ章）、上条城跡隣接地第2次（第Ⅷ章）では、遺物・遺構ともに発見されなかった。

確認調査では、西岩野遺跡第6次（第Ⅲ章）、本条地区（第Ⅶ章）の亀ノ倉遺跡、馬場・天神腰遺跡第4次で遺物・遺構が検出されている。とくに西岩野遺跡第6次では、弥生時代後期の遺物や大型の溝、住居の可能性のある遺構などが発見されており、今後の発掘調査成果が期待される。

以上の成果は、各調査は限られた範囲で実施されたものであるが、記録資料の蓄積は柏崎市の歴史を理解するための足掛かりとなるものである。埋蔵文化財保護行政の基本ともいえる、試掘調査・確認調査等で得られる成果は、埋蔵文化財の保護に欠かせないものである。本事業が果たす役割は大きいといえよう。

≪　引用・参考文献　≫

伊藤啓雄　2010「焼き物で綴る上条城の歴史」『上条上杉氏と上条城』　上条コミュニティーセンター

柏崎市教育委員会　1987『西岩野』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第7）

柏崎市教育委員会　2011『柏崎市の遺跡ＸＸ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第65集）

柏崎市教育委員会　2016『柏崎市の遺跡25』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第83集）

柏崎市教育委員会　2016『柏崎市の遺跡26』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第84集）

柏崎市教育委員会　2018『柏崎市の遺跡28』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第93集）

柏崎市教育委員会　2019a『布目・前谷地』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第94集）

柏崎市教育委員会　2019b『西岩野２』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第95集）

柏崎平野団体研究グループ　1979「柏崎平野の第四系」『柏崎市史資料編』　地質篇柏崎の地質
柏崎市史編さん委員会編

小林巌雄・飯川健勝・久保田喜裕・神蔵勝明・渡辺秀男・渡辺文雄　2008「中越地方西部の地形と地質」
地学団体研究会新潟支部中越沖地震調査団体編『柏崎・刈羽をおそった地震の被害と
基盤 - 2007年新潟県中越沖地震 - 』(地団研専報57号)地学団体研究会

品田高志　1993「馬場・天神腰遺跡の中世集落について」『新潟県考古学会第5回大会研究発表要旨』　新潟県考古学会

Ⅱ　藤元町地点（第２次）　１

a．調査区近景　（南西から）

b．調査区近景　（北東から）

c．ＴＰ１完掘　（南西から）

d．ＴＰ１完掘　（北東から）

e．ＴＰ１土層堆積　（南東から）

f．ＴＰ１土坑断面　（北西から）

g．ＴＰ２完掘　（南西から）

h．ＴＰ２完掘　（北東から）

図版２

Ⅱ　藤元町地点（第２次）　２

Ⅲ　西岩野遺跡（第６次）　１

a．ＴＰ１完掘全景　（南から）

b．ＴＰ１完掘全景　（北から）

c．ＴＰ１ＳＤ１立ち上がり　（南西から）

d．ＴＰ１上部掘り込み遺構土層　（北西から）

e．ＴＰ１ＳＤ１立ち上がり土層　（西から）

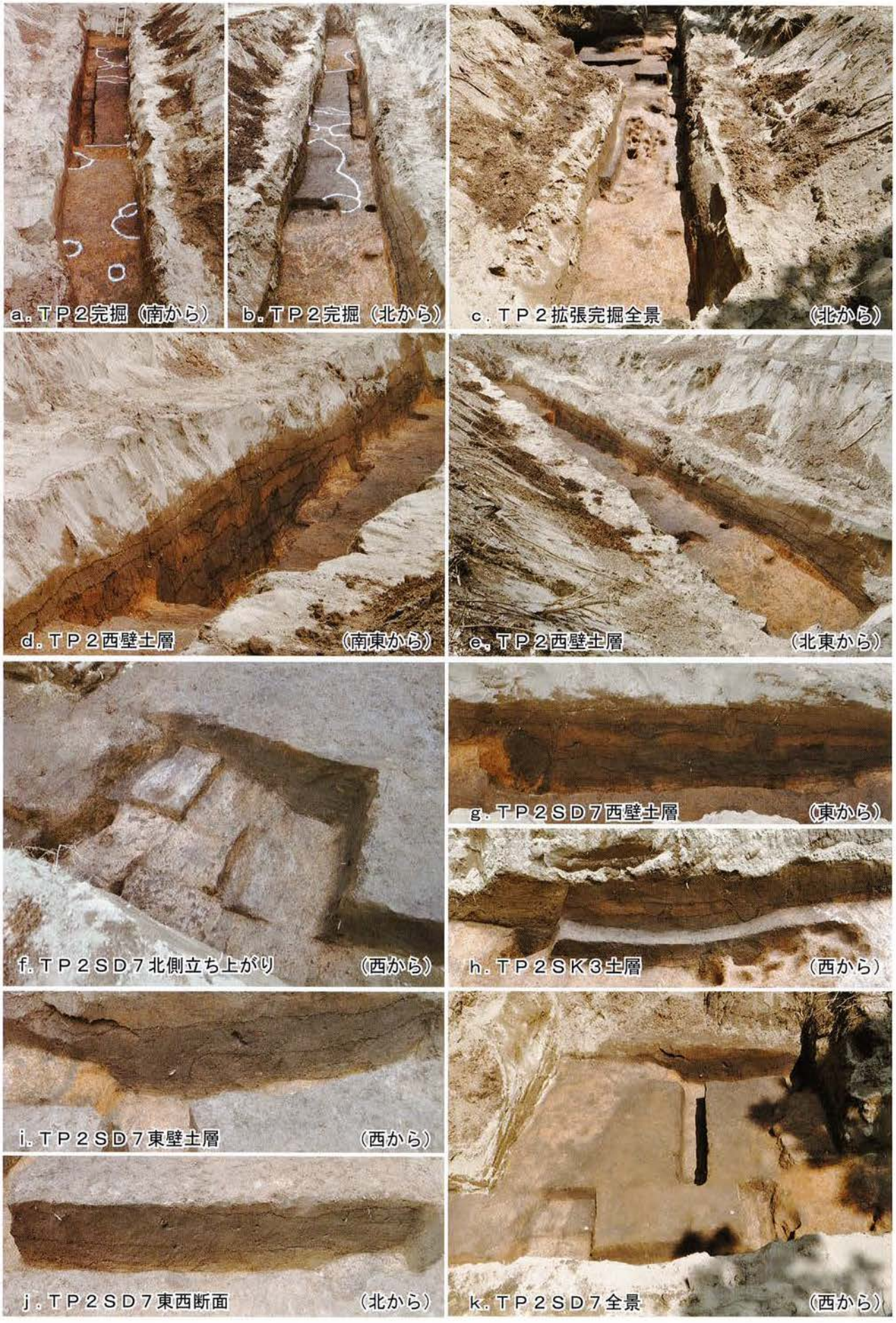
f．ＴＰ１ＳＤ１中央部土層　（西から）

g．ＴＰ１ＳＤ１南端部土層　（西から）

h．ＴＰ１ＳＤ１南端部落込み　（南東から）

図版４

Ⅲ　西岩野遺跡（第６次）　２



Ⅲ　西岩野遺跡（第６次）　３

a．ＴＰ３完掘　（南から）

b．ＴＰ３完掘　（北から）

c．ＴＰ３ＳＤ１立ち上がり土層　（東から）

d．ＴＰ３西壁土層　（南東から）

e．ＴＰ４遺構検出　（南から）

f．ＴＰ４遺構検出　（北から）

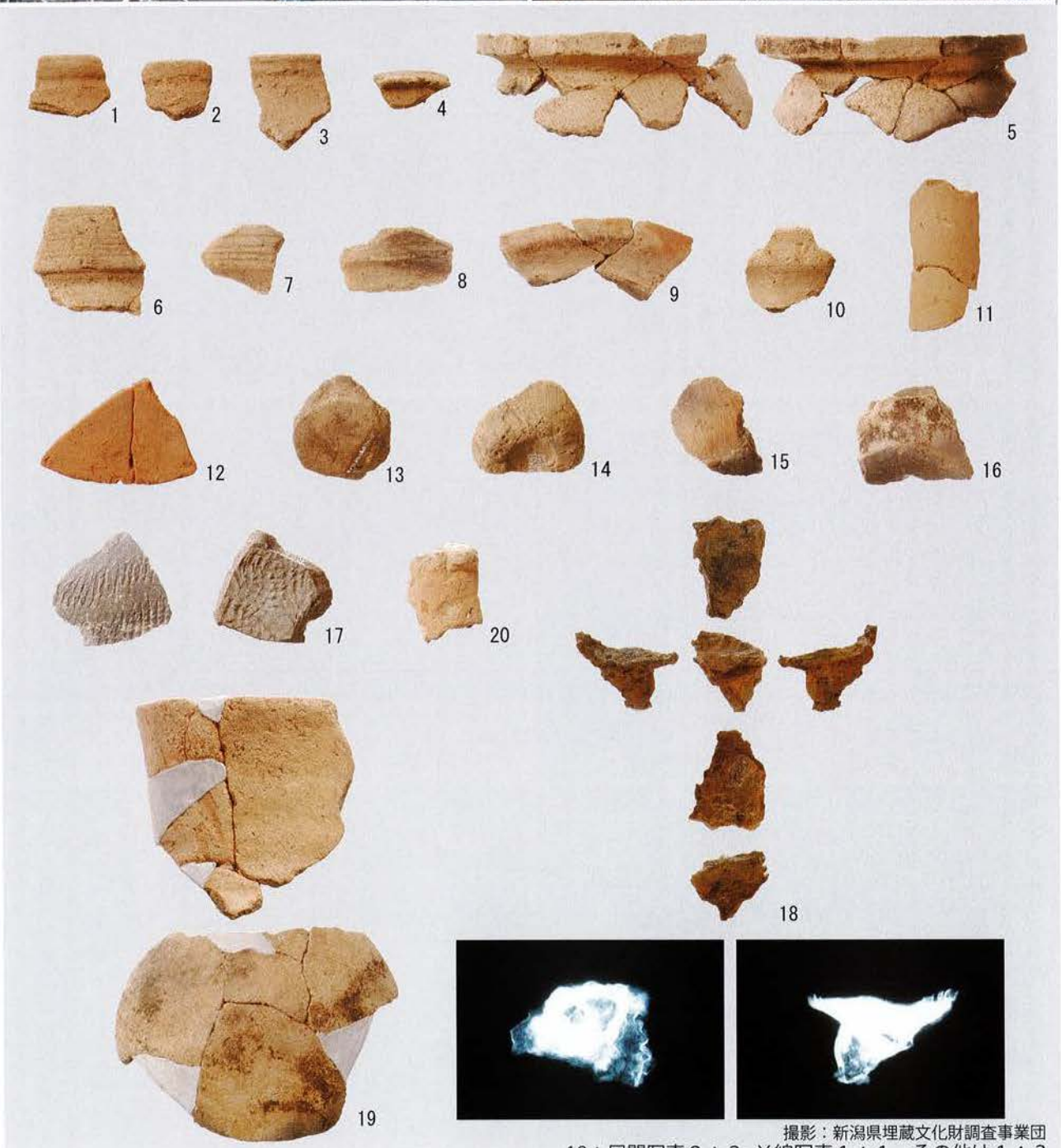
g．ＴＰ４遺構完掘　（南から）

h．ＴＰ４遺構完掘　（北から）

図版６

Ⅲ　西岩野遺跡（第６次）　４

Ⅲ　西岩野遺跡（第６次）　５



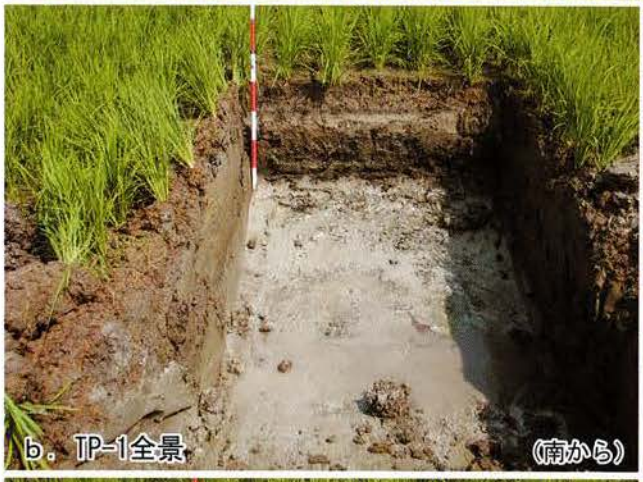
撮影：新潟県埋蔵文化財調査事業団

18：展開写真２：３、Ｘ線写真１：１、その他は１：３

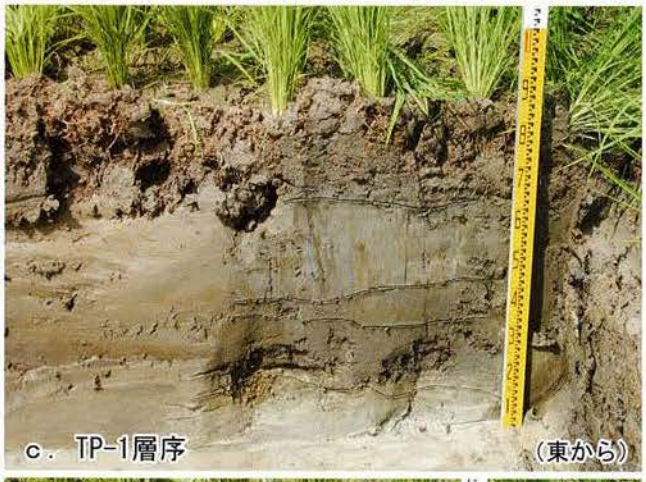
図版８

Ⅳ　城東地点　１

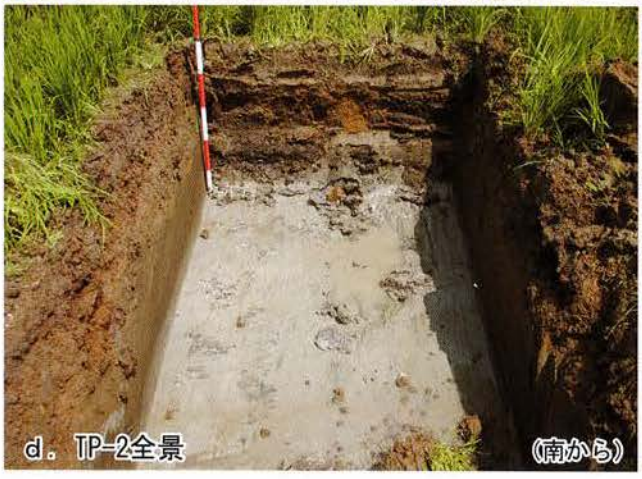
ａ．調査区近景　（北から）



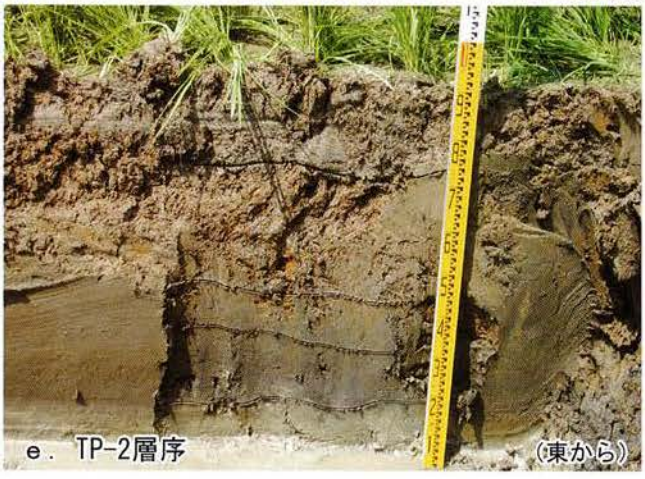
ｂ．TP-1全景　（南から）



ｃ．TP-1層序　（東から）



ｄ．TP-2全景　（南から）



ｅ．TP-2層序　（東から）

Ⅳ　城東地点　２

a. TP-3 全景　（南から）

b. TP-3 層序　（東から）

c. TP-4 全景　（北から）

d. TP-4 層序　（西から）

e. TP-5 全景　（南から）

f. TP-5 層序　（西から）

g. TP-6 全景　（南から）

h. TP-6 層序　（西から）

図版10

Ⅴ　曽地新田地区

a．調査区近景　（北から）

b．調査区近景　（南から）

c．ＴＰ１完掘　（南から）

d．ＴＰ１土層堆積　（東から）

e．ＴＰ２完掘　（北東から）

f．ＴＰ２土層堆積　（北西から）

g．ＴＰ３完掘　（北西から）

h．ＴＰ３土層堆積　（北東から）

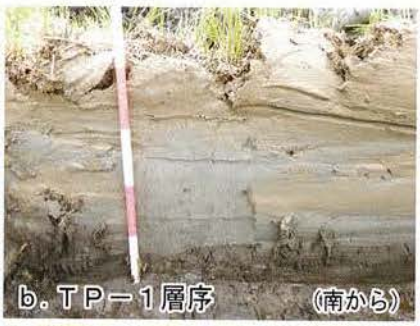
Ⅵ　畔屋地区　1

a．調査区近景　北入工区　（西から）

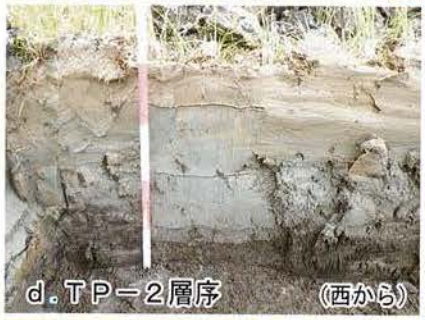
b．調査区近景　出口工区　（西から）

Ⅵ　畔屋地区　2

a．ＴＰ－１全景　（東から）


b．ＴＰ－１層序　（南から）

c．ＴＰ－２全景　（南から）


d．ＴＰ－２層序　（西から）

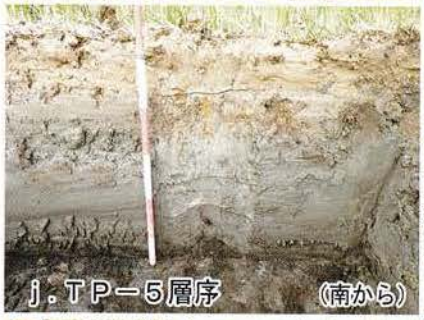
e．ＴＰ－３全景　（南から）

f．ＴＰ－３層序　（西から）

g．ＴＰ－４全景　（東から）

h．ＴＰ－４層序　（南から）

i．ＴＰ－５全景　（西から）


j．ＴＰ－５層序　（南から）

k．ＴＰ－６全景　（東から）

l．ＴＰ－６層序　（南から）

m．ＴＰ－７全景　（北から）

n．ＴＰ－７層序　（西から）

o．ＴＰ－８全景　（南から）

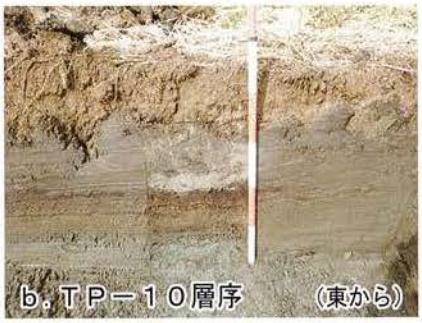
p．ＴＰ－８層序　（北から）

q．ＴＰ－９全景　（南から）

r．ＴＰ－９層序　（西から）

Ⅵ　畔屋地区　3

a．ＴＰ－１０全景　（南から）


b．ＴＰ－１０層序　（東から）

c．ＴＰ－１１全景　（南から）

d．ＴＰ－１１層序　（東から）

e．ＴＰ－１２全景　（南から）

f．ＴＰ－１２層序　（西から）

g．ＴＰ－１３全景　（南から）

h．ＴＰ－１４全景　（南から）

i．ＴＰ－１４層序　（西から）

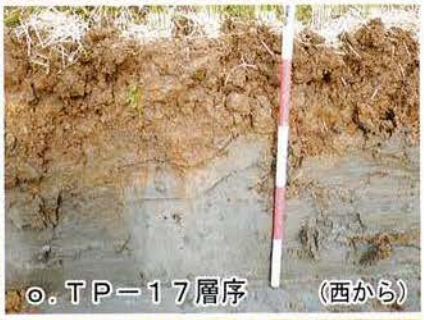
j．ＴＰ－１５全景　（南から）

k．ＴＰ－１５層序　（西から）

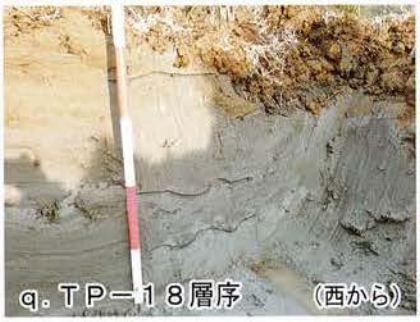
l．ＴＰ－１６全景　（南から）

m．ＴＰ－１６層序　（南から）

n．ＴＰ－１７全景　（南から）


o．ＴＰ－１７層序　（西から）

p．ＴＰ－１８全景　（南から）


q．ＴＰ－１８層序　（西から）

r．ＴＰ－１９全景　（北西から）

図版14

Ⅵ　畔屋地区　4

a．ＴＰ－１９層序　（北東から）

b．ＴＰ－２０全景　（北西から）

c．ＴＰ－２０層序　（北東から）

d．ＴＰ－２１全景　（南東から）

e．ＴＰ－２１層序　（南西から）

f．ＴＰ－２１土器検出状況　（南から）

g．ＴＰ－２１流木検出状況　（南西から）

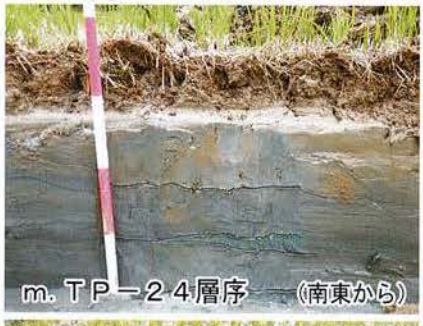
h．ＴＰ－２２全景　（北西から）

i．ＴＰ－２２層序　（南西から）

j．ＴＰ－２３全景　（南東から）

k．ＴＰ－２３層序　（南西から）

l．ＴＰ－２４全景　（北西から）


m．ＴＰ－２４層序　（南東から）

n．ＴＰ－２５全景　（南東から）

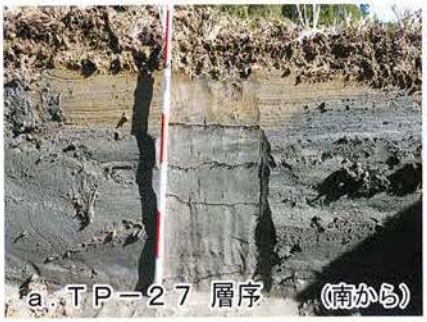
o．ＴＰ－２５層序　（南西から）

p．ＴＰ－２６全景　（北西から）

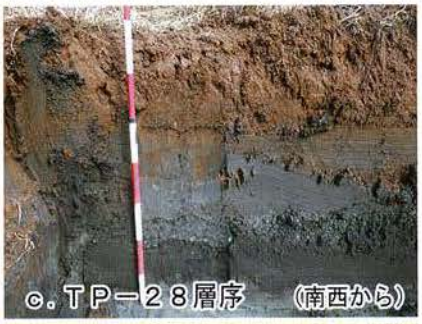
q．ＴＰ－２６層序　（南西から）

r．ＴＰ－２７全景　（北西から）

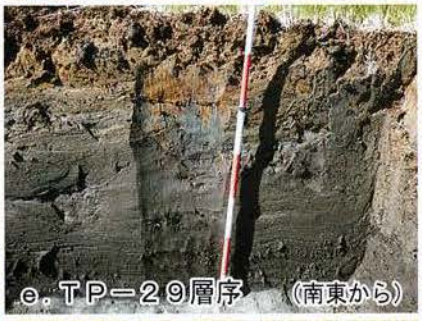
Ⅵ　畔屋地区　5


a．ＴＰ－２７ 層序　（南から）

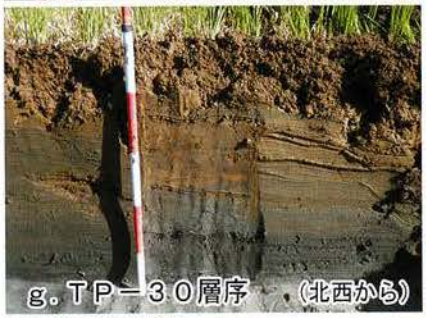
b．ＴＰ－２８全景　（南東から）


c．ＴＰ－２８層序　（南西から）

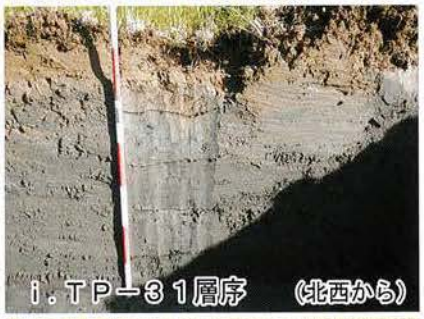
d．ＴＰ－２９全景　（南西から）


e．ＴＰ－２９層序　（南東から）

f．ＴＰ－３０全景　（南西から）


g．ＴＰ－３０層序　（北西から）

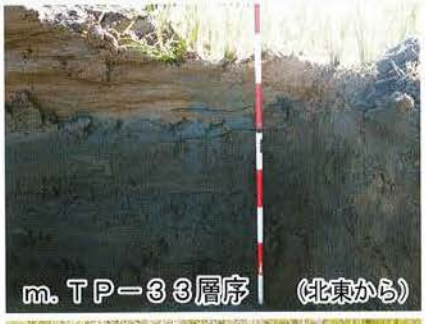
h．ＴＰ－３１全景　（南西から）


i．ＴＰ－３１層序　（北西から）

j．ＴＰ－３２全景　（南西から）

k．ＴＰ－３２層序　（南東から）

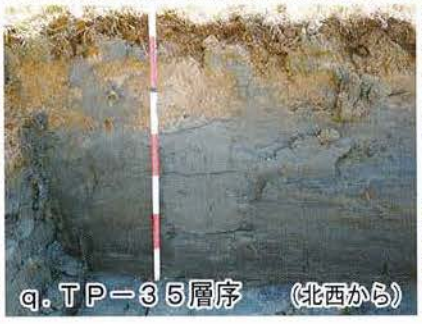
l．ＴＰ－３３全景　（北東から）


m．ＴＰ－３３層序　（北東から）

n．ＴＰ－３４全景　（南西から）

o．ＴＰ－３４層序　（北西から）

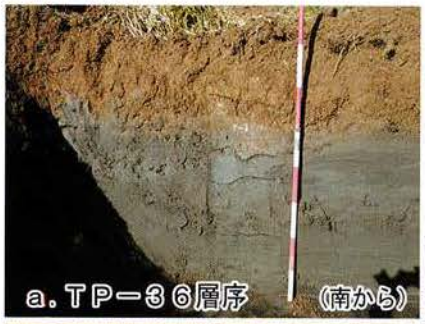
p．ＴＰ－３５全景　（南西から）


q．ＴＰ－３５層序　（北西から）

r．ＴＰ－３６全景　（南から）

図版16

Ⅵ　畔屋地区　6


a.ＴＰ－３６層序　(南から)

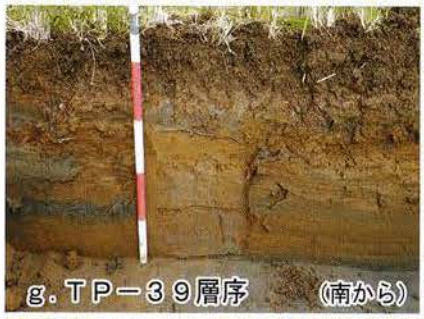
b.ＴＰ－３７全景　(西から)

c.ＴＰ－３７層序　(北から)

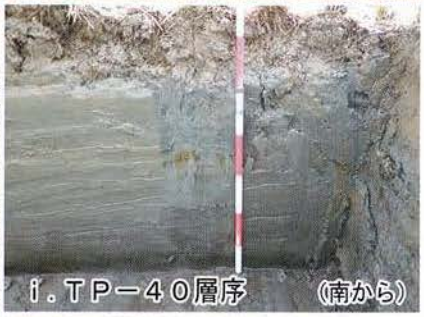
d.ＴＰ－３８全景　(西から)

e.ＴＰ－３８層序　(南から)

f.ＴＰ－３９全景　(東から)


g.ＴＰ－３９層序　(南から)

h.ＴＰ－４０全景　(東から)


i.ＴＰ－４０層序　(南から)

j.ＴＰ－４１全景　(西から)

k.ＴＰ－４１層序　(南から)

l.ＴＰ－４２全景　(南から)

m.ＴＰ－４２層序　(西から)

n.ＴＰ－４３全景　(北東から)

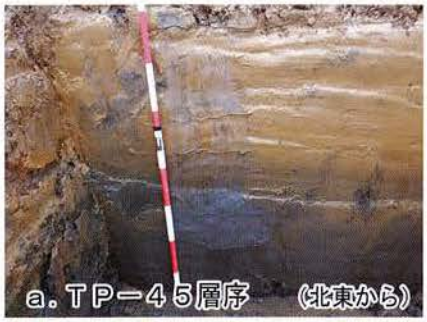
o.ＴＰ－４３層序　(南東から)

p.ＴＰ－４４全景　(北から)

q.ＴＰ－４４層序　(西から)

r.ＴＰ－４５全景　(北西から)

Ⅵ　畔屋地区　7


a.ＴＰ－４５層序　（北東から）

b.ＴＰ－４６全景　（北から）

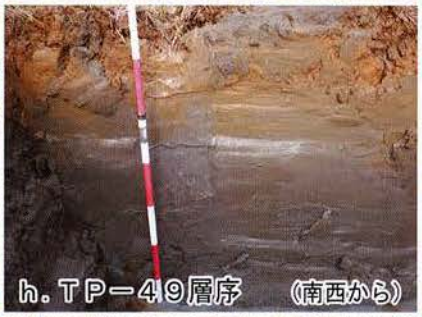
c.ＴＰ－４７全景　（南西から）

d.ＴＰ－４７層序　（南東から）

e.ＴＰ－４８全景　（南東から）

f.ＴＰ－４８層序　（南西から）

g.ＴＰ－４９全景　（南東から）

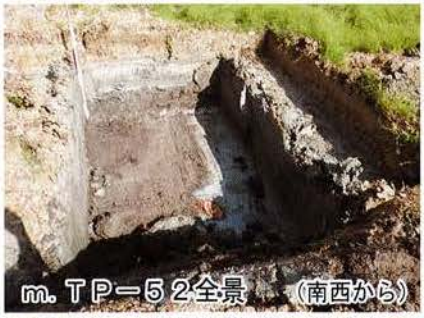

h.ＴＰ－４９層序　（南西から）

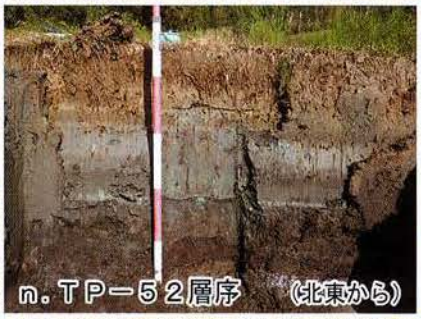
i.ＴＰ－５０全景　（北東から）

j.ＴＰ－５０層序　（南東から）

k.ＴＰ－５１全景　（南西から）

l.ＴＰ－５１層序　（西から）


m.ＴＰ－５２全景　（南西から）


n.ＴＰ－５２層序　（北東から）

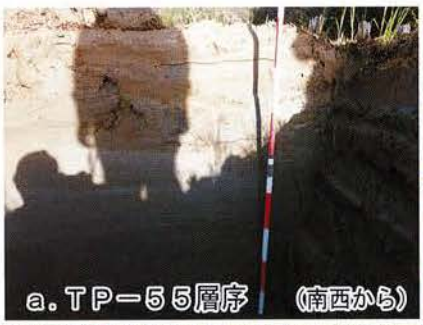
o.ＴＰ－５３全景　（北から）

p.ＴＰ－５３層序　（東から）

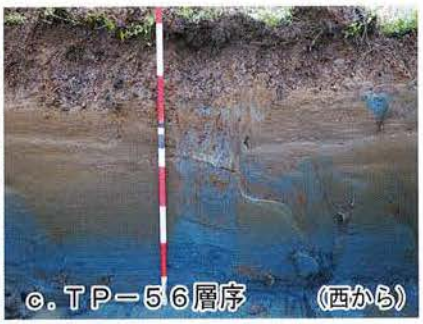
q.ＴＰ－５４全景　（北西から）

r.ＴＰ－５５全景　（北西から）

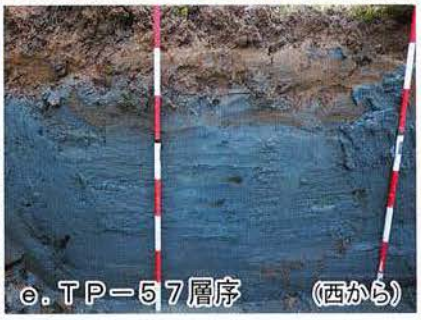
Ⅵ　畔屋地区　8


a．TP－55層序　(南西から)

b．TP－56全景　(北から)


c．TP－56層序　(西から)

d．TP－57全景　(北から)

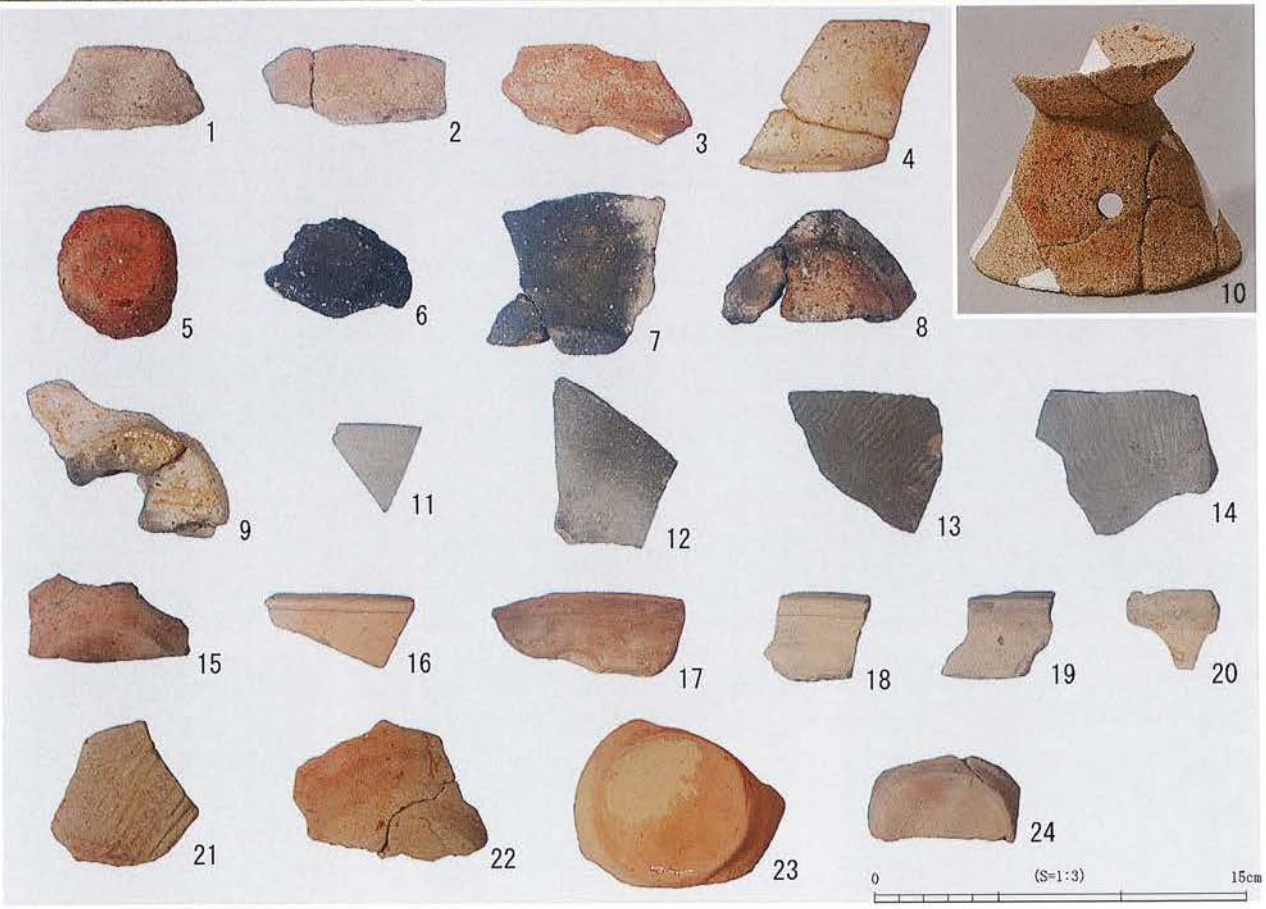

e．TP－57層序　(西から)

f．南入遺跡近景　(北西から)

g．本村遺跡近景　(北西から)

h．北入地区近景　(西から)

i．作業風景　(北西から)



j．出土遺物（外面）

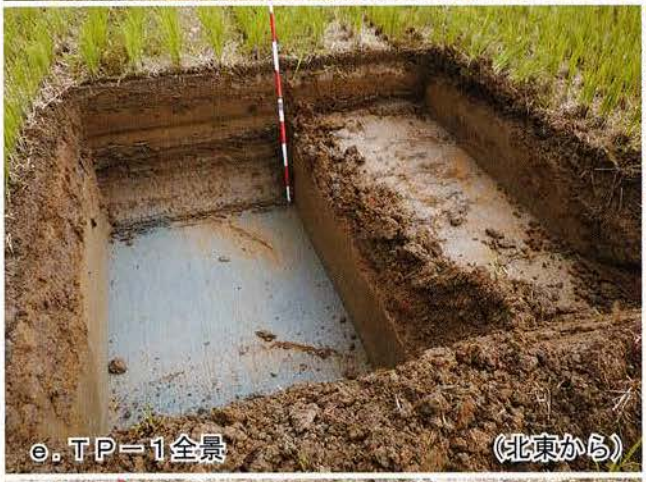
Ⅶ　本条地区　1

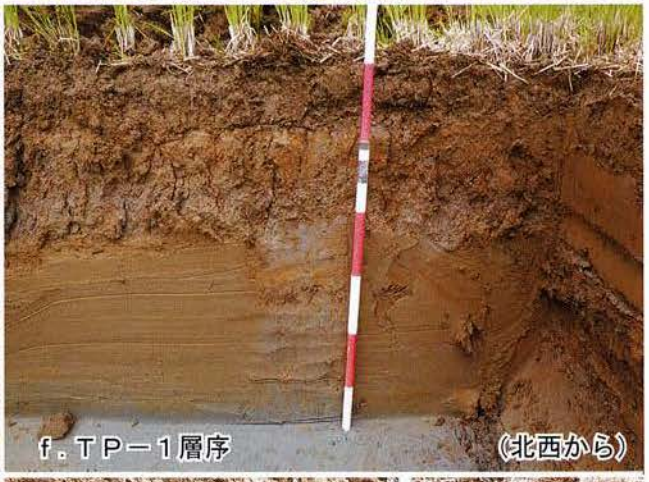
a．調査区近景　愛宕沖北　（東から）

b．調査区近景　今熊　（北から）

c．調査区近景　十日市　（西から）

d．調査区近景　東条北　（東から）


e．ＴＰ－１全景　（北東から）


f．ＴＰ－１層序　（北西から）

g．ＴＰ－２全景　（北東から）

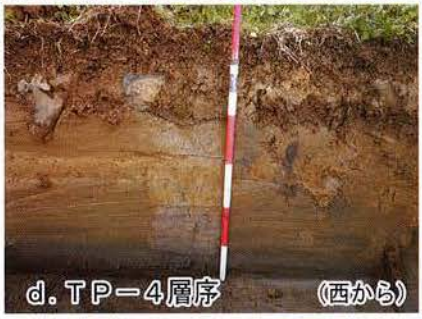
h．ＴＰ－２層序　（北西から）

Ⅶ　本条地区　2

a．ＴＰ－３全景　（南西から）

b．ＴＰ－３層序　（南東から）

c．ＴＰ－４全景　（北から）


d．ＴＰ－４層序　（西から）

e．ＴＰ－５全景　（北から）

f．ＴＰ－５層序　（西から）

g．ＴＰ－６全景　（北から）

h．ＴＰ－６層序　（西から）

i．ＴＰ－７全景　（西から）

j．ＴＰ－７層序　（南から）

k．ＴＰ－８全景　（東から）

l．ＴＰ－８層序　（北から）

m．ＴＰ－９全景　（南西から）

n．ＴＰ－９層序　（南東から）

o．ＴＰ－１０全景　（南西から）

p．ＴＰ－１０層序　（北西から）

q．ＴＰ－１１全景　（南西から）

r．ＴＰ－１１層序　（南東から）

Ⅶ　本条地区　3

a．ＴＰ－１２全景　（南西から）

b．ＴＰ－１２層序　（南東から）

c．ＴＰ－１３全景　（北東から）

d．ＴＰ－１３層序　（北西から）

e．ＴＰ－１４全景　（北東から）

f．ＴＰ－１４層序　（南東から）

g．ＴＰ－１５全景　（北東から）

h．ＴＰ－１５層序　（北西から）

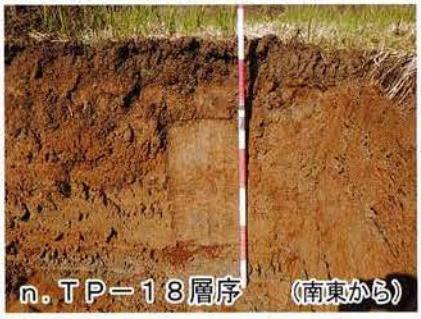
i．ＴＰ－１６全景　（北東から）

j．ＴＰ－１６層序　（南東から）

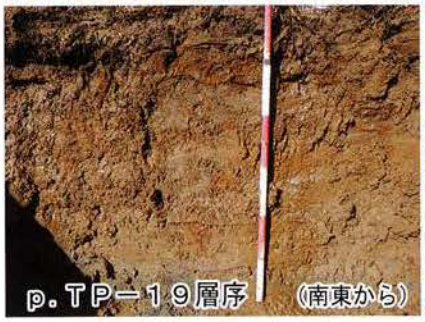
k．ＴＰ－１７全景　（北東から）

l．ＴＰ－１７層序　（南東から）

m．ＴＰ－１８全景　（南西から）


n．ＴＰ－１８層序　（南東から）

o．ＴＰ－１９全景　（南西から）


p．ＴＰ－１９層序　（南東から）

q．ＴＰ－２０全景　（北東から）

r．ＴＰ－２０層序　（南東から）

Ⅶ　本条地区　4

a．ＴＰ－２１全景　（南西から）

b．ＴＰ－２１層序　（南東から）

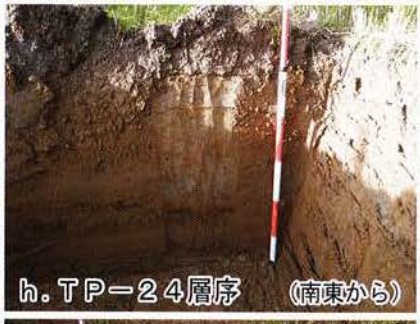
c．ＴＰ－２２全景　（北東から）

d．ＴＰ－２２層序　（北西から）

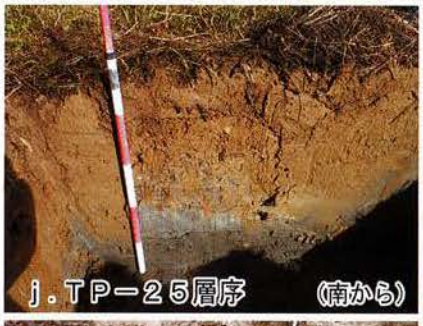
e．ＴＰ－２３全景　（南西から）

f．ＴＰ－２３層序　（北西から）

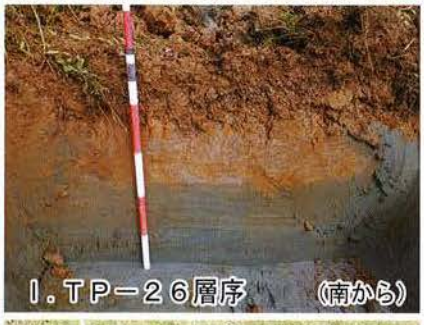
g．ＴＰ－２４全景　（南西から）


h．ＴＰ－２４層序　（南東から）

i．ＴＰ－２５全景　（西から）


j．ＴＰ－２５層序　（南から）

k．ＴＰ－２６全景　（東から）


l．ＴＰ－２６層序　（南から）

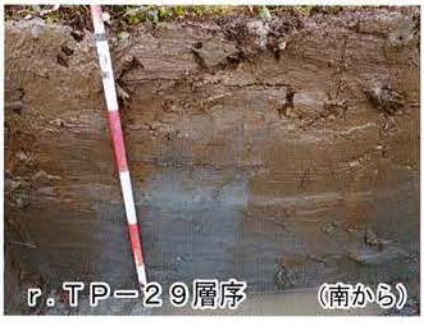
m．ＴＰ－２７全景　（南東から）

n．ＴＰ－２７層序　（南西から）

o．ＴＰ－２８全景　（西から）

p．ＴＰ－２８層序　（南から）

q．ＴＰ－２９全景　（東から）

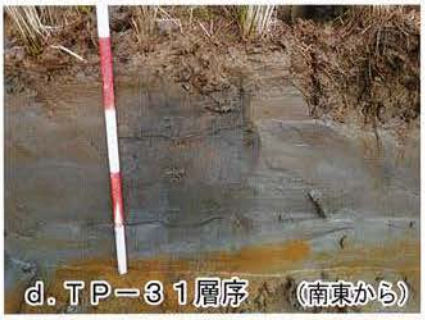

r．ＴＰ－２９層序　（南から）

Ⅶ　本条地区　5

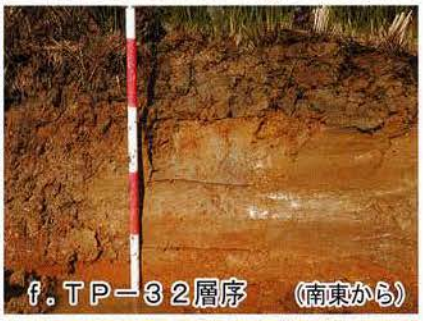
a．ＴＰ－３０全景　（北西から）

b．ＴＰ－３０層序　（北東から）

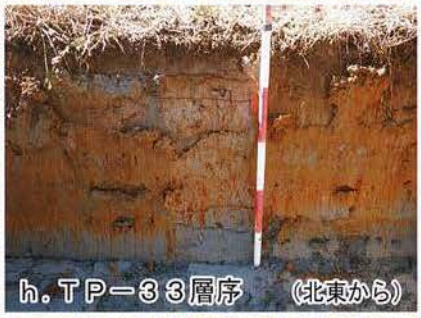
c．ＴＰ－３１全景　（北東から）


d．ＴＰ－３１層序　（南東から）

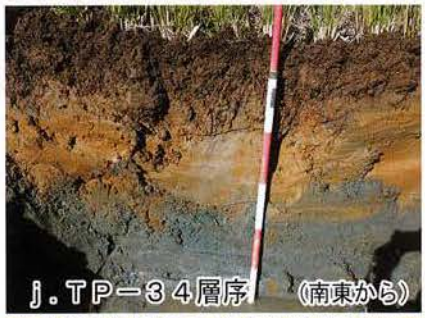
e．ＴＰ－３２全景　（南西から）


f．ＴＰ－３２層序　（南東から）

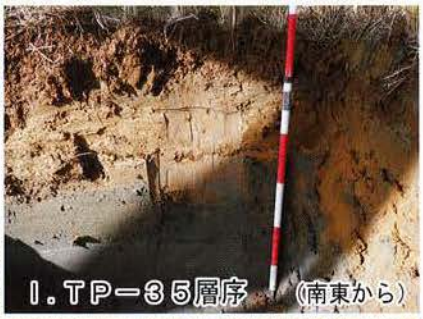
g．ＴＰ－３３全景　（北東から）


h．ＴＰ－３３層序　（北東から）

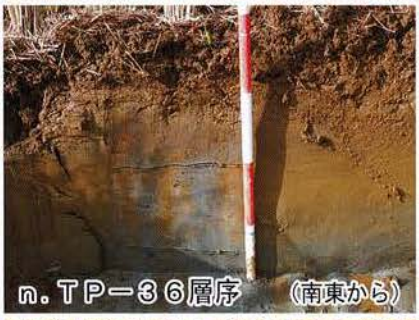
i．ＴＰ－３４全景　（南西から）


j．ＴＰ－３４層序　（南東から）

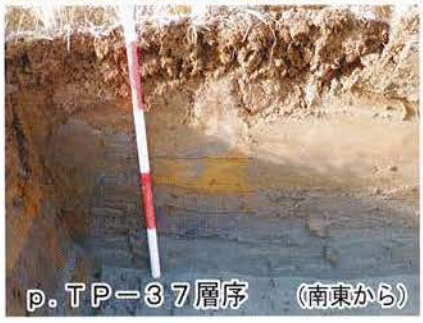
k．ＴＰ－３５全景　（南西から）


l．ＴＰ－３５層序　（南東から）

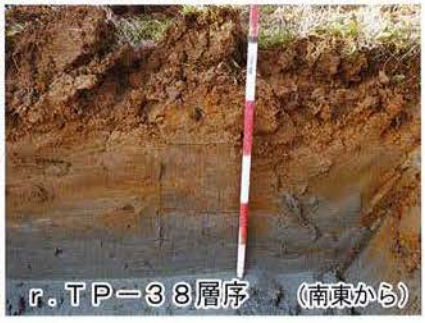
m．ＴＰ－３６全景　（北東から）


n．ＴＰ－３６層序　（南東から）

o．ＴＰ－３７全景　（北東から）


p．ＴＰ－３７層序　（南東から）

q．ＴＰ－３８全景　（南西から）


r．ＴＰ－３８層序　（南東から）

Ⅶ　本条地区　6

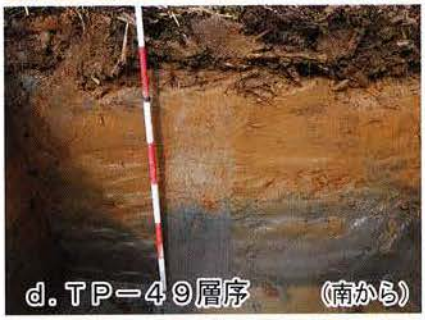
a.ＴＰ－３９全景　(南西から)
b.ＴＰ－３９層序　(北西から)
c.ＴＰ－４０全景　(北東から)
d.ＴＰ－４０層序　(南東から)
e.ＴＰ－４１全景　(北東から)
f.ＴＰ－４１層序　(南東から)
g.ＴＰ－４２全景　(南西から)
h.ＴＰ－４２層序　(北西から)
i.ＴＰ－４３全景　(南西から)
j.ＴＰ－４３層序　(北西から)
k.ＴＰ－４４全景　(南西から)
l.ＴＰ－４４層序　(北西から)
m.ＴＰ－４５全景　(北東から)
n.ＴＰ－４５層序　(南東から)
o.ＴＰ－４６全景　(南西から)
p.ＴＰ－４６層序　(北西から)
q.ＴＰ－４７全景　(南西から)
r.ＴＰ－４７層序　(北西から)

Ⅶ　本条地区　7

a．ＴＰ－４８全景　（北東から）

b．ＴＰ－４８層序　（南東から）

c．ＴＰ－４９全景　（東から）


d．ＴＰ－４９層序　（南から）

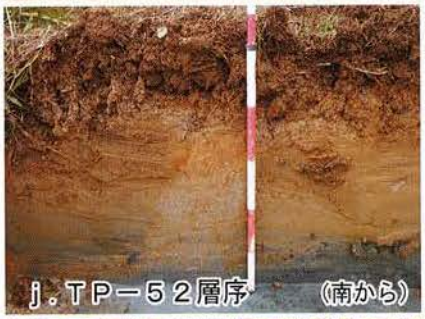
e．ＴＰ－５０全景　（南から）

f．ＴＰ－５０層序　（西から）

g．ＴＰ－５１全景　（西から）

h．ＴＰ－５１層序　（北から）

i．ＴＰ－５２全景　（東から）


j．ＴＰ－５２層序　（南から）

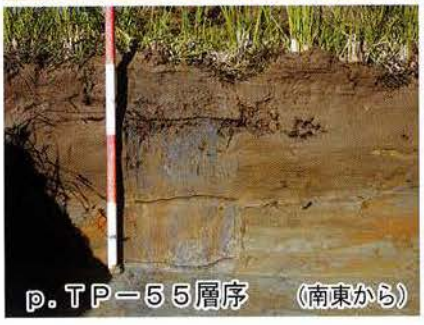
k．ＴＰ－５３全景　（東から）

l．ＴＰ－５３層序　（南から）

m．ＴＰ－５４全景　（南西から）

n．ＴＰ－５４層序　（南東から）

o．ＴＰ－５５全景　（北東から）


p．ＴＰ－５５層序　（南東から）

q．ＴＰ－５６全景　（北東から）

r．ＴＰ－５６層序　（南東から）

Ⅶ　本条地区　8

a.TP－57全景　(南西から)

b.TP－57層序　(南東から)

c.TP－58全景　(南西から)

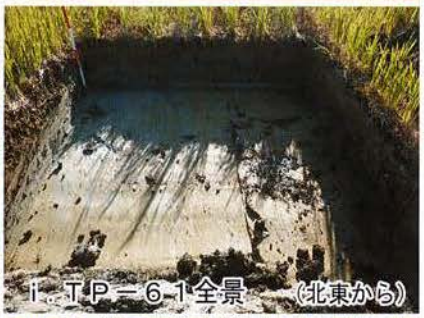
d.TP－58層序　(南東から)

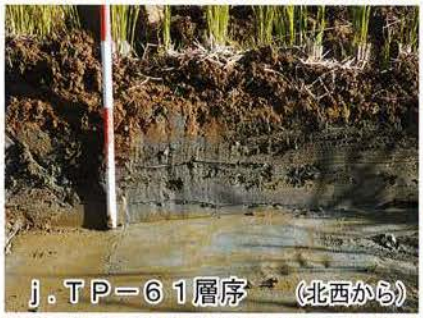
e.TP－59全景　(南西から)

f.TP－59層序　(南東から)

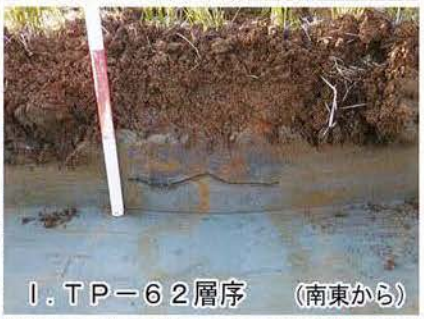
g.TP－60全景　(南西から)

h.TP－60層序　(北西から)

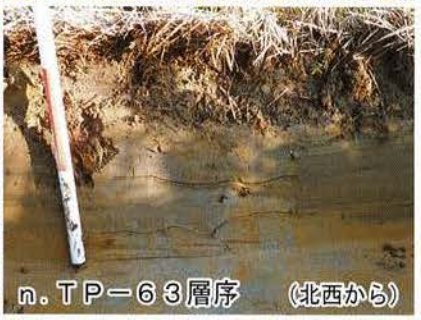

i.TP－61全景　(北東から)


j.TP－61層序　(北西から)

k.TP－62全景　(南から)


l.TP－62層序　(南東から)

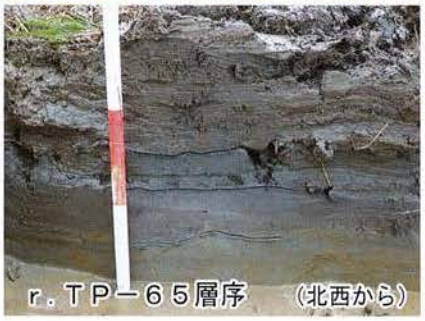
m.TP－63全景　(南から)


n.TP－63層序　(北西から)

o.TP－64全景　(北東から)

p.TP－64層序　(南東から)

q.TP－65全景　(南西から)


r.TP－65層序　(北西から)

Ⅶ　本条地区　9

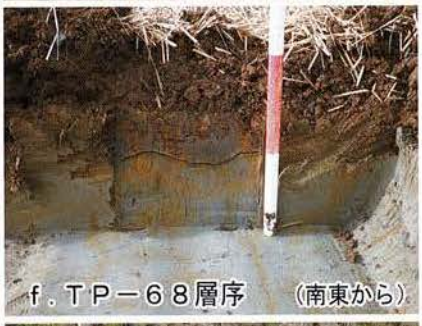
a．ＴＰ－６６全景　（南西から）

b．ＴＰ－６６層序　（北西から）

c．ＴＰ－６７全景　（北東から）

d．ＴＰ－６７層序　（南東から）

e．ＴＰ－６８全景　（北東から）


f．ＴＰ－６８層序　（南東から）

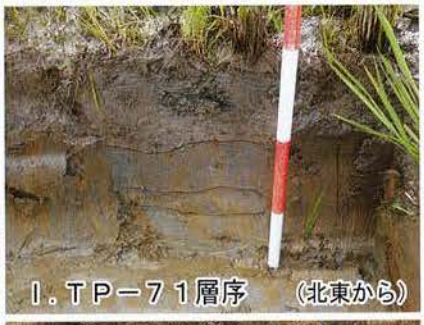
g．ＴＰ－６９全景　（北東から）

h．ＴＰ－６９層序　（南東から）

i．ＴＰ－７０全景　（南西から）

j．ＴＰ－７０層序　（北西から）

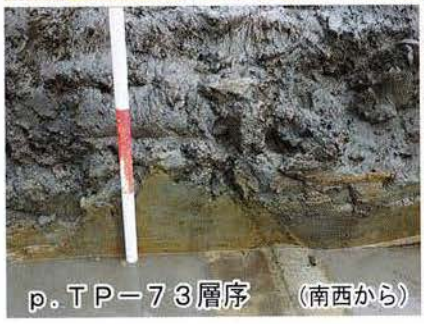
k．ＴＰ－７１全景　（北東から）


l．ＴＰ－７１層序　（北東から）

m．ＴＰ－７２全景　（南東から）

n．ＴＰ－７２層序　（南東から）

o．ＴＰ－７３全景　（北西から）


p．ＴＰ－７３層序　（南西から）

q．ＴＰ－７４全景　（北東から）

r．ＴＰ－７４層序　（南東から）

Ⅶ　本条地区　１０

a．ＴＰ－７５全景　（南西から）

b．ＴＰ－７５層序　（北西から）

c．ＴＰ－７６全景　（南西から）

d．ＴＰ－７６層序　（北西から）

e．ＴＰ－７７全景　（北東から）

f．ＴＰ－７７層序　（北西から）

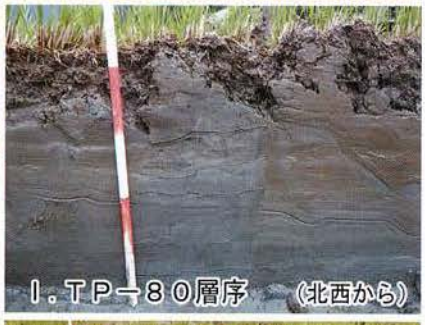
g．ＴＰ－７８全景　（南西から）

h．ＴＰ－７８層序　（北西から）

i．ＴＰ－７９全景　（北東から）

j．ＴＰ－７９層序　（南東から）

k．ＴＰ－８０全景　（南西から）


l．ＴＰ－８０層序　（北西から）

m．ＴＰ－８１全景　（北東から）

n．ＴＰ－８１層序　（南東から）

o．ＴＰ－８２全景　（北東から）

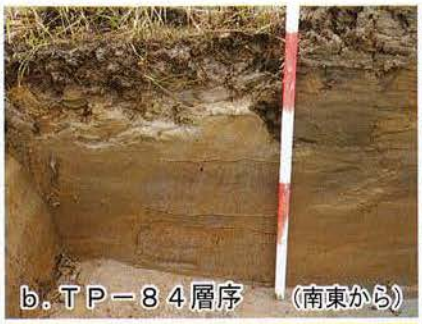
p．ＴＰ－８２層序　（北西から）

q．ＴＰ８３全景　（南西から）

r．ＴＰ－８３層序　（南東から）

Ⅶ　本条地区　１１

a．ＴＰ－８４全景　（北東から）


b．ＴＰ－８４層序　（南東から）

c．ＴＰ－８５全景　（南西から）

d．ＴＰ－８５層序　（北西から）

e．ＴＰ－８６全景　（北東から）

f．ＴＰ－８７全景　（南西から）

g．ＴＰ－８７層序　（北西から）

h．ＴＰ－８８全景　（北東から）

i．ＴＰ－８８層序　（南東から）

j．ＴＰ－８９全景　（北東から）

k．ＴＰ－８９層序　（北西から）

l．ＴＰ－９０全景　（北東から）

m．ＴＰ－９０層序　（南東から）

n．ＴＰ－９１全景　（南西から）

o．ＴＰ－９１層序　（南東から）

p．作業風景　（西から）

q．作業風景　（北から）

r．出土遺物（外面）

図版30

Ⅷ　上条城跡隣接地（第２次）

a．調査対象地遠景　（東から）　奥に上条城

b．調査対象地近景　（西から）

c．ＴＰ１完掘　（東から）

d．ＴＰ２完掘　（西から）

e．ＴＰ３完掘　（西から）

f．ＴＰ４完掘　（西から）

g．ＴＰ１土層（南から）

h．ＴＰ２土層（南から）

i．ＴＰ３土層（北から）

j．ＴＰ４土層（北から）

Ⅸ　馬場・天神腰遺跡（第４次）　1

a．調査区近景　（北から）

b．調査区近景　（南から）

Ⅸ　馬場・天神腰遺跡（第４次）　２

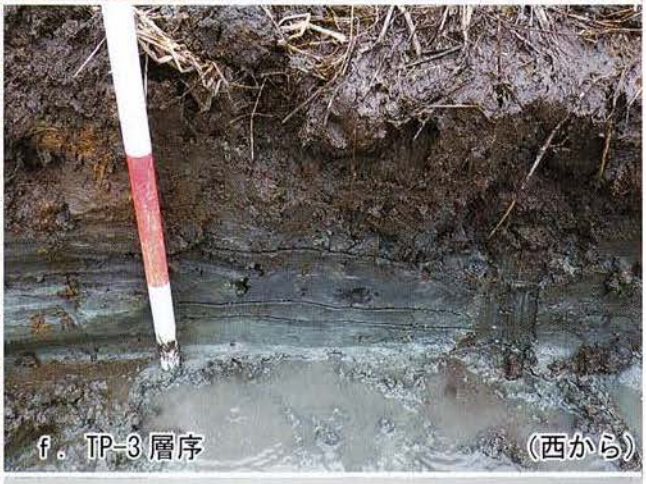
a．TP-1 全景　（南から）

b．TP-1 層序　（東から）

c．TP-2 全景　（南から）

d．TP-2 層序　（東から）

e．TP-3 全景　（南から）


f．TP-3 層序　（西から）

g．作業風景

h．出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	かしわざきしのいせき
書　　名	柏崎市の遺跡２９
副 書 名	新潟県柏崎市内遺跡　平成30（2018）年度試掘調査等報告書
シリーズ名	柏崎市埋蔵文化財報告書
シリーズ番号	第96集
編著者名	平吹　靖（編）　　中島　義人
編集機関	柏崎市教育委員会
所 在 地	〒945-8511　新潟県柏崎市中央町５番５０号　　TEL　0257-23-5111
発行年月日	２０１９年　１２月２５日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間 西暦年月日	発掘 面積 ㎡	発掘 原因
ふじもとちょうちてん 藤元町地点	にいがたけんかしわざきし 新潟県柏崎市 ふじもとちょう 藤元町	15205		37° 22′ 59″	138° 34′ 36″	20180426	16.7	試掘調査
にしいわのいせき 西岩野遺跡 だいろくじ （第６次）	にいがたけんかしわざきし 新潟県柏崎市 おおあざながさき 大字長崎	15205	313	37° 23′ 52″	138° 35′ 45″	20180522 ～ 20180615	446.5	確認調査
じょうとうちてん 城東地点	にいがたけんかしわざきし 新潟県柏崎市 じょうとう 城東	15205		37° 21′ 10″	138° 33′ 32″	20180718	34.65	試掘調査
そちしんでんちてん 曽地新田地点	にいがたけんかしわざきし 新潟県柏崎市 そちしんでん 曽地新田	15205		37° 24′ 16″	138° 37′ 24″	20180731	8.16	試掘調査
あぜやちく 畔屋地区	にいがたけんかしわざきし 新潟県柏崎市 おおあざあぜや 大字畔屋	15205		37° 22′ 16″	138° 37′ 18″	20181015 ～ 20181026	337	試掘調査
ほんじょうちく 本条地区	にいがたけんかしわざきし 新潟県柏崎市 おおあざきたじょう 大字北条	15205		37° 20′ 07″	138° 38′ 11″	20181029 ～ 20181115	430	試掘・ 確認調査
じょうじょうじょうあとりんせつち 上条城跡隣接地 だいにじ （第２次）	にいがたけんかしわざきし 新潟県柏崎市 おおあざじょうじょう 大字上条	15205		37° 18′ 42″	138° 33′ 54″	20181129	8.82	試掘調査
ばんばてんじんごしいせき 馬場・天神腰遺跡 だいよじ （第４次）	にいがたけんかしわざきし 新潟県柏崎市 おおあざみなみじょう 大字南条	15205	631	37° 19′ 53″	138° 37′ 55″	20190304	4.5	確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
藤元町地点	集落	古代・中世	ピット・土坑 溝	土師器・珠洲焼 陶磁器	藤元町西遺跡が新たに発見された。
西岩野遺跡（第６次）		弥生時代 （後期）	ピット・土坑 溝	土師器・須恵器 鉄製品	対象範囲全域に遺構・遺物の分布が 確認された。
城東地点			なし	なし	
曽地新田地点			なし	なし	
畔屋地区		古墳時代・ 古代	なし	土師器・須恵器	本村遺跡・南入遺跡・北入遺跡が 新たに発見された。
本条地区		古代	ピット・河川跡	土師器・須恵器	亀ノ倉遺跡の範囲を変更した。
上条城跡隣接地（第２次）			なし	なし	
馬場・天神腰遺跡 （第４次）		古代・中世	ピット	須恵器・青磁	対象範囲は古代・中世の居住域と 推定される。

要　約

本書は、国県の補助事業である市内遺跡発掘調査事業で作成した第29期の報告書である。平成30（2018）年度に実施した試掘調査等の8遺跡等8件の報告を収録した。

8件の調査では、5件の調査で遺跡の痕跡を確認した。これにより、4遺跡が新たに発見され、周知の3遺跡の内容を確認することができた。他の3件の調査では、遺跡の痕跡を確認することはできなかったが、関係するデータを多く集めることができた。

試掘調査等で得られる資料は、埋蔵文化財の保護に欠かせないものであり、本事業が果たす役割は大きいといえよう。

柏崎市埋蔵文化財調査報告書第96集

柏崎市の遺跡29

―― 新潟県柏崎市内遺跡　平成30（2018）年度試掘調査等報告書 ――

令和元（2019）年　１２月１８日　印　刷
令和元（2019）年　１２月２５日　発　行

発　　行　　柏崎市教育委員会
〒945-8511 新潟県柏崎市中央町５番５０号
印　　刷　　株式会社　小田
〒945-1352　新潟県柏崎市安田４１５３番地１